
Fate/ Black of Blade ~ 終焉を呼ぶ聖杯戦争 ~

霧丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / B l a c k o f B l a d e
〜終焉を呼ぶ聖杯戦争〜

【Nコード】

N7521M

【作者名】

霧丸

【あらすじ】

注意* 本作はPCでの縦書き変換のちの読書をお勧めします。

セイバールト
第五次聖杯戦争から3年の月日がたちそれぞれの道を歩んでいた魔術師たちが終結する

巷で巻き起こる猟奇殺人、人食いとなって黄泉返る慎一、再び現れた赤き弓士、

新たなる参加者とサーヴァント…

マスターとして選ばれなかった士郎だが、その手には新たな剣マギ
ウスの力があつた、さて6度目の聖杯戦争は士郎に何をもたらすのか

オリキャラ・オリ設定・オリ解釈が大量に出てくるので許容できる
人だけ読んでください。また不定期更新となります。

原作を知っていないと分からない個所が存在すると思います。

メインはFATEでほかのクロス作品キャラはほとんど出ません

結構人死に出ます

プロローグ（前書き）

今回、初めて投稿する霧丸です。なにぶん初めての事ですので不自然な箇所、文、表現が多いと思います。がなにとぞご容赦ください。また自分、精神耐性が低いためあまりきついこと言われるとへこむ可能性が高いです。

デモンベインキャラは殆どできてきませんのであしからず。

プロローグ

プロローグ

此度を含め冬木の市で行われた7人の魔術師による戦争

勝者にはあらゆる願いが叶うとされる聖遺物『聖杯』を巡る戦争
魔術師が聖杯により呼び出したる英霊を使い魔とし最後の一人となるまで続けられる戦争

それが『聖杯戦争』と呼ばれるものであり、今まで勝者となり聖杯を手に入れ己が願いをかなえたものは過去・現在未だ一人もいなかったそう“一人も”：

今回、五度目となりし聖杯戦争はじまって以来の勝者となった衛宮 士郎も例外ではなかった。

聖杯は願いを叶える万能の器などではなくただ、破壊を怨嗟を悲しみを悲劇を呪いをばら撒くだけの欠陥品だったのだ。

ここで普通ならただ彼の使い魔『サーヴァント：セイバー』が己の消滅を持って人々を救う、隠れた美談として終わったであろう。

だが、セイバーこと蒼き騎士王、“彼女”は初めて得た人としての安らぎを与えてくれたマスターである一人の青年を愛していた。そして彼も己がサーヴァントであるセイバーを愛していた。

ここで、マスターである青年は苦渋の決断を強いられることとな

る。

“愛する者の誇りを踏みにじり、多くの人を見殺しにして彼女と共にある”か

“愛する者を切り捨て、多くの者たちを人知れず救う”か…

どちらを選ぼうとも“みんなが幸福なハッピーエンド”とは程遠い物にしかない。そして、

“正義の味方”という幻想を目指した彼が選ぶ道はただ一つの悲劇しかなかった。

そして騎士王と正義の味方を目指した青年の別離から3年の月日が流れた……

冬木市近隣の山中PM：20：00

月の灯りのみが道しるべとなる夜の山を一人の青年が駆けていた。いや駆けると言わず翔けると言うべきか、なぜならば駆けると言うには一歩が大きすぎるのだ。

そして今、山肌に剥き出しになった巨岩の一つの上に着地、着地の

衝撃を全身をバネのように弾ませることで殺し、そのまま跳躍、闇夜に躍り出て木々の枝に飛び移り翔る。

その驚異的な身体能力を持つその青年は恐らく18ほどの日本人特有の顔立ちに色素が若干薄いのかやや茶色の髪とブラウンの瞳を持ち服装は工場などで使われる黒い作業服のズボンにスーツ用の黒いコートを羽織りまさに黒い疾風となって山を翔け抜けていく。

そんな彼れの前方30mほどの地点に3つの人影が立ちふさがる。半分ほどの距離で彼は立ち止る。その3つの人影見て彼はため息と共に語りだす。

「ふう　　全くいい加減にしてもらいたいものだ。毎度毎度付きまとわれては幾ら温厚な俺とて堪忍袋の緒が切れるというものだぞ？エクソシスト様よ」

男達の追跡が長かったのか青年の口調からいらだちが伺える

エクソシスト呼ばれた3人の人影彼らは皆、神父服を着ておりその顔立ちから全員外国人であろう。その中でも赤い目の中央にいた男が一步前へ出て事務的に自分に課せられた任務を告げる。

「吸血鬼：東雲亮、貴様を処分する。」

東雲亮と呼ばれた青年は赤い目の男を見据え口を開く。

「?…妄執に取りつかれた狂信者と出来損ない風情が俺を屠る…? 忠告しよう、出来ないことはないものではないぞ、それと強い言葉を吐くな　弱く見えるぞ。」

明らかに男達を見下した口調で見据える黒尽くめの青年が両手を左右に伸ばし“何か”を握るために掌を広げこの世にあり得ざる神秘を実行するためのキーワードを口にする。

「コンタミネーション・アウト
混合解除」

同時に彼の両腕から光の粒子の様な物が溢れ出る

そしてその粒子は彼の両掌の中で集まり棒の様なものを形造る。光が徐々に止み棒状の物体と思しきものは刀の輪郭を映し出す。そして光が止み彼が携えているものの姿が月の光によって映し出される

右手に握られた

赤い刀身に舞い散る白い桜の花が描かれた刀が

左手に携えられた

青い刀身に黒き風を意味する文様を刻まれた刃が

青年は全く同じされど正反対の日本刀を携え、両手をぶらんと垂らした『無為の構え』で神父服の男達に語りかける。

「さて、俺じきじきに闇稽古と往こう…生き残れたら及第点だぞ。さあ来い！代行者」

東雲の声を合図に赤い目の男は東雲に飛びかかりそれと同時に左右に飛んだ代行者のうち、左から黒鍵が、右から協会で破魔の概念が付加された宝石「聖晶石」のルビーから炎の矢が放たれた。

プロローグ（後書き）

次は戦闘となります。テスト期間のど真ん中なので更新遅れます。

第一話 吸血鬼を出来損ないと呼ぶ男（前書き）

オリキャラが活躍しますが主人公は土郎です。オリキャラは空の軌跡で言うところの緑の神父です。

第一話 吸血鬼を出来損ないと呼ぶ男

ここは、ありとあらゆる時間と空間の狭間の虚ろなる空間、今そこに二つの機械仕掛けの神が己が存在を否定死愛交わっていた。

「殺され殺され殺され続け、それでもいつかたどり着く」明日へと！...」

白き王が駆る最弱無敵の機神、魔を断つ意志の元何度折られようともそのたびに鍛えなおされた”人間のためのデウスマキナ” デモンベイン（無垢なる刃・明日への翼）

「三千世界の貴様を殺しそしていつかはたどり着く”終焉へと！”」

対するは血濡れの竜の翼を持つ赤き鬼神、鮮血神が機械の形を取ったもの、聖書に弓弾く獣が駆るは法の書の名を持つ絶望を与え続けた存在 リベル・レギス

「うおおおおおおおおお！！！！！！」

デモンベインが、マスターオブネクロノミコンが咆哮を上げる。

同時にデモンベインの背後に緑色に輝く魔方陣が浮かびその右手には、機械仕掛けの心臓：すべての並列した世界から無限の熱量を引き出す獅子の心臓から引き出された無限熱量が圧縮され光球となり携えられている。

そして...

「リベル！！レギスウツ！！！！」

デモンベインは空間を蹴り相対する赤い機神へと疾走する。

「デモンベイン！！！！！！」

また、赤い機神も自身に向かって迫りくる怨敵へ、その左腕の手刀にかつてハイパーボリア大陸を滅ぼした絶対零度の刃を宿し駆け出す。

「うおおおおおおお！！！！／シャアアアアア！！！！！！！！」

二体の機神は衝突し軌道を変え再び激突する。

「マスターテリオオン！！！！／大十字 九郎！！！！」

機神が交差するたびにその衝撃は世界を蹂躞する。

「ナコト写本！！！！／アル・アジフ！！！！」

白き王と黒き王、それぞれの半身もまた死力を尽くし否定死愛う狂ったロンドの調べに乗って

幾度も交差する二体の機神の描く奇跡はまるで彼らが今まで積み重ねてきた無限を現すかのよう に を描き出していた。

そして、

「レムリア・インパクト！！！！／ハイパーボリア・ゼロドライブ！！！！」

無限熱量と負の無限熱量が衝突し世界を壊す。

これは身くらう蛇のロンドの狂った調べの一節

だが、魔を断つ剣がその幾度となく繰り返された輪廻の末、世界は円環を打ち破り未来に向かって歩き始める。

だが、ことの黒幕である混沌はあきらめてはいなかった…邪神の世界の解放を…

混沌は再び魔を断つ剣を陥れ蹂躪しようとする。

もつとも新しき旧き神の子を、半人半書の子“大十字九朔”を使い…だが！！

「まったく、君たちは…君？達”はこんなところまで、こんなところまでやってくるとはね、旧神・エルダーゴッド！！！！」

混沌はその三つの燃える眼を輝かせ吠える。

己のもつとも愛しき怨敵達を見据え

そこに、立ち並ぶは積み重ねられた世界の骸からなる神器

第零封神昇華呪法兵装：シャイニング・トラペゾヘドロンより呼ばれし魔を断つ剣

“無限のデモンベイン” “デモンベインの軍勢”

傷だらけのデモンベイン・まだ生まれていないデモンベイン・アズ

だがここで、斃れるわけにはいかない失ってしまった感情を、この心に巣くった虚無を埋めてくれる存在と出会うまでは、斃れるわけにはいかない。

敵対戦力は3人・・・霊視能力を持つ俺の瞳が内1人の魂が常に崩れていつているのを捉える。なるほど死徒か・・・使える存在は使えるだけ使い、使いつぶすそれが奴らだ。

まあ、誰だろうと関係ない俺の命を狙うのならその命を捨てることは覚悟してもらおう！！

「出来損ないがどこまで出来るか見てやるよ、生き残れたら及第点だぞ。さあ来い代行者」

俺の挑発を合図に争いの火蓋が切って落とされる。

中央の吸血鬼は右手の鋼鉄さえバターののように切断する爪を腕ごと変形させ突っ込んで込んでくる、それと同時に左右の代行者はそれぞれ左右に飛びつつ左の奴は“復元呪詛”を無効化し貫いたものを炎焼させる“火葬式典”をまとめた暗器“黒鍵”を三本同時に投合する。それとタイミングを合わせて破魔の概念が付加された『聖晶石』のルビーを使い炎の矢を右の奴が放つ。

正面から驚異的な身体能力・再生力を持つ吸血鬼が、左からは貫かれたら最後の黒鍵が、右からはそれ自体大きな威力を誇る炎の矢が迫りくる。

俺は・・・前の吸血鬼に向かって駆けだす。

後ろの方で黒鍵と炎の矢がぶつかり互いの魔力・術式が干渉し爆発反応を起こす。

その爆発によって起きた爆風を背に受け加速に利用し速度を上げる。15m歩あつた距離は互いの驚異的な速度によって次の瞬間には零になる。

「汚らわしい吸血鬼め、滅びろ!!!!!!」

赤い瞳が俺を射抜き、憎悪の言葉と共にそれ自体が巨大な剣とも取れるほどに変形した右腕を自身の速度と相まって驚異的な速度で俺の心臓めがけ突きだす吸血鬼。

「ふッ……」

俺の口から僅かばかり笑いが漏れる……

突きだすその瞬間に俺は左の足を支点に体を半回転させる。本来俺の心臓を貫くはずの右腕は空中をむなく突くとどまる。そして右手に握りし紅き霊刀“白桜”を振り上げ空中を貫く右腕を切断する。

そして、その振り上げた状態の“白桜”を返し振り下ろす!!!!

「ガッ!!!!!!」

吸血鬼というのは、さすがというべきか本来、加速・思考速度等の観点から回避不可能な太刀をその身体能力を持ってすでに付いていた加速を無理やりねじ曲げ斬撃を回避する。

だが完全に回避できずその胴体には右上から左下にかけて大きな刀傷を負っていた。

二つ目の言葉と同時に“白桜”が青白い光に包まれその姿を弓へと変化させる。右手の握りに左手を添え青白い塊を手の中に作り出し引っ張りその塊は細長く伸び矢となる。

そして、ぎちぎちと云いそうなくらい伸ばされた弦を開放させ光の矢を放ち、

「スプリット!!!!」

第3のキーワードを口にする。すると矢は空中で十二に分裂し木々が佇む暗闇に吸い込まれていった……

「ぎいやああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!」

この世のものとは思えないほどの絶叫が夜の森に響き渡る。地面に横たわる吸血鬼の腕はその存在を維持できず灰となり消滅していく

この間、吸血鬼一体に重傷を与え、二人の代行者を戦闘不能に追い込むまで戦闘開始から実に20秒程度しか掛かっていない。

「コンタミネーション・オフ」

キーワードと共に左手に融けていった過程を巻き戻すように左手に蒼き刀身の日本刀が現れる。今だにダメージからかまともに戦闘態勢が整っていない吸血鬼に目を向ける。

「くっ!まさか一瞬のうちに我々がここまで追い詰められるとは・

・しかも貴様に負わされた傷が一向に再生しないとは貴様、邪悪な存在のくせに法具を使っているとは全く忌々しい！！貴様は我が命を対価にしようとも必ずここで滅してくれようぞ！！！！」

片腕で重傷を負い、勝ち目などないが底なしの憎悪を向けてくる吸血鬼。

だから俺はこいつにいつてやる。

「何ふざけたこと言ってるんだ？邪悪な存在だと？誰が決めた？しかも俺を貴様と同類と思ってるようだから言つといてやる。俺は吸血鬼なんかじゃねえ”そもそも貴様等みたいに他人の命を喰らわなければ己の存在を維持できない矮小な、不完全な、出来損ないと一緒くたするな！！吐き気がするわ！！！！」

「キサマああああ！！吸血鬼かどうかは関係ないだろうが！！！！人外は存在そのものが神への冒瀆なのだぞ！！！！だからわたし「しやべるな！！！！」」

こいつの持論は聞くに堪えない。

吸血鬼に向かって駆けだし吸血鬼とすれ違う。

次の瞬間、吸血鬼は八つの肉片に解体される。

こいつの持論は他人への“死の強制”人の未来を権利を一方的に傲慢にただ気に食わないからとそんな独善的な理由で奪う、正義を俺は認めない。

悪の対極は善であり正義にあらず、正義とは悪の行いを正当化するための免罪符であるが、故に正義に酔いし者を俺は、嫌悪し、外道を悪行を行いし者を断つ

それこそ俺である証の一つ

コギト・エルゴ・スム

我思う、故に、我あり

「さて、ほかの二人は運が良ければ助かるだろうし放置だな・・・
・・・にしても、ばかな連中だ人が生き物である限りいずれ人は違
う種となる、今の人以外を認めないと云うことは進化しないこと、
それは生物としては滅びの道じゃないか・・・」

吸血鬼であった物の死骸が灰となり風に運ばれていく・・・初めか
らそこに何者もいなかったように・・・

「さて、向かうとしますか・・・英雄の集う街“冬木市に！！”」

彼の参加する聖杯戦争はどのような展開を見せるのかそれは誰も知
らない・・・

第一話 吸血鬼を出来損ないと呼ぶ男（後書き）

テスト勉強合間に書きました。

第二話 帰宅

2月2日：正午

立春と呼ばれる時期であるが、最近は季節がずれてきたせいかめつきり暖かくなる気配など微塵も感じさせないなかここ冬木市はもとのからの気候なのか暖かく過ごしやすいことで知られる。

第四次聖杯戦争最後の戦闘が行われた結果、住宅地がほぼ全滅する大火災が引き起こされたそれから13年の月日がたち焼け跡は新都と呼ばれ近代的な発展を遂げていた。

そんな発展の象徴とも言うべきバスターミナルの空港直行便から二つの影が降り立つ。

「んんんんんんんんんんんんんんんん」と

両手を組んでそれを真上に伸ばし全身をほぐす赤毛の青年

それを

「オジサン臭いです。シロウ」

“ピシッ”

と、その傍らに佇むプラチナブロンドの髪をなびかせた金色の瞳の12、3ほどの少女の一言になんかそんな感じの擬音が聞こえてきそうな感じで伸びをしたままの姿で硬直する赤毛の青年こと第五次聖杯戦争勝者“衛宮 士郎”であった。

第二話 帰宅

サイド：イリヤ

聖杯戦争、父様・母様が参加して帰ってこなかった第四次聖杯戦争から13年、私が参加し義弟と出会い敗北した五回目の聖杯戦争から3年たった。

初め私は、父様が私を捨てて、どこの馬の骨とも知らない子に愛情を与えていると御爺様に聞いて、その子“士郎”に嫉妬し父様を恨んだ、だから八つ当たりしてやるんだと士郎と殺し合いをした。でも士郎と話しているうちに御爺様の言っていたことは嘘だと確信した、そして士郎から戦いが終わった後、言峰 奇礼によつて父様は聖杯の呪いを受けていたこと知った。

父様は帰れなかったのだ。なら父様が私に残してくれた私の義弟を幸せにしてやろう。それが聖杯であつた私の新しい生きる意味だ。

あれから私は、この武家屋敷に住んでいる。この父様が母様の「日本のキリツグの故郷の建物に住んでみたい」という願いを聞き購入した建物。そして士郎が私を受け入れ、家族の温もりをもう一度与えてくれた私にとって大切な場所、それがこの家。

この家に暮らし始めて最初の一年は本当に楽しかった。あれは幸福と呼ぶのだろう。

いろいろなことがあつた、みんなで夏祭りにいったり、初詣にいっ

たり、宝石翁が湧いて出たり（比喩にあらず）、士郎に家事を習ったり（家事が出来ない女は女として終わっているらしい）（桜談）

二年目になると

凜は時計塔へ行き

、
士郎は魔術使い達が集うアメリカのアーカムにあるミスカトニック大学へ渡った

それからは、ときどき来てくれる桜と士郎直伝の料理を毎日をたかる虎が一匹、しかもこの虎、性質が悪いことに飯だけではなく金まで私にせびりに来るから厄介だ。

（女どころか人として終わってないだろうか？）

まあ、そこそこ楽しく（虎の飼育と云う娯楽のおかげで）過ごせているけどやっぱりさびしいな、

でも

「私は、シロウのおねえちゃんだから、シロウの帰ってくる場所を守って、シロウに御帰りって言ってあげるのが仕事なんだからガマン、ガマン」

独り言が私の口から洩れでる。

こういふとなんだかこの前、大河の見ていたテレビにあった夫の留守を守る古き良き奥さんみたいだね……それも良いかも。

速く帰ってこないかなと、三年の月日による変化はすさまじい、バーサーカーと契約させられてから止まっていた私の体の成長が始まったのだ。今では母様譲りの絶世の美女になりかけだと自負している。

恐らく、聖杯が起動する前に召喚したバーサーカーを維持するため私の体は生命維持に必要な最低限の生命力を残して魔力に変換していたのだろう。

バーサーカーが座に還り、聖杯戦争が終わり私の聖杯としての役目も終わりを迎え人間としての機能を取り戻したのだろう。

士郎もたぶん立派に成長しているだろう、高校3年になっていきなり身長が伸びだし体つきもたくましくなっていた。あれが俗に言う成長期と云うやつか……

あいたいなあ……士郎……

ガララララララララ

「ただいま、イリヤいるか……」

その本人がいきなり帰ってきやがりましたよ。

心の準備も乙女の準備ももろ時間がかかるのに……

「む、誰もいないのか……?」

おっとこつしてはられない、一つ下の愛しい義弟を迎えに行きますか。

「シロウ~~~~~」

おかえり~~~~~ってその子だね？」

続く

第二話 帰宅（後書き）

今、現在のイリヤの容姿はアイリスフィールの少し幼い感じですよ。

第三話 再会（前書き）

感想待っています・・・

第三話 再会

1月31日 イギリス

3年前私は、7人のマスターによる殺し合い聖杯戦争に参加し、己がサーヴァントを失い敗北した。

それから、一年後、ここイギリス・ロンドンに存在する魔術師の総本山、時計塔へ私はやってきた。

それから二年、魔術使いが集う時計塔の敵対組織であるミスカトニツク大学へ進んだ士郎の事が気かりではあったが、日比研究にいそしんでいた。

ときどきかかわってくる金髪が少々煩わしいが……

そんなある時、私の右腕に懐かしい痛みが走った、令呪の兆しだ。

聖杯戦争を始めた御三家、“間桐”“遠坂”“アインツベルン”の三つの家計に属する者は必ず聖杯戦争のマスターとして選ばれ、残りの四人は聖杯を求める者から選ばれる。

すなわち、この右手に走る痛みは聖杯戦争再開を意味していた。

すぐさま私は手持ちの宝石（家の秘蔵の品）を液体に変化させて泣く泣く召喚陣を描く。

三年前と同じ愚を起こさないようしっかり時間を確認する。テレビニュースの時刻を確認するほどの徹底ぶりだ。

午前二時まで五分前

三年前と同じ聖句を口にし魔術回路に生命力を流し込み魔力を生成する。

魔術回路と魔法陣をつなげ魔力を循環させる。

「Der Grundstein ist aus Stein」
礎に石と

「Und der Grosshorzong des Vert
rag」 (契約の大公)

「Der Ahnist meiner grosser
Meister Schweinorg」.

(祖には我が大師“シュバインオーグ”)

Schutz gegen einen hcf t i
gger wind. (降り立つ風に壁を)

「schlies alles tor, Geh asud
er Krone」 (四方の門は閉じ、王冠より出で)

「Zikulir dis Gabelung」 (大国に至る三又路
は)

「nach dem Konig」 (循環せよ)

「Full, Full, Full, Full, Full, Full, Full」 (閉じよ、
閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ)

E s w i r d f u n f m a l w i d e r h
o l t . (折り返すつどに五度)

N u r i s t e s d i e v o l l e
Z e i t g b r o c h e n (ただ満たされる時を破刻する)「

魔術回路と魔法陣が完全にリンクし魔力が循環するを感じる

準備は整った。

もう一度始めよう、聖杯戦争を、今度は見捨てず戦い抜けるように

私は静かに目を閉じ

父の形見であり、

あいつがわざわざ回収してきてくれた紅く輝く宝石を握りしめなが
ら、

「 S a t z . “ 告 げ る ” 」

自分の精製出来る魔力だけでは到底足りない。

空気中の魔力もかき集め自分色の魔力に変換する

「 汝の身は我が下に

我が運命は汝の剣に」

魔術回路が悲鳴を上げ脳が沸騰する

「 聖杯の寄る辺に従い

この意、この理に

従うならば応えよ」

まるで羽が背中を突き破るような、尻尾を切り落とされるような痛みが

ファントムペインが私を襲う。

「誓いは此処に

我は常世総べての善となるもの

我は常世総べての悪を敷くもの」

この痛みに耐え、その先にある何かを掴む。

「汝三大主

言霊を纏う者」

それが魔術を行使すると云うこと

「抑止の輪より来たれ

天秤の守り手よ！！！！！！」ポーン

時計の鐘の音を限界まで敏感になった聴力が聞き取り

その瞬間三年前と同じく確かな“なにか”を掴み取った感覚を確か
に感じ

ゆっくりと目を開けた

そこには……………

何もいなかった…

「え？何で？今回は時間もちゃんとあわせたのに？」

“ドツガラ！！！！ガツシャーン！！！！！”（音って文字に
にくい）

上の階でなんかものすごい聞き覚えある破壊音がする……

「ああもう！！いったい何なのようおおおおおおおおおお
お！！！」

私は大声を張り上げながら音の発生源へと向かう。

このとき私はまだ気付いていなかったが、私の最高潮の時間は日
本時間午前2時で、
現在の時刻はE U時間午前2時であった。

音の発生元たる部屋の扉を叩くが歪んでしまったのか一向に開く気
配がない

「仕方がないか……ハッ！！！！！」

バアアアン！！！！！！

仕方がないので扉を回し蹴りで蹴破る（借家だが）

そして私は固まってしまった。

そこには3年前に共に戦った

嫌味な、赤い騎士にして弓兵が佇み

「やれやれ何とも随分乱暴な召喚だ……」

これはまたとんでもないマスターに引当られたものだな。」

寸分たがわぬ言葉を口にしていただけのだから。

第三話 再会

衛宮家の前には二人の青年と少女が佇んでいた

青年は日本人にしては珍しく赤毛に長身であり、がたいも良い顔も端正と言っていていい物でありたいに言えばかつこいいと言えるだろう。かつてあった幼い雰囲気はもうどこにもなく立派なひとりの男と言えるだろう。

そんな彼だが、近しい人物がみれば、この家の本来の家主「衛宮士郎」であると気付くくらいには面影が残っていた。

そして、少女の方はどこか神秘的な雰囲気をもちそのプラチナブ

ロンドが太陽光に透けてきらきらと輝いていることでなお一層、神々しいとまで取れる雰囲気振りまいていた。

サイド士郎

2年ぶりとなる懐かしの我が家

こうしてみると他の家に比べて随分でかい

「ここがシロウの実家ですか？」

プラチナムブロンドをなびかせた金色の瞳とぴよこんと立ったくせ毛が特徴的な少女は白を基調としたセーラー服に身を包み俺に問いかけて来る。

「そうだここだぞ、そしてお前の家でもあるんだぞお前は俺の“家族”でもあるんだからな。」

そう言うと少しうつむきしゃべらなくなる一体どうしたのだろう？
少し顔も赤いようだ？

「どうかしたのか？“ユノ”？」

「わふやい！！な、なんでもありません！！！！！！」

「うん？それならいいんだが……」

本当に何でもないのであればそれに越したことはないのだが心配だ。

等と考えながら門をくぐり扉を開けながら

家族に言つべき言葉と

さびしい思いをさせてしまったであろう妹分の名前を口に出し呼びかける。

「ただいま、イリヤいるか~~~~~」

“しーん”

.....返事がない。

「む、誰もいないのか？」

無用人だな等と考えていると。

「シロウ~~~~~」

居間から妹分であるイリヤがその雪のような銀髪をなびかせてやってきた

最後にあつてから二年たっているがイリヤはかなり綺麗に成長してスタイルも少なくとも聖杯戦争時の遠坂は超えているんじゃないかなるか。

キキッって感じの擬音語がでてきそうな感じで玄関で止まり。

「おかえり~~~~~ってだれその子？」

俺の後ろのユノに気付कि聞いてきた。まあ普通の反応だな。

「ああイリヤこの子は」シロウ、今すぐ警察いこ？」「っては？」

警察？は？なんで？

「イリヤ、何が言いたいのかさっぱり何だが…」

ほんとに分からない

「だって、その子シロウが襲って籠絡したんでしょ？どことなくセイバーに似ているし我慢できずに……およよ……」

およよとか言い始めたよこの妹分一体誰の影響だ！！！！！

うん、ひとりしかないな

「違う！！！無罪だ！冤罪だ！誤解だ！！！！」

「シロウ駄目だよ！！よその子に手を出しちゃ！！！！私には手を出していいから！！！！」

何いってやがりますかこの妹分は、虎に後でお仕置きするとして

「人の話を聞け！！！！何となくさに紛れて変なこと言ってるんだ！！！！」

この不名誉な誤解を解かなくては
ある立春の昼の出来事であった……………

それからとりあえずイリヤの腹の虫で昼飯にしようとなつ事になって

「で、ほんとはその子は何者？人間じゃないでしょ？」
いきなり核心を突いてくる妹分

まあアインツベルンは魔術師の中でもかなり優秀で歴史の長い家系だしイリヤの魔術師としての素質は桁違いだから黙っていてもらえばいいし、それなら話しておこうと考えていたから良いけどさ

「ユノは、俺の魔導書で俺たちの新しい家族だ。ほらユノ自己紹介をするんだ。」

ユノは少し前に出て軽く頭を下げながら

「魔導書：黒の剣年代記【クロニクル・オブ・ブラックブレイド】です。」

士郎からユノと名前をいただきましたのでそちらでお呼び下さい。「

うん、うまく自己紹介できたな、イリヤはどういう反応するかな？

とイリヤを見ると目をまん丸く見開いて固まっていた

「どっしたんだ？イリヤ？」

「え、嘘……………ンシロウの魔導書って精霊化してる上にあの“黒の剣年代記”なの？」

続く

第三話 再会（後書き）

いろいろ疲れた〜

シロウの朴念仁ツプリは健在です
アーチャーには実は秘密が隠されているのです

第3・5話 紅き弓兵の最後と門出（前書き）

アーチャーのアインツベルン城での戦闘がかなりオリジナルになっていて

オリジナル宝具がいくつか出てきます。

第3・5話 紅き弓兵の最後と門出

第3・5話 赤き弓兵の最後と門出

第五次聖杯戦争：アインツベルン城大広間

そこには今現在、私を含め3体のサーヴァントと三人のマスターがいる。

そして、わが陣営の戦力は私とマスターである凜のみといるだろう、協力者である最優のサーヴァントであると言われるセイバーは、魔力枯渇により消滅寸前

マスターである衛宮 士郎も何があつたかは知らんが体内の魔力循環・生命力がみだれ半死半生のあり様。

敵対するは、かの大英雄ヘラクレスがその理性と技を引き換えにその能力を大幅に強化されたサーヴァント“バーサーカー”現状における勝利確立は1%もあればいい方だろう。

「聞いて、アーチャー」

「凜？」

凜が僅かながらこの場を凌ぐ可能性のあるプランを思いついたのだろう。

セイバーは何も思いつかないらしくいや、考えないようにしているのだろう

彼女は誰よりも他者の犠牲を嫌うからな

「少しの間で構わない

アーチャー“ひとりでアイツを足止めして”」

ふむ、ほかのメンツでは足止めどころか犬死もいいところだ。

私であれば敵の足止めは可能、そして何より生存確率は0%ではない。

未熟者：衛宮 士郎とセイバーが凜に詰め寄り何か言っている。主従揃って甘い連中だ。

「懸命だな、凜たちが先に逃げてくれれば、“私も逃げられる”」

3人そろって何か思い悩んでいるようだから、自分たちがここにいれば私の邪魔になり生存確率を下げることになると言外に示唆する。

「そして何より、単独行動は弓兵の得意分野だからな」

少し格好も付けてみる

「アーチャー…」

「へえ、びっくり

リン、そんなどこの誰とも知れないサーヴァントで私のヘラクレスを止める気なんだ。

それって、本気なんだ

クスクス…」

まあ、今の段階でどこのだれか当てられた驚きだがな。

だが、見下される性に合わない、くっくっく……目に物見せてくれる。

「アーチャー、私……」ところで凜、時間を稼ぐのはいいが。」

何を言われると思ったが知らないが暗い表情の凜に私の宣言を聞かせる。

“別にあれを倒してしまっても構わんのだろう？”

凜よそんなに目を見開いてどうしたのだ面白い顔ではないか、ここにカメラが無いのが実に惜しい。

「アーチャー……アンタ

ええ、遠慮はいらさないわ、ガツンと痛い目にあわせてやって“アーチャー”」

ふむ、そう言われれば

「そうか、ならば……！期待にこたえるとしよつ。」

つと答えるしかないではないか……！！

二メートルをゆうに超える巨体で半神である奴のパワーは桁違いだ。振り下ろされる岩から削り出された斧剣を回避する。

だが、奴の驚異的なパワーにより生み出される速度によって斧剣の周りにいくつもの空気の断層が発生しカマイタチとなって私の体にいくつもの裂傷を作り出す。

まるで、削岩機だな

一合、二合、三合…

奴の、見ない刃をまとった斧剣を回避するも、

その余波で、カマイタチでそのたびに全身に傷を負って行く…

なんてワンサイドゲームだ、…だが！！勝機は必ず存在する！！！！

奴が斧剣を振り上げたその“瞬間”

奴の左わき腹を駆け抜けながら、“干将莫邪”で斬りつける。

バキンッ！！

む、干将莫邪が半ばから折れる。

奴の肉体強度が上だったか…

ダメージが大きい、全身の裂傷に加え全身打撲

ふ、これではあの未熟者を笑えんな…

「アハハハハ！！無様ねアーチャー？

あれだけ、偉そうなことを言っておいてそのていど？

せめて宝具くらいは出してほしかったわ

ね」

ふむ、私の沸点も意外と低かったようだ。

バーサーカーが止めを刺すために迫る

「時間稼ぎさも出来なかったわね！アーチャー！！」

もう少し出し惜しみするつもりだったけど仕方あるまい。

「そつか…ならば！！そうしよう！！！！」

狂戦士がその牙たる斧剣を諸手に持ち替え私に飛びかかる…

右手に自身の内なる世界から一本の幻想を、剣を取り出し

振り下ろされる前にただ切り裂く

ズシャアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

真っ赤な血が吹き出る

「え？一体どうして？なんで？」

“バーサーカーが傷ついているの？”

イリヤの口から現実をつまぐ認識できていないが故の言葉が発せられる。

バーサーカーの鋼より強靱なその巨体は袈裟切りにされ、血を噴き出しながら倒れる

そして、バーサーカーの背後には血に濡れた大太刀を携えた私の姿があった。

”ヒュッ！”

刀を一振りし、刀身についた血を払いのける。

右手に握りしは、“大包平”

かつて宮本 武蔵が姫路城の城主から借り受けかの城に巣くった妖魔達を一闪、ほとばしる鬨気にて消滅させた逸話を持つ大刀
日本刀の最高峰としても知られ、同サイズの日本刀に比べ強度・重量・切れ味すべてを凌駕する伝説級の現存する宝具の一つ

ここで、話はそれるが日本の神話に出てくる様々な霊的存在には善悪が無いとされる、故に悪霊を切れる刀は神も斬れるのだ。

だからこそ、この大包平も例にもれず相手が神であろう斬ることができる切断の概念が宿っている。

「！！！！」「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

突如、先ほど切り裂いたはずのバーサーカーが斧剣を持って襲い来る。宮本武蔵の剣技を模倣しその暴風の様な斬撃をいなす。

「ちっ！！！！！ヘラクレス、12の試練そついうことか！！！！！！」
バーサーカーの肉体が宝具と云うことはそついうことなのだろう
恐らく12回殺さなければ倒せないのだろう。
あの身体能力に12回の自動蘇生、なんて無理ゲーだ。

だが！！

「ならばあと最低3ついや、5つはもらって逝くぞ、狂戦士！！！！」

さすがに5・6はできても12回は無理だ。
凜たち人間の速度から考えてここで命を捨てる覚悟をしなくてはならない。

再び、私はバーサーカーに向かい駆けだす、

脚力を“強化”して速度を上げる。

先ほどと同じく、斧剣を振り上げた瞬間を狙う、だが！！

今度狙うは、

「まずは、腕を貫くぞ！！！！」

再び私を捉えようと振るわれる剛腕に大包平を当てる。

だが…

パキン！！！！「何！！！」

大包平が干将莫邪と同じく半ばから折れる。

「ならば！！！！」

すぐさま、

青い柄に金の装飾がなされ

まるで、蛇がとぐるを巻くようにねじれた

円錐螺旋状にねじられた刀身を持つ

切るためではなく貫くための剣

偽・螺旋剣【カラドボルグ？】を己の内なる世界より

取り出し

「ふんっ！！！」

奴の迫りくる左手に突き立てる

剣に込められた魔力をオーバーロードさせる

そして突き立てた偽・螺旋剣を支点に体を空中で回転させ威力を殺し、その背を足場に飛び上がる

”巻き込まれないように”

剣に込められた魔力が臨界点を突破し

剣に内包された概念を暴発させ、破壊のベクトルを得た魔力が暴発する。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオンン！！！！

爆発現象が発生し、バーサーカーの左手が吹き飛ばす。無数の肉片と血飛沫が舞う。

”カラン”

カラドボルグ？が転がり落ち、そして

”パリン”

ガラスが割れるけるように砕け砂になって消えていった。

「無駄よ！！！！バーサーカーに同じ攻撃は二度と効かないわ！！！！

あなたは、今のとさっきので宝具を使いつくしたでしょう？私の勝ちよ！！！！」

なら、それはそれでツ！！戦いようはある。

視線の先ではみるみる内に吹き飛んだ左腕のグチャグチャの断面から骨が生え筋繊維と神経線維が白骨を覆いさらにそれを岩のような肌で覆い再生していく

いちいち投影していたのでは奴の戦闘力に対応できない。

ならば、

あれを

使うか

「エル・キドウ【天の鎖】よ!!」

バーサーカーのその巨軀を無数の鎖が絡め取る

バーサーカーは鎖を引き千切ろうともがく。

「バーサーカー!!速くそんな鎖引き千切っちゃいなさい!!」

だが無駄だ!天の鎖は神に対して絶対の拘束力を持つ幾ら投影の劣化コピーだからと云ってやすやすと破壊などされない!ましてや奴ヘラクレスは半神だ天の鎖からは逃れることなどほぼ不可能だろう。

そして鎖から逃れようともがくバーサーカーをしり目に

私が私であるが故の呪文を口にし、世界を侵食する

” I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .
”
(体は剣で出来ている)

私にもあの未熟者のような時期があった。

「アーチャーが詠唱?!」

” S t e e l i s m y b o d y , a n d f i r e i s
m y b l o o d . ”

(血潮は鉄で、心は硝子)

己が理想に燃えていた、総べての死に瀕した命を救うのだと……

∴

「なんで、弓兵が魔術を使うのよ……」

” I h a v e c r e a t e d o v e r a t h o u s a n
d b l a d e s . ”

(幾たびの戦場を越えて不敗)

記憶を、想いを忘れても、忘れるな、自分が何のために戦うのか

「ヴオオオオオオオオオオ!!!」

バーサーカーがもがくが無数の鎖は尚その体を拘束し続ける

” U n k n o w n t o D e a t h . ”

(ただの一度も敗走はなく)

力なきものに誰かを守ることなど、出来ん!!

「しかもこの詠唱は一体何なのよ?!」

” Nor known to Life .”

(ただの一度も理解されない)

ならばせめて夢想しろ、常に最強の自分をイメージしろ

” Have withstood pain to create
many weapons .”

(彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う)

体を剣に、血潮を鉄に

「バーサーカー!!こいつ何かおかしいわ!!!!」

” Yet , those hands will never ho
ld anything .”

(故に、生涯に意味はなく)

遙かな高みへ、己が限界を超えて挑み続ける

「早く!!速く!!こいつを殺しなさいバーサーカー!!!!!!」

” So as I pray , unlimited blade
works .”

(その体はきつと剣で出来ていた)

私に出来たのは、ただ一つその果てがこの終局の世界

詠唱が完了し世界が赤い炎に包まれ変質する。

世界が炎によつて塗り替えられる

そして塗り替えられた世界は……

紅く燃える空に浮かぶ無数の歯車

ありとあらゆる剣が突き刺さる墓標の荒野

その紅く孤独な荒野にひとり立ちつくす紅き騎士

その世界は、

とても悲しく・さみしい世界だった

「こ、これは…固有結界！！！！」

最も魔法に近い魔術と云われる禁術

術者の心象風景が世界を侵食する

真に私の宝具と呼べるものはいや、わたしが使えるのはこの魔術のみ
剣製などこの固有結界を一本の剣に限定して展開しているにすぎない

バーサーカーは己がマスターを守護するために私を障害とみなし己
が意思で敵となる。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

バーサーカーが雄たけびを上げる

同時に、奴を束縛していた天の鎖が砕け光となって消えてゆく

私はおもむろに足元に刺さった剣【墓標】を引き抜き高らかに宣言する。

「御覧の通り、貴様が挑むは“無限の剣”

剣劇の極地恐れずして掛かってこい！……！！」

どれほどの時がたっただろうそこには2体の英霊が満身創痍で向かい合っていた。

2メートルを超す巨軀を持つ英霊は

右手が焼け爛れ

心臓に紅き槍が突き刺さり

腹には掘削でもされたかのような風穴を開け

左腕は凍りつき

右足は腐り

左足は縦に裂かれ

おおよそ傷のない場所などなく、なぜ息をしているのかさえ疑問である。

対する紅き弓兵は

左腕は二の腕から千切れ飛び

右足は大腿骨が折れ

左足は筋肉が断裂し

肋骨は折れ

内臓も損傷し、口から血を流している

それでも立っていた。

「さすが…最強のサーヴァントか…ガハッ」

息と共に血が吐き出される。

「私は…ハア…ここまでの…ようだが

文字通り…最後に…ガハッ…一矢報いるぞ」兵らしく
な…!!」

一本の魔剣を手元に手繰り寄せ、残った右腕で握りしめる

今までその姿を捻じ曲げ、劣化させて使用していたそれを

その強力すぎる本来の姿で

その一本の“約束されし勝利の剣”によく似た西洋剣を握りしめ、
魔力を流す

「憑依経験・共感終了」

剣の記録を読み取り担い手の技量・経験を自身に投影し疑似的な担

その疑問に答えることのできる者はもういない
半壊した大広間には先ほど起きたことを信じれず立ちすくむ少女と
ほぼ全身が炭化し墓の形状が分からないほど殺されつくした狂戦士
のみであった。

サイド アーチャー

バーサーカーとの戦いで使用した宝具

“カラドボルグ”【総てを断ち斬る堅き稲妻】

エクスカリバーの原点とも言われ、一撃で山を3つも断ち斬ったと
される魔剣

かの聖剣でさえ使用すれば万全の状態といえど消滅必至なのだ

さらに上位の宝具を使えばどうなるか火を見るより明らかだ

まあ、あの状態では長くはなつたので別にいいのだが…

魔力不足で本来の威力の半分も出ていないだろうが、それでもかな
り削れたはずだ。

あとは、あの未熟者と彼女に任せて私は消えるでしょう…

私よ、彼女を無限獄より解き放ってやってくれ…

私の意識が徐々に消えていく……今回も出来なかったな…

突如私の意識が覚醒する。

一体なんだと云うのだ？

体の傷が回復している。失ったはずの左手も元通りになっている。

そして何より、“なぜ私は落下しているのだ？”

遙か下に屋敷が見える、

さて私には飛行能力はない、どうしたものか…

“ドツガラ……！！ガツシャーン……！！”

私は屋根を突き破りその部屋ですることもないのでそこで瓦礫に腰かけていると

「ああもう……！いたい何なのようおおおおおおおおおおお
お……！！」

ものすごく聞き覚えのある声がする。

バン！バン！

扉がたたかれる。

「仕方がないか…ハッ！！！！」

バアアアン！！！！！！

扉が蹴破られ、私の記憶よりだいぶ大人びた彼女がそこにいた

“ なんですさ ”

すっかり使わなくなった口癖を心の中で使いつつ

とりあえずあの時と同じ台詞を口にする。

「やれやれ何とも随分乱暴な召喚だ…」

これはまたとんでもないマスターに引当られたものだな。」

続く

第3・5話 紅き弓兵の最後と門出（後書き）

はい、実はアーチャーは座から呼ばれた英霊ではなく聖杯戦争から呼ばれたサーヴァントでした
以下の通りでお願いします。

1：セイバー

2：ランサー

3：ファントム

4：その他のイレギュラークラス

4の場合はクラス名もお願いします。

出来ればクラスの固有スキルもよろしくお願いします。

28日の午後6時まで受け付けます。

第四話 安心と疑惑（前書き）

短いです

第四話 安心と疑惑

ある洋館の一室そこには異様な空気が漂っていた。

部屋の総べての窓には雨戸が閉められさらに遮光カーテンで閉め切られていた。

日光が僅かにも差し込まれないように、

そして、そんな部屋を蠟燭が照らしまるで黒魔術でも始めんばかりの雰囲気だ。

そんな、陰鬱な部屋で一人の老人が己の孫となる少女を呼び寄せていた。

“ ギイイイイ ”

古い年期の入った扉が開かれ件の少女が姿を現す。

「御爺様、お呼びでしょうか？・・・」

少女の声色から怯えが感じ取れる、この少女にとって老人こそ恐怖そのものと云っていい存在なのだろう。

「カツカツカツカツカ・・・」

そう怯えるな・・・御主にとって良い報告を知らせてやろうと思うてな。」

「私にとってですか・・・？」

「うむ、エミヤの子供が今日この町に帰ってきおつたわ……！」
すると少女の目が突如見開かれる

「先輩がですか！？なぜ……こんなときに……」

一瞬の喜びと絶望がその声から感じ取れる。

「うむ、その事についてじゃが……」

御主には今晚から奴の所に再び通ってはくれんかの？」

「見張り……ですか？」

おそる、おそる少女は老人に訪ねる

「勘違いするでない、まあ確かに見張りではあるが御主の大切な人物が聖杯戦争に巻き込まれんように監視するためじゃ。

今回、あ奴は聖杯に選ばれん、なぜなら“御主は”あ奴を“マスタートーに選ばんじやる？”」

カッカッカッカと耳障りな笑い声をあげながらひょうひょうと語る老人

「それは……そうですが」

少女は知っていたこの老人が自分のために何かをしてくれる“もの”ではないことを

「なに、例え巻き込まれても御主と争うことにはならんじやるうて
戦いは、“わしら男”の役割じゃからのカッカッカッカ……」

.....」

老人の厭な笑いが部屋に鳴り響く.....

第4話 安心と疑惑

「え、嘘.....シロウの魔導書って精霊化してる上にあの“黒の剣年代記”なの？」

魔導書、それは魔術書と違い己が意思を持ち自ら自身を手取るに相応しいものを選定する。

魔術書は特定の術式のみが記されそれを魔術師が習得することで記された魔術を行使できる

だが、魔導書はそれ自体が一つの魔力炉であり術者となつながらことで魔術の行使を可能とする。

言ってみれば、モーターとギアボックス【変速機】だ術者：モーターの力を何倍にも増幅するだが、同時に規格：魔力波長が適合しなければ意味はない。

魔導書を得ることが出来た者は強大な力を手にする、物理学者がスーパーコンピューターを使うように魔術師がそれ単体では到達できない領域へとその力を押し上げる。

その中でも最高：最悪の魔導書の一つそれが、

黒の剣年代記、

それは歴代の黒の剣「ストームブリンガー」の担い手の生涯
それと宇宙の真理が記された書

最も根源に近いと言われる書

数々の悲劇と世界の狂気を内封した書

かの書を求めた魔術師は後を絶たない

だが、手に入れた者は片手で数えるほどしかいないだろう

かの【死霊秘法】と同じく

サイド 士郎

「はい、恐らくその黒の剣年代記で間違いないかと思えます、イリヤ様」

ユノが丁寧に答える。

「私の事はイリヤでいいわ、それであなたに聞きたいことは分かるわね？」

イリヤは、知っていたのかユノに記された魔剣の事を

「理解しています。問題はないでしょう私とシロウの魔力波長はかつての主と比べ物にならないほど相性がよく、私の能力を120%以上引き出せます。またシロウは“あの剣”を完全に制御化にしています。まさしく私の主人としてシロウ以上の人材はいないでしょう。」

そこまで言われると、さすがに照れるな

「そう、ならいいわ、私もあなたを家族として扱うわ、でも今まで誰も成し遂げることが出来なかったあれの制御を出来るなんて

さすがシロウ、私の未来の旦那様」

はい？今なんと！！いつの間にそんなことになったんだ？

「イリヤ！！！！旦那様ってどういうことだよ？」

「酷いシロウ！！！！3年前、私の大切なもの（バーサーカー）を奪って、しかもシロウが何時帰ってきてもいいようにずっと留守を守っていたのに！！！！」

最後のはともかく

誤解を招く言い方をするな！！！！大体あの時襲ってきたのはイリヤだろ！！！！

拉致監禁までしたのはどこの白い小悪魔だ!!!

「なるほどシロウは既婚でしたか、しかも彼女の現在の身体年齢から推測するに当時の年齢は……さすがは、マスター・オブ・ネクロノミコンの弟子と言えるでしょう。」

「そっちの意味で弟子になった覚えはない!!!」

ほんとオレは変態じゃない!!!

「さらに、わたしにも手を出すとはさすがは彼の一番弟子です。」

「お前に何時、手を出した!!!」

ほんと誰の影響であんなに純粹だったユノがこんなことを言いたしたんだ!?

あのシスターか?!それとも、あのエターナルロリータか?!

どこか遠いアメリカの地とある魔導書の精霊が怒りのスー・モードに覚醒して主：旦那に八つ当たりしている気がするが気にしない。

「契約時に」

デモンベインの魔導書の精霊との契約方はキスです（by作者）

「なあああああ!!!あの時のことかああああ!!!」

「え、ナニしたの？」

「ええ、軽く（キス）ですが」

いづなああああああああ！！！！

「シロウって……そう言えばセイバーにも手を出していたわね」

「いいじゃないか別に、あいつとは好きあっていたんだから！！！！」

あいつの事は冤罪でも何でもないから認める反省も後悔もしていない

「開き直っちゃったよ……」

「開き直りましたね……」

ああ、厭な予感しかしない、てかなんでこの二人こんなに息合ってるんだ！？

「このロリコン！！！！」

恐るべきユニゾンで繰り出されたハートブレイク・ショット！！！！

その一撃は胸に深く突き刺さり意図もたや安く俺の心を打ち砕く

「誤解だあああああああああ！！！！」

とある青年の叫びがむなしく響き渡るのであった……

続く

第五話 哀愁（前書き）

以前書いた話もちよくちよく修正しています

第五話 哀愁

太陽が沈みかけ、空を茜色に染め上げる

窓から差し込む陽光によって今、士郎たちがくつろいでいる居間までもが染め上げられる。

「イリヤ、今晚の飯はどうする？」

「シロウ、久しぶりにシロウのご飯食べたいな」

イリヤはニコニコしながら士郎にリクエストする。

最後にシロウの食事を食べたのが2年前だから仕方がないと言えは仕方が無いのだが。

今、聞いているのはそんなことではない

「イリヤ、そうではなく食事を何にするのかを聞いているのかと思いますか？」

「ああそうだと・・・何にするんだ？」

“うーん”と口に指を当てながら頭をひねるイリヤ

「じゃあ・・・親子丼!!!!」

「ああいいぞ」

「シロウの料理は美味ですから楽しみです」

ユノの表情はあまり変わってないが楽しみにしているのが声色から感じ取れる。

「ユノはいいなあ向こうにいた間ずっとシロウの料理食べていたんでしょ？」

やはり、向こうの生活が気になるのかユノに尋ねるイリヤ、若干羨望も混じってはいるが

「時折、シスター・ライカと云う人物のもとで御馳走になりました。……俗に言う、大食いのただ飯ぐらいが複数いるので……」

淡々と語るが、僅かながらその口調ににがにがしさが混じっていた。特に後半

「ああそうだな……あの人たちのどこにあれだけの量が入るのか不思議でならない、魔術でも使ってるのかと疑いたくなるよ……ちよつどまるで藤ねえが2人いるような感じだ……ハア……」

ユノに同意するように士郎がつぶやく、よほど苦労したようだ。

「シロウ……大変だったんだね……」

士郎の憔悴具合にイリヤが目じりに涙を浮かべながらねぎらいの言葉をかけ、

そつと……土郎の肩に手を置く

「イリヤ……その気遣いが心に沁みるよ……」

夕焼けが世界を紅く染め上げていた

第五話 哀愁

サイド 土郎

さて、イリヤのリクエスト親子丼を作るにあたって材料を確認

玉ねぎ、醤油、砂糖、みりん、酒、鶏肉、青ネギ、
小麦粉、鰹節、昆布、ニボシ、卵、青ネギ

確認OK、

米は・・・まだたけてない

ならば、

米を研ぎ、水を捨て、新米だったのでちよこつと水を少なめにし水を適量に

ここで、寒天を投入し一緒に炊き込む！！

こうすると、米粒一つ一つが寒天でコーティングされ口当たりが良くなるのだ！！

そして、昆布・鰹節・ニボシでだしをとる。

その間に、鶏肉の半分を魚焼きグリルにアルミに酒と一緒に包んでゆっくり、じっくり酒蒸しにする

鶏肉が蒸し上がるまでの間に、鶏肉を一口サイズに切り、した味を調え

油を温め、このとき、麻の種の油を混ぜ香りをよくする。

パン粉と卵を混ぜ合わせ、先ほどの鶏肉と混ぜ合わせ、荒いパン粉をまぶし

先ほどの油で揚げる

そう、これはチキンカツだ

残りもサクサクと揚げていきますかと・・・

“ピンポーン”

呼び鈴が鳴る

だが揚げ物の途中で手を離すのは危ない

イリヤとユノは動ける、ユノは来客が知り合いだった場合余計な混乱を招くだろう

ここは、

「イリヤ、今手が離せないから出てくれ。」

「分かったよ、シロウ。」

”とてててて”

と玄関へ駆けていくイリヤ、

サイド イリヤ

「ハーイ、つとどちら様ですか？」

“ガラガラ”

私は玄関の扉をあけるそこには、

桜がいろいろな食材をスーパーの袋にいれて立っていた

「桜………」

「イリヤちゃん、今晚w「何をしに来たの？監視？」！！」

桜の言葉をさえぎる。恐らく臓硯の命令だろう。

「……私は、……先輩が心配なだけです。」

桜は俯きながらも口にする。

よく言う今回始めたのは、間桐なのに

「で、シロウは私たちの誰かが命を落としたらどう思うか貴方にも分かってるんじゃない？」

そう、シロウは私たちに何かあれば、自分のせいにする、分かっているはずだ。

私よりも長く、シロウを見ていたのだから。

「じゃあ……どう「何だ、桜だったのか」……!!」

後ろを見ると士郎がそこに立っていた。

サイド 士郎

とりあえず、全部のチキンカツを揚げ終わったので、酒蒸しをユノに任せて

いまだに戻らないイリヤの様子を見に玄関へ向かう。

すると、そこには険悪な雰囲気で見らみ合う桜とイリヤの姿があった
とりあえず玄関で喧嘩させるわけにもいかないので声をかける。

「何だ、桜だったのか」

「せ、先輩ご無沙汰しています。」

うん、二年前と同じように慕ってくれているようだな。

「ああ、桜も元気そうだな、こんなところにつつ立ってないで、今ちようど夕飯の準備しているところなんだ、その荷物からしてこんばんはうちで食うんだろ？早く中に入れよ。」

「あ、ハイじゃあお手伝いしますね。」

「ああ、頼むメインディッシュは大体できてるから、一品そうだな味噌汁とお浸しを頼む。」

「わかりました、上がった腕前見せちゃいます。」

「ああ見せてくれ。あ、あとユノっていう預かってる娘がいるからよろしく頼む。」

「ハイ！わかりました。先輩」

桜は、やや早歩きで台所へと向かう。

その場に残るは、イリヤとオレのみ

“ガララララ”

扉を閉めながらイリヤに桜との検温な雰囲気について聞く。

「イリヤ、桜と喧嘩でもしたのか？」

そう聞くとイリヤは少し悲しそうに

「うつんうつんのシロウ、これは どうしようもなかったことだって、どうやっても逃れることなんてできないって、だけど、何

ももがこうともせずただ、ただ従っただけのあの子が許せないだけ、
かつての自分と同じなあの子が許せないだけ……言
つてみればただの【同族嫌悪】なんだよね。」

イリヤの儂げな独白に込められた悲しみを感じて

オレはそれ以上聞くことができなかった。

続く

第五話 哀愁（後書き）

文章読みにくくないでしょうか？

第六話 家族（前書き）

キーボードが完全にご臨終
そしてリニューアル！！！！

第六話 家族

サイド 桜

イリヤちゃんとひと悶着あった……

仕方がないことだ……

なぜなら今回の戦いは間桐が起こしたことで、

私は、　　であり、　　れているのだから……

陰鬱な気分で台所に入る、

そこには、プラチナムブロンドを腰まで伸ばし前髪をあのセイバーのようにピョコンとたてたくせ毛の少女がいた、

おそらく、彼女が先輩の言っていたユノだろう

「あの、あなたがユノちゃんですか？」

わたしは、彼女に声をかけた

すると、その少女は振り向き私を見据える

その神秘的な輝きを持つ金色の瞳、狐のようなやや鋭い目つきが酷く印象的だった。

第6話 家族

サイド ユノ

「あなたがユノちゃんですか？」

私は、声をかけた人物に振り向き視界に入れる。

「あなたは？もしか、サクラという人物でしょうか？」

「え？なんで分かったんですか。」

分かって当然だ、私はかつてシロウの記憶を垣間見た。

魔導書は術者と一心同体、リンクが強くなれば相手の過去を垣間見ることがある。

シロウは私の中に記された記録を見たことがある、ならば当然逆も存在する。

その少女はシロウの記憶より大人びてはいるが判別不可能なほどではない。

「シロウから、故郷に慕ってくれる妹分がいてよく世話を焼いてくれた、

と聞いたことがありほかのシロウから聞いていた人物像と一致しなかつたためです。」

記憶を見た云々信じられるわけなのでとりあえず即興で言い訳を考え口にする。

魔導書の演算能力を生かせばこの程度容易に行える。

まあ、スペック上できるはずなのにできないアル・アジフこと【暴走機関車】

(走りだしたら止まらないから、命名シロウ)

後にシロウが惨殺体で発見されたのは別の話だ)

やる気のないハヅキ&リトル・エイダ

など、くせのある魔導書が多いのだが。

と、意識をサクラに戻すと少し落ち込んでいるのがうかがえる

今の会話のどこに落ち込む要素があつたのだろうか？

推測………サクラはシロウを慕っている

シロウは兄妹みたいなものと言っていたがイリヤを見る限りイリヤもシロウに恋慕の感情を持っていると感じる、それがサクラにも言えるとしたら………合致する。

つまり、サクラはシロウに対して恋慕の感情を抱いているが、シロウが妹としてしか認識していないと思えば落ち込んでいると推測。

「サクラ」

「あ、ハイなんですか？ ユノちゃん」

「シロウは、あの通り鈍感なので積極的にアプローチを仕掛けるべきかと、恋敵は多いですが。あと、シロウはサクラのことを大切に思っています。最後にユノと呼び捨てで結構です。」

「分かりましたけど、ひよっとしてユノも？……」

“コクリ”

私は、首を縦に振る

当たり前だ、私を本としてではなく

家族として扱ってくれた唯一の人物なのだから

私の悠久ただ一人の君

それが”シロウ”だ

「お？自己紹介が終わったところか？」

突如、本人が台所に現れる。

「ななななな何でもありません先輩！！！！」

桜がどもっている、そんな光景を見ながら

“相変わらずタイミングの悪い人だ。”

と、顔に微笑を浮かべながら他愛もないことを思っただった。

サイド 士郎

イリヤと桜二人の関係はよく分からないが、おそらく桜が何かに捕らわれておりそれが気に食わないと、

イリヤは自己嫌悪と言っていたが恐らく桜に自力でその状況を打破してもらいたいのだろう。

となるとオレの出番はあまりないな。

などと考えながら、オレは居間の戸をあけ台所に入る。

「……………けど……………よっとしてユノも……………」

と桜が何かを聞き、ユノがうなずいていた。

うまく聞き取れないが……

何か共通する話題を持つほど良好な関係をこの短時間に築けたのだらう。

「お？自己紹介が終わったところか？」

わざとぼけて聞いてみる。

「ななななな何でもありません先輩！！！！」

そんなに聞かれたら、まずいことでも話していたのか？

仕方がないので

「ユノ、なにを話していたんだ？」

ユノに聞いてみる。

「黙秘権を行使します。」

裏切られた。オレ主なのに

「シロウ、乙女の内緒話は聞くもんじゃないよ。」

突如現れたイリヤが”メッ”と指を立てながら言う

そんなもんか、男の俺には分からん

「そうです先輩!!!!」

「同意します」

ぷんぷんと頬を膨らませて同意する桜と

“コクリ”とうなずきながら同意するユノ

四面楚歌、孤立無援

「分かったよ、オレが悪かった。」

とりあえず謝り倒してこの場を逃れるとしよう

クッキング再開つと

いま台所の脂取り紙の上には熱々、サクサクのチキンカツと蒸しあがった鶏肉

鍋にはだし汁

「じゃあ桜、このだし汁使って味噌汁作ってくれ、おれはメインデイシユを作るから、

あと、だし汁は全部は使わないでくれ、使うから。」

「分かりました。任せてください。」

元気な返事をかえして作業に移る桜

さてオレは、先ほどのだし汁に、醤油、砂糖、みりん、酒を加え、

一舐めして味を確かめる。

うん

いい感じだ。

今度は、玉ねぎを切りたれでやわらかく、狐色になるまでじっくり煮込む

それができたら、チキンカツを鍋に並べその隙間を縫うように酒蒸しを並べる

卵の中身を計量カップに入れ菜箸でとく

そして、その解き卵をゆっくりと全体にかけ、

蓋をし、一分弱火でじっくりと火を通す

そして、どんぶりにご飯を入れ、盛るそして刻んだネギをまぶして

最後にどんぶりに蓋をして約一分蒸らして

ハイッ！！！！

特製 親子丼 完成！！！！

つと

「ユノ、イリヤ運ぶのを手伝ってくれ。」

夕飯ができるのを待ちぼうけていた二人に声をかける。

「ハローイ」

「了解しました、シロウ」

と素直に運んで行く二人

桜の味噌汁、お浸し、そして特製親子丼そしてお茶と箸が“5人分”テーブルに並べられる。

すると、ユノが

「シロウ、なぜ五人分用意されているのですか私たちは4人しかいませんが？」

もつともな疑問だ、オレとイリヤは目を合わせ、頷き合う

「ああ、それね……すぐに「イリヤちゃ………ん！
！！今日のご飯なに………！！」………こう
いうことよ………」

イリヤが、今まさに説明しようとした瞬間現れる虎

まあ、家族だしちゃんと帰ったら言うべき言葉を

「ただいま藤ねえ、元気だったか？」

言う、すると

きょとんと目を点にさせ固まってしまふ藤ねえ

「え？士郎？」

「他に何に見えるんだよ。」

「ほんとに、ほんとに士郎？」

いまだに現実を受け入れられないのか繰り返す藤ねえ

「だから、そうだって何度言わすんだよ。」

「だってえええ、士郎ったら全然連絡くれないんだもん
ほんっとつ、おねえちゃん心配だったんだよ!!!!!!」

目じりに涙を浮かべて手をぶんぶんふって訴えてくる

少し罪悪感がわいて来る

「悪かったよ、藤ねえこの通り元気だから・・・さ」

「謝ったって、ゆるさないんだから!!」

相変わらず素直じゃない姉貴だ

「分かったよ、こっちにいる間藤ねえの好きなもん作ってやるから
食いもので釣ってみる

「むう~~~~~」

唸る藤ねえ

食欲と意地が正面衝突しているのが分かる

「仕方がないなあ、今回はそれで手をうつてあげるよ、その・代・
わ・りちゃん私の胃袋を満足するのを作りなさいよ!!」

どつやら、食欲が勝ったようだ。

「さてっと、飯にするか。」

放置しておく

「あ~~~~、無視しないでよおオオ」

ぶつぶつ言いながらも席に着く藤ねえ。

久しぶりのメンツにユノという新しい家族を加えての

『いただきます!!!!!!』

最初の“いただきます”だ

続く

第六話 家族（後書き）

日常会話ムズイ

何気ないしぐさをいれた会話を目指しているんですが

どうでしょうか、

次でやっとバトれるかも？

いまのところ設定で矛盾したところはないでしょうか？
イリヤ成長設定とか

なんか、短編を連発しているだけのようないきがしてきた

第七話 変化（前書き）

総合アクセス、ユニークアクセス

累計 12,114 アクセス 1,978人

一万突破、多いのか少ないのかさっぱりだけど読んでくださる方に満足いただけるようがんばります

なお自分はギャグセンスが壊滅的なのでお笑いに期待しないでください

第七話 変化

温かい飯をみんなで囲み和気あいあいと食べる。

一般家庭ではありふれた光景だろう

だが、そんな

ありふれた、誰でも簡単に手にすることが出来るはず

そんな、幸せな空間

ただ、ただ

そこに、“あいつ”がいない

ただ、それだけなのに

こんなにも

こんなにも

虚無を感じる

胸にチクリと針が刺さったような鈍い痛みを感じる。

何か欠けてしまったような感覚がある。

ああ、オレはお前に安らかな最期を与える事が出来たかもしれないが

オレは、お前を幸せには、してやれなかった。

それが

こんなにも

こんなにも

悔しくて

悲しくて

何より、9を救うため1を

己の何よりも大切だと感じたお前【1】を切り捨てた

何より“オレ自身を許せない”

許せないんだ…… “セイバー”

だから……オレは【私は】……

「もう、悲劇に屈することがないように」

【あいつを切り捨てた自分を正当化するために】

「もう、“誰かを切り捨てることなく救う”覚悟を決めた。自分の罪を認めた。」

【切り捨てた以上、もう後戻りなどできなかった。自分の罪を認めたくなかった】

「【だから……!】」

「最良の手段で犠牲をなくすために」

【最善の手段で犠牲を減らすために】

「不条理を打ち破る力を」

【死屍累々の無限の戦を】

「【求めた】」

第七話 変化

サイド 士郎

「ねえ士郎？」

藤ねえが思い出したかのように聞いてくる

「何だ、藤ねえ？あと食いながらしゃべるなよ」

飯を口に入れがらしゃべっている下品だ

「うっーんとねえ、この子だね？」

なおもぐもぐと飯を口に頬張りながら、ユノについて聞く大河

「ほんと今さらだな、ユノ自己紹介するんだ。」

箸をテーブルに戻し息を整えるユノ

「誤解だし、育てられた覚えもない！！！！」

飯作ったり、面倒見たり普通逆じゃないのか？

「藤村先生、お、落ち着いてください」

桜、唯一まともでオレの味方だな

「タイガ、落ち着きなさい食事中に騒がない！！」

もっともだが、我関せず飯を食い続けるな

「アル・アジフからこう言えばいいと聞いたのですが。何か間違っていたでしょうか？」

「コテン」とくびをかしげながらマジで何がまずいのか聞いてくる
ユノ

真犯人覚えてやがれ

その頃

「にひひひひひ」

気味の悪い笑い声がとある探偵事務所から聞こえてくる。

「ど、どうしたアル？突然、悪代官が悪巧みに成功したような黒い不気味な笑いを浮かべて？九朔がビビって今にも泣きだしそうだから止めれ」

部屋の中にいた今にも泣き出しそうな銀髪の赤子をあやす二十代の黒髪、黒眼の男性

「いやなに、妾を馬鹿にした愚か者に仕返しが成功したような気がしてな。」

銀髪に近い桜色の髪に翡翠色の瞳の少女があまりに合わない口調で答える。

「なんじゃそら？」

本当にわけわからん????を浮かべる男性がアメリカのマサセーセツ州にいたとさ

サイド 士郎

虎の鎮静化にやっと成功した

いままでで一番カロリーを消費したのではなかるつか

「ふーんなるほどねえ」

とりあえず、霸道財閥に作ってもらったユノとの養子縁組の書類を見せながら

ユノがアーカムで事故により両親を失い孤児院も経営困難なため居場所がなったところをオレが引き取ったということを説明する。

まあ、全部ウソで書類も偽造なのだが。

「でも、切嗣さんと似ているとは思っていたけど同じことまでは、夢にも思わなかったわよ。」

「む、困っている人を見捨てたら人でなしだろ。」

すると、ユノを除く全員が

ぼカーンと固まっていた

「うん？どうしたんだみんな？」

すると“はっ”と我に返った面々が口々に語りだす

「え、士郎なんか悪いものでも食べた？」

む、失礼な虎だ

「藤ねえと一緒にしないでくれ」

どついつ意味よめと言つ叫び声は無視する。

「そんなに変わったのかオレ？」

「ええと、以前の先輩だと、何が何でも放っておけるかといった感じで理由なんか関係なしって感じでした。」

「確かに、そんな感じだったわね」

なるほど、言われてみたらそうだな。

でも、アーカムで過ごした二年が教えてくれた

「あの頃のオレはたぶん何もできない自分が許せなかったんだと思うでも、困難な出来事があったからこそ人は前へ進める。」

次の段階へ進むために必要かどうか

本当に許したらイケない悪かどうか

それを、見極めみんなが幸せになれる方法を模索して、実行するそれが本当の正義の味方なんじゃないかと思うんだ。

ただ、

そうしたいから、そうしなきゃいけないだとかそんな薄っぺらいモノじゃ誰も救えないと思うんだ。

でもやっぱり誰かが泣いているのを見ていたくない。

だからその困難を自力で打ち破れるように手を貸して、どうしようもないものをからは助ける。

一方的に困難を打ち払うんじゃないくて、一緒に困難を乗り越え、気持ちを共有するそんな正義の味方にオレはなりたい。」

ただ単に、力で相手を屈服させるそんなのは悪だ、相手に相手の事情がある場合がある

聖杯戦争でみんなが幸せになる方法だってあったはずだ、だけどオレは力がないことを理由にそれを思考を可能性を模索することをしなかった。

必要なのは相手を屠る力じゃない

必要なのは理想を貫き通す意志の力

無力が罪なんじゃない、考えないことが罪なんだ

「やっぱり、先輩は先輩ですね。」

桜が少し困ったような笑顔で言う

「確かに、士郎はどこまで行っても士郎だったかあ。」

どつという意味だ虎よ

「うっん、シロウは変わったね、うん いいよ今のシロウに出ている前よりずっといい」

こっちが見惚れそうな笑顔で言うイリヤ

ユノは以前のオレの話はあまり興味ないのか黙々とご飯を食べていた。

少しかなしい

続く

第七話 変化（後書き）

バトレなかつた~~~~汗

申し訳ありませんm | | m

感想ほしいっす

第八話 月の明かり（前書き）

PCバグった~~~~データがああああ!!

部品をxxxと復活!!自作の強み

第八話 月の明かり

夕食も終わり、桜が帰ると言うので大河が送っていくことになった。

「では、先輩おやすみなさい」

玄関で、桜を見送る。

「ああ、桜も気お付けてな、藤ねえちゃんと桜を送って行くんだぞ。」

一応人外っぽい実力があるため大概の危険はどうかなるだろうが、夜道に女性二人はやはり不安だ。

「おねえちゃんにまつかせなさあい!!」

胸をドンッと叩く大河なぜか、大丈夫ということアピールする行為ではあるが不安をなぜか掻き立てる行為である。

「タイガ、ちゃんと寄り道せず帰るのよ、もしまた寄り道してららいガに言いつけてやるんだから。」

そう、そういう意味で心配なのだ。

「せ、先輩もイリヤちゃんも藤村先生はこう見えてちゃんとした大人なんですから信用してあげないと。」

「うんうん、桜ちゃんは、素直でいいこだね〜」

桜に抱きつき、頬ずりしている大河、だが気づけ桜が言っている

のは初めてのお使いに行く子供を擁護するのと同じ意味を持つて
ることを

第八話 月の明かり

サイド 士郎

オレは、久しぶりの我が家を見て回っていた。

桜と藤ねえを見送り、今ユノとイリヤは風呂に入っている。

屋敷の状態は良好でイリヤが手入れをしてくれていたようだ。

そうこうしているうちにいつの間にかオレは縁側にいた。

そして、月を見上げる。

こんな、月の綺麗な夜だった。

この縁側で並んで月を見上げながら

爺さん：キリツグの最期を見送った。

【いいかい士郎、誰かを救うということは他の誰かを救わないとい

うことなんだよ。】

【ああ…安心したよ】

この縁側で彼女を“セイバー”を抱きしめ、

セイバーに想いを伝えた。

【シロウは卑怯です、私の過去を知って、何度も私の中に入ってきて…

私の答えなど知っているはずなのに、私がどれほど罪を重ねてきたのか、あなたは知っているのに…】

自らに課した責務と罪それに自分の気持ちとの間に揺れる彼女に口づけをした。

ザッザッ

庭に降り立つ、砂を踏みしめる感触、音が心地いい

周りを見回すあの日のことが思い出される。

そして視界に土蔵が入る、彼女と初めて出会った場所が

“ぎいいいい”

土蔵の戸をあける、誰も使わなかったであろう錆びついた戸をあける。

あの時の光景がフラッシュバックする。

【サーヴァント：セイバー召喚に従い参上した

“ 問おう、あなたが私のマスターか？”】

あの時、オレは声が出なかった。

突然現れた少女、そのあまりの美しさに声が出なかった。

【マスター、あなたの心をお借りします。】

彼女の鞘を彼女に還した。

そして、

オレは言峰と、セイバーはギルガメッシュとの戦いに赴いた

勝とうが負けようが彼女が帰ってきはしない戦いに、

今はまだ、覚えていられる

彼女の声を

彼女の姿を

彼女の何気ないしぐさを

それが思い出になってしまったけどまだ覚えていられる。

だけと思いい出になってしまったことが悲しい。

彼女を救う手段を模索するそんな当たり前のことをしなかった

それが、オレの罪

あいつを見捨てて、理想を選んだ

だけど、オレの理想はすべてを救うことではなかったか

捨てたものは戻らない、二度と戻らない

今、オレを苦しめるこの気持ちに胸に有る虚無感が罰なのかは知らないし、分からないけど、もう一度会いたい、お前に会いたい。

未練がましいとお前は言うかもしれないがもう一度、お前に会いたい

会いたいんだ……“セイバー”

「シロウ、こんなところで何をしているの？」

記憶の海に沈んでいた思考がいつの間にかいたイリヤの掛け声によって現実に引き戻される。

彼女は浴衣に身を包み後ろに立っていた。その白銀の髪が月明かりに照らされて輝いている。

「ああ、懐かしく……てな……」

あながち間違っているとも間違っていないとも言える答えをイリヤに返す

「セイバーのことを思い出していたんでしょう？」

とたん心臓を鷲掴みされたような感覚が走る。

「イリヤには隠し事はできないなあ、ああ、あいつのことを思い出していたよ」

目を閉じるあいつの笑顔が浮かぶ

「そう……なんだ……ねえシロウ、シロウは私を置いていかないでね」

イリヤがどこか悲しげな表情をする

「イ、イリヤ？」

「私は、シロウをセイバーみたいに置いていかない、だからシロウは私を置いていかないでね……お兄ちゃん」

手を後ろに組み月を見上げ神秘的な笑みを浮かべるイリヤ

オレはあの時と同じように声が出なかった

あまりの神秘的な儂げなそれでいて力強い笑みに見惚れて声が出なかった。

深夜一人の女性が夜道を歩いていった。

彼女は、残業で帰りが遅くなり精神的にも肉体的もたまった疲労を癒すべく自宅に向かっていった。

そして新都と住宅街を結ぶ大橋を渡り終えた先にある公園に通りすがっていた。

“ヒュウウウウウウウウウウウ”

嫌な風が吹く

今は、真冬だというのにしけた生温かい風が吹く

気味が悪く思った彼女は、急ぎ足で公園を横切ろうとする。

“ガサツ”

少し前に有る茂みが音を伴い揺れる。

「な、なに？何かいるの？」

恐怖から声を出さずにはいられなかった。

“ニャアアア”

茂みから真つ黒な猫が飛び出し闇に消える。

“なんだ猫か”と安堵の息を吐きながら胸をなでおろす。

突然！！後ろから

“グルウウウウ”

“メエエエエ”

“シャアアア”

いくつもの異なる生物の鳴き声が一点から聞こえてきた。

恐る恐る振り向くと

音の正体はゆっくりとその姿を現す

「ヒッ！……！」

その姿は

黒獅子の巨軀に蝙蝠のような羽が生え、

蛇の頭を持つ尾があり

獅子の頭部に加え、赤い目を光らせた不気味な黒い山羊の頭、に牛のような生き物の頭が三角形を描くように生えていた。

そう、キマイラ、伝説上でしか存在しないはずのバケモノがそこに存在していた。

現実ではありえないその異形を前に女性はただ恐怖に震える事しかできない。

徐々に涎を垂らし、不気味な鳴き声を発し、赤い目を光らせながら女性に歩み寄る。

「ヒッ！！！！いやあああああ」

恐怖を危機感が超えたのか振り向き走り出す。

しかし

“グルウウウウウ”

走り出した先にもう一体のキマイラが現れる。

絶句し女性は悟った

“もう駄目だ”と

キマイラが女性に飛びかかる

“ブチッ”

キマイラの一体が首を食いちぎる

“ブシャアアアアアアアアアアアアアアア”

頭を失くした体は糸の切れた人形のように倒れながら首の断面から鮮血を噴き出す。

“グチャ” “バキッ” 食いちぎられた頭が咀嚼される音が響く

二体のキマイラは女性の残りの体を食らうべく死体に迫り

”グチャ” “ベキッ” “バリバリッ” “ブチユッ” “ブチイイ” “グチャグチャ”

女性の亡骸を引き裂き噛み砕き咀嚼するキマイラ

“ピクッ!!!”

突如キマイラが何かを感知し公園の街灯に照らされていない暗闇へその血の滴り落ちている全ての頭を向ける。

「すまないな……後、2分早く来るべきだった。」

暗闇からそんな声とともに一人の黒いコートを羽織り前はきつちりボタンで閉じられ、腰を黒いベルトで固定した青年が現れる。

「だが、仇は取ってやる

【コンタミネーション・オフ】」

青年の声を合図に腕から淡く光る粒の様なものが溢れ

その手の中に集まり赤と青の金属光沢を放つ二刀一対の日本刀が姿を現す。

「貴様らのその出来損ないの命、もらいうけるぞ!!!」

続く

第九話 闇と光の葬り人（前書き）

オリキャラがチュウニくせ〜

第九話 闇と光の葬り人

「貴様らのその出来損ないの命もらいうけるぞ」

黒いコート青年こと東雲 亮は一体の異形に宣言する。

第九話 闇と光の送り人

犠牲者となった女性を見据えるもはや、“人ではなくなっていた”
原型をとどめていなかった、あれなら解体された魚のほうがよっぽ
ど原型を残していると言えよう。

“チャツ”

刀を構え視線を異形へと変え見据えるそして、

目を瞑り自身の内に眠る魔を喰らう魔剣を呼び起こす

「魔剣覚醒・影」

左手に握っていた霊刀“渦風”を依り代に魔なる剣を顕現させる

渦風その蒼い刀身に黒い霧の様なもの“闇”が集う

闇が集う

闇が集う

闇が集う

闇が集う

もはや、黒い塊にしか見えなくなった渦風を一閃、闇がふり払われる中から、変貌を遂げた渦風が現れる。

その蒼かった刀身はどこまでも吸い込まれそうな漆黒の刀身に

その鋭利な刃は、まるで鯨の刃のように細かい刃が並びまるで鋸を刀にしたような刃を持っていたそれは押せば切る、引けば“削り裂く”ものへと変貌していた、

まるで、あらゆるものを引き裂く魔剣へと変貌していた。

そして、ゆっくりと亮はその双眸を見開く

ブラウンだった瞳は血のように紅い右目に月の様な光を発する金色に変貌していた。

「さあ、始めよう一方的な捕食を……縛れ、シャドウバインド」

彼の呼び掛けに応え暗闇から、キマイラの陰から無数の影でできた鎖がキマイラを縛り拘束する

「影よ貪りつくせ、その命を!!!」

“ A、f jぎおgひおあd hぎおあg h f ”

突如、形容不明の叫びを上げ出すキマイラ

その体は、徐々に干からびていき

「どうだ？ 貴様らが殺した者たちと同類の苦しみだせいぜい味わえ
” 働き蜂” 共」

“ A、AAGUUU……”

物言わぬ軀と化し、灰となって消えていった。

【コンタミネーション・オン】

剣は、巻き戻し再生のように光となって亮の腕に溶けて消えてゆく。
亮の双眸もまた元のブラウンへと戻る。

「さてつと、あのままツて言つのも酷だな……送るか」

亮は犠牲者の元へと歩み寄る、すると

“ バサツ！バサツ！”

亮の背から青白い光でできた翼が生える羽ばたき、舞い散る光の羽
があたりをぼんやりと幻想的に青白く照らし出す。

【私が殺す。私が生かす。私が傷つけ、私が癒す。

我が手を逃れうる者は一人もいない。我が目の届かぬ者は一人もい
ない。】

亮が口訣を口にする

すると、女性の亡骸はあたりに舞い散る羽と同じく青白く発行し始める。

【打ち砕かれよ。

敗れた者、老いた者を私が招く。私に委ね、私に学び、私に従え休息を。唄を忘れず、祈りを忘れず、私を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる装うなかれ。

許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、光あるものには闇を、生あるものには暗い死を】

残りの口訣を口にするともはや光の塊となっていた女性の亡骸は弾けて光の粒となる。

それは聖典、聖なる詩は人すべてが認知する破邪の言葉。故に魔力を燃焼させ霊子結合　　言葉が蛮名化
奇蹟という神秘を具現化させる。

「休息は私の手に。貴方の罪に油を注ぎ、印を記そう。
永遠の命は死の中でこそ与えられる。」

紡がれる祝詞は月のように静かに闇を切り裂く、死者に死を齎す死の言葉

聖なる歌詞は死霊を腐食させる猛毒だ。

「許しは此処に。受肉した私が誓う、どうかこの憐れな魂に救済を」

同時に亮の背の翼も弾けとぶ。空气中に弾けた青白い光がまるで大量の蛍のようにあたりを幻想的に照らしていたが線香花火のように徐々に消えてゆき。

「機会があれば、来世でまた会おう」

亮は、そう言い残し闇夜へと再び消えていった。

ただそこに残された、女性の遺品と大量の血痕のみがそこに女性がいたということを現していた。

朝の冷たい引き締まった空気に響く一定のリズム

“トントントン”

朝餉に入れるネギを刻む音が台所に響くその音を響かせているのは久しぶりに帰宅した衛宮士郎であった。

サイド 士郎

昨夜、イリヤに言われたことが脳裏に浮かんでいた。

【私は、シロウをセイバーみたいに置いていかない、だからシロウは私を置いていかないでね・・・お兄ちゃん】

イリヤはその後、何でもないと言っていたがあれはそんな様子ではなかった。

イリヤは何を思いつめていたのだろうか？

誰かに置いていかれるのが怖った？

誰かともう会えなくなるのがつらかった？

誰かとは…オレに決まっている。

他のメンツはまずこの街を離れることも、死ぬこともない

“オレ”を除いて…

そうだオレは、置いていかれる辛さを誰よりも分かって、イリヤがずっと一人だったのを知っていたのにイリヤに置いていかれるかも知れない恐怖を味あわせた…

だから、誓いを立てよう旅立つ時が来ても何が何でも生きてこの家に戻ると……!

「おはようございます。」

桜の声が玄関から聞こえてくる

鍋の火を止め迎えに行くのでしょうか

『いただきます……!』

みんなで手を合わせ食べ始める

飯を食っているながら朝のニュースを見ていると気になるテロップが流れ始める。

“死体のない殺人現場……!死体はどこに行つた?!”

「ええ、昨夜冬木市にお住まいの鈴木 恵子さん二三才が行方不明になり、今朝大量の血痕と血まみれの衣服、所持品のみが見つかるという事件が起きました。」

尚、発見された血痕はDNA鑑定から本人のもので量は成人男性の致死量を遥かに上回っており生存は絶望的との発表がなされています。

犯人がどういった手口を用いたか分かっておりません。さらに近日、

数名の男女の遺体が獣に噛みちぎられたような状態で発見されており、事件との関連性を調査することです。

ここ数年、冬木氏における行方不明者数は200名近くの上っており、警察は住民に注意を呼び掛けています。

では、次のニュ……」

不可解な事件、嫌な予感がする。

「怖いわねえ」

「ええ、なんだか怖いです。」

三年前のキャスターが起こしていたガス漏れ事故に偽装した事件、慎二がライダーを使って起こした、一般人の襲撃事件それらが脳裏に浮かぶ。

引っかかる、ユノと視線を交えるそして頷き合う

この時はまだあのような顛末を迎えるとは夢にも思っていなかった。

続く

第九話 闇と光の葬り人（後書き）

亮が使ったのは黒桜のあれの弱小版です。

質問です

霊体状態のサーヴァントって乗り物乗れるんでしょうか？

第十話 現場

サイド 士郎

今、オレとユノは事件の起きた公園にいる

聖杯戦争が再開された可能性があるので家の結界を反応があった場合、オレかユノに伝わるように調整してもらった…ユノに…オレにはそんな高等な真似は出来ない。(どっかの三流探偵みたいに魔導書がないと並み以下)

そして、事件のあった場所に何か痕跡が残ってないかと公園に向かったのだ

黄色いテープに囲まれており中には入っていけない。

だが、そんな様子でも気なるの人が多いのか野次馬によって人の壁が出来ている

「どうだ？ユノ何か分かったか？」

隣にたたずむプラチナムブロンドの少女ユノに語りかける

ユノは人混みの向こうを見据え語り出す

「闇の残り香を感じます…恐らく何らかの魔導書によって呼び出されたものではないかと推測します」

魔導書を所持している魔術師は一筋縄ではいかないからな…

「仮に聖杯戦争が再開されているとして、サーヴァントによって呼び出された可能性はどれくらいだ？」

「〇とは言いませんが、極低確率だと推測します。瘴気の質が濃すぎます……」

あり得るとしたら、魔導書を所持したサーヴァントが呼び出された場合のみかと」

ただの人間が所持しているだけでも厄介なのに、魔導書をもったサーヴァント…最悪だ

ましてや仮にだが、高位の魔導書相手だと“アイツ”の使用を視野に入れなくてはならない…総帥に連絡を入れておくか……

「ただ、気になる点が一つ……」

ユノの言葉に思考の海に沈んでいたが現実に引き戻される

「何が気になるんだユノ？」

ユノはこちらを見上げる、その金色の瞳がオレをとらえる

「ここで、何かあったのは確実なのですが、闇が薄すぎるまるで何かに浄化されたかのように……」

「そうなんです不思議ですよえ〜〜」

ユノの言葉の続きを奪い取った気配なくオレの隣ユノと反対側にたずむ女性を見据える

青い瞳にやや藍色が混じった黒髪の日本人特有の顔立ちの名残があ

るシスターの格好をした女性を

そして彼女はなぜか大量のカレーパンを袋にいれ抱えていた…

「あなたは？」

「あ、申し遅れましたこの町の教会に赴任してきたシスターシエルと言いますシエルと呼んでください」

ニコニコと笑いながら語りかけてくる

「あ、どうも衛宮 士郎といいます」

口に手を軽く当てクスクスと笑い

「知っていますよ」

“どういふことだ”と言おうとしたら女性はくるりと向きを変え去って行く

追いかけてよとするとするもなぜか体が動かない

「安心してください、ちょっと動けないようになってもらっただけですよ。すぐに動けるようになりますから」

おどけた様子で言う

「暗示ですか」

淡々とし口調でユノは言っではいるが苦々しい想いが口調から感じ取れる

「ハイ では、機会があればまた会いましょう衛宮君…」

そう言い残し彼女は消えていった、機会とは一体何だ？？

第十話 現場

オレとユノは狐に包まれた気分のままだったが冬木の街を見て回っていた

最近起きた獣にやられたとされる死体が発見された場所では、同じように魔導書による闇の残り香がする

だけど…

「ここは…なんか違うな……」

なんか、腐った水が発する腐臭の気配というべきかそんな感じの臭いが立ち込めている路地裏がいくつかあった

日中だというのに日も差さずそこだけまるで夜のようだった

「水妖の気配がしますそれとあのティベリウスと同類の気配もですが、しかし瘴気がほとんど感じられないこれは、一般的な魔術師に

よるものと思われます」

その言葉と同時にアーカムにいたときに戦ったあの殺しても殺しても死ななかつた人を殺して快樂を得、さらに殺した者たちの怨念を武器として使う

ネクロマンサーにしてリビングデット

あの醜悪な人を辞めた怪物が思い出される

【あんたも、汚らしい蛆共の苗処にしてあげる】

【さあ、あんたらも怨霊の一部になっちゃいなさあいつ】

奴の下劣な声を思い出すたびに無念のうちに殺された者たちの声が蘇る

あんな外道を許してはならない、欲望で人に不幸もたらす存在を許してはならない

怒りが自身の胸の内に燃え盛りその熱が内臓を熱くする

「あいつと同類となると放置できないな……ユノ、全力で根絶やしにするぞー!!」

「イエス・マイマスター」

今、オレたちは家の近くにある公園で一休みしながら今日町を調べたことをまとめていた

それで町を搜索した結果人食いは全部で“3人”いると推測できた
魔導書を使用して人を襲っている者と

水属性の恐らく魔術師、ユノに魔力の残香を調べてもらったところ
“二種類”存在した

つまりティベリウスの同類は二人いるのだ

こいつらの手口特に魔術師の方は厄介だ、ユノという魔術に特化した
神秘の存在がなければ間違いなく見逃していた

魔導書を使っている奴はまだ痕跡が残っていたがこちらは痕跡がほとんど
残っていない犠牲者の亡骸さえ

早くこいつらを倒し、犠牲者の無念を晴らし、これ以上の犠牲を出
さないようにしないと

と決意を新たに顔を上げるといつの間にか時刻は夕刻に差し掛かっ
ておりあたり一面を紅く染め上げていた

まるで犠牲者の血で染め上げたように……

「逢魔時か……」

「そうですね……もうすぐ闇の時間です……」

続く

第十話 現場（後書き）

ゼロキヤスターが使ってるのはルルイ工異本の写本なんですよ実は

第十一話 色欲（前書き）

バイトが忙しく投稿が遅れました
申し訳ないです

今回は時系列は前回の一時間後ぐらいです

第十一話 色欲

すっかり日も沈み暗闇に包まれた夜の学園、昨今の殺人事件の影響が生徒には早期帰宅が義務づけられ今では人の気配など皆無であるはずの校庭。

そこにまるで霧の中かから現れるように虚空から一人の青年が姿を現す

その容姿は癖毛なのか髪がある程度逆立った黒髪に不思議な輝きの青い瞳もち、白い純白のパールホワイトの輝きを放つ外套を羽織り首から翡翠色の宝石を胸に下げその端正な顔立ちとも相まってまるで神の御使いのような神々しい雰囲気を漂わせていた。

「やれやれ……また手間のかかる連中が相手だな……」

つぶやきとともに溜息を青年が漏らす

彼は校庭……否、学校全体を見渡しながら再びつぶやく

「4ヶ所か……あいつの言ったとおりだな……」

彼は体の向きを道場に変え歩きだす。

そして校庭から道場へそしてその裏の袋小路へとその歩みを向ける……

“ビュウウウウウ……”

冬の乾いた空気に似つかわしくない湿った生温かい風が吹きその奥には不気味な存在感を放つ不可視の存在があった……

「あつた、ここだ…」

一見何もないように見えるが魔術の素養のあるものが見たなら其処には毒々しい色の光を放つ魔方陣が見え、それは一般の何も心得のない人間が見たならよくて気絶、最悪発狂死してしまうほどの瘴気を放っていた。

もつとも人よけの結界が張られ地理的にも空氣的にも近寄りがたいこのような場所には誰も近づくことなどないだろうが。

青年は瘴気など初めから無いかのように近づき懐から一つの銀色の輝きを放つ液体を入れられた小瓶を取り出す。

「これを投げ込めばいいって言ってたけどほんとか？まあ俺あいつの言つとおりやるしかないんだけどな」

彼の脳裏に浮かぶホテルで留守番していた時に“あいつ”あてに怪しいダンボールにびっしり入っていた“これ”が届いた時のやり取り

“通販で売っていたものらしいがそんなもので魔方陣を破戒できるか？ってというかそもそもこれ何？”

“なんなのか自分で考えろ（商品欄に記載されてるだろうが）”

というやり取りが思い出される

（イラスト　　つときた俺は悪くないはず、絶対悪くない）

青年の胸の中をめぐる思いなど第三者には関係ない話ではあるが…

第十一話 色欲

「ホイっと」

ピンを陣の中に投げ入れる“パリン”とピンが割れ中から銀色の液体が漏れだす
液体が魔方陣のラインに触れた瞬間

“バチイイイイイインンンッ！！！”

まるで雷が落ちたかのような轟音と閃光が辺りを一瞬包み込む

あまりの光に青年は腕で顔を塞ぐそして再び開かれた青年の視界には毒々しい光を放つ魔方陣ではなく、雷でも落ちたかのように黒く焼きついた地面と溶けて変形したピンの破片であったものが残されていただけだった。

その様子に青年の顔が驚愕の色に染まる

「まさか…通販で神秘を破戒できるとは…これも時代の進歩か…」

微妙にずれた感想を口にする青年だったとさ

それはさておき、青年が投げ込んだその銀色の液体の正体は水銀だ。魔力伝導率の極めて高いこの液体は、魔術的な精密回路である魔法陣に投げ込むことによってその配列を無茶苦茶に繋ぎ魔力を暴走させる。つまりショートしたのだ。

「さてと次の地点に向かいますか…」

そのあと同じ方法で校舎裏、雑木林に隠されていた魔方陣を同じく銀色の液体で焼き尽くし今最後の魔方陣校舎の階段裏に隠されていた魔方陣に今までと同じくピンを投げ入れるまたもや、雷が落ちたかのような閃光と爆音に包まれる。

「まったく、魔力を使わずに済むのはいいけどこれはどうにかならんのか…と来たな」

青年がぼやき、現れた時と同じように霞と消える

そのころ校庭に今までのモノとは比較にならないほどの巨大な魔方陣が描かれる

紫電を撒き散し、瘴気を吹き出しながら展開してゆく

校庭いっぱい展開している魔方陣の中央から突如一本の腕が生えるそして、崖から這い上がるように地面に手をつき体の残りの部分を引き上げる。

徐々に這い上がって来た“ソレ”一人の青年だった。

青年が這い上がると同時にその全貌が消えかけの魔方陣がいまだに放つ光によって明らかになる。

腰まで伸びた赤い髪を靡かせ、赤い瞳で辺りを見渡す。

髪と同じ深紅の腕の部分がない黄色に十字が描かれたボディースー

ツを上半身にまとい腕を包帯や拘束帯で縛り、黒い腰布と白いズボンに赤い脚甲備えたの姿は古代ギリシヤの戦士を彷彿させる。

「ふうん、僕の出番はないと思っていたんだけどね…君は僕を満足させることができるのかい？」

青年が虚空に向かって問いかける。

すると虚空から先ほど魔方陣を破戒した青年が霧の中から現れる。

「一応これでも腕に覚えはあると思っている」

「そうか、それは楽しみだよ」

二人の青年は相対し言葉を交わす。

「一応聞いておくが、貴様が4つの鍵の一つだな？」

白い外套の青年は赤い青年に表情を変えずに問いかける

「うん、そうだよでも相変わらずあいつには驚かされるよ、このぼくに今度は門番やりながら迷彩シートの端を抑えているって言うんだからね。」

赤い青年は笑顔、途中からは苦笑で答える。

「そうか、それは大変だな俺も戦い守るために呼び出されたかと思えば留守番をさせられたからな」

それを聞くと赤い青年は“クスッ”と左手を口に当て笑いを洩らす。

「それはそれは大変だったね…さあ、始めようか…コイ！ラル・ロブディ！！！」

赤い青年の言葉とともに空気が変わると同時に地面がひび割れ突如巨大な蜘蛛が這い上がってくる。

その蜘蛛は巨大だけでなく全体が焼け爛れた様な様子でありながら全身が金属光沢を放ち八つの足一本一本が剣のように刃が付いており、その顔に当たる部分には醜くおぞましい人型の髑髏であった。

「そうだな…始めよう」

白い外套の青年の腕には虚空よりその身が現れた時と同じく霧が晴れるように姿を現す

一本の虹色の輝きを放つ宝石を切り出し研磨し剣の鏢にそのまま取り付けたような大剣。

「へえ、きれいな剣だね僕のと大違いだよ…ラル・ロブディ」

赤い青年が右腕を上げると先ほどのラル・ロブディと呼ばれた大蜘蛛は髑髏の部分を剣の鏢に、八足を組み合わせ巨大な刀身とした禍々しい大剣へと変形した。

「変形する剣も十分自慢できるぞ」

白い外套の青年は感想を口にしながら剣を正面に構える

「そう言ってくれるとうれしいね」

答えながら赤い青年はその巨剣を右手一本で持ち構える

辺り一帯の空気が冬の冷たく張りつめた空気から針で全身を刺すような空気へと変貌する

「お互い名乗っておかないかい？」

赤い青年は構えたまま問いかける

「真名は勘弁してくれないか？」

白い外套の青年は答える。

「フツ、君は真面目だねいよ別に…地獄の剣帝アスモデウス」

赤い青年…否、アスモデウスはやれやれといった感じに苦笑しそれを了承し一足先に名乗る

「サーヴァント：バーサーカー」

白い青年は己が役割をクラス：現世における存在意義を名乗る

「「推して参る！…！…！推して参る！…！…！」」

今ここに地獄の剣帝と狂っていない狂戦士の剣閃が交差する…

続
く

第十一話 色欲（後書き）

バーサーカーの剣はFF7のアルテマウェポンが一番近いです
バーサーカーの容姿はバスタードのラーズ・ウルをイメージしてく
ださい

第十二話 魔王（前書き）

序章が長くて本編が短いです

第十二話 魔王

「推して参る！！！！／推して参る！！！！」

相対する二人の剣士はほぼ同時に地面を蹴り、相手をその手に握る剣の錆とすべく駆け出す。

「ハアツ！！！！／テエリヤアツ！！！！」

“ガツキイイイイイインン”

二つの掛け声が合わさると共に二振りの大剣も合わさり火花を散らすと同時に剣が交わりし場所を中心に衝撃波が波のように広がり校庭の地面を削り砂塵を舞い上げる。

「ハツ！！！！」

拮抗した鏝迫り合いから両者ともに弾かれ次の攻防へと移行する。

「ウオオオオオオオオツ！！」

バーサーカーはその手に握る虹色の太剣を下段に構え掛け声とともに疾風の如く駆け出す。

対するアスモデウスは、剣を肩に担ぎ左腕を前にいつでも最速の剣閃を放てるように構える。

「ふんっ！！！」

“ビュウンッ！！”

バーサーカーがアスモデウスの間合いに入った、その瞬間視認するも難しい剛剣が振り下ろされた。

しかし、其処にはバーサーカーの影も形もなくただ、彼の剣圧によって裂けた地面と小さく左の足の足跡を中心に蜘蛛の巣状にひび割れた地面が残っていただけだった。

「くっ！」

とっさに自分の左に振り向くアスモデウス、が眼前にはすでにバーサーカーが万全の態勢で技を放つ瞬間であった。

「虎牙破斬！！！！」

下段に構えた剣が神速でアスモデウスに迫るが、彼はその髑髏の大剣で軌道をずらす…が、軌道をずらされ上に振り上げられる形となった剣がそのまま硬直時間もなしに刹那のうちに振り下ろされる。

「グッ！！」

とっさにバックステップで回避するアスモデウス、辛くも回避に成功するもその深紅のボディスーツは斜めに裂けていた。

「まだだよ!!」

バックステップで付いた勢いを両の足で地面を踏ん張り、足のバネにため…そして地面を蹴り碎きバーサーカーへと疾走するそして…

右手に握られた大剣は自分の移動速度による運動エネルギーに加え自身の怪力によってポテンシャルエネルギーを極限まで高められバーサーカーに向けて今解き放たれる。

「閃光…」

下から切り上げるように解き放たれる閃光としか認識できな程の鋭く重い斬撃

バーサーカーはとっさに自身の剣の腹で受け止めるがあまりの重さに空中に打ち上げられる。

「墜刃牙!!!!」

そこにアスモデウスによる追撃が、空中で足場もなく身動きの取れないバーサーカーにすべてを貫かんとする突きが迫る。

「やらせるかッ!!!!」

“ブウンッ!!!!”

バーサーカーは自身の握る大剣を体全体を使って振り重心と自身の態勢位置を空中でありながら変更する

“ヒュンッ!!”

アスモデウスの突きがバーサーカーの左の二の腕をかすり外套の袖

が裂ける。

“ ゼっ！！！”

バーサーカーが地面に足がつくと同時にアスモデウスに向かい踏み込む。

「瞬人剣ッ！！！」

大剣でありながら神速の突きがまるで弾丸の如く放たれた。

「ハアッ！！！」

アスモデウスはそれを剣を盾とし、腹で受け止めるがあまりの重い一撃に吹き飛ばされる。

“ ゼっザアアアアアアア！！！”

アスモデウスの両足が校庭の土を抉りながらも踏ん張りやがて勢いが完全に殺され停止する。

「結構すごいじゃないか、でも君は全然バーサーカーじゃないよね」
アスモデウスは構えを解き最初と同じく微笑を浮かべながら語りかける。

「フッ、人間が千差万別なら英霊である俺たちはさらに千差万別だ基本など存在するはずがないだろ？つまり英霊なんてもんは例外しか存在しない」

バーサーカーも先ほどの死合いがウソのように苦笑しながら答える。

「クツクツク…確かにね…人間はみなオンリー・ワンだからね、その中でも変わり種ばかりの英霊に基準なんて無いかもしれないね」

アスモデウスは笑い顔しながらバーサーカーの言を肯定するがやがて悲しげな表情で語りだす。

「君とは心行くまで語り合いたところだけど、そろそろお別れの時間だよ…」

アスモデウスが言い終わると同時にその体から夥しい瘴気と黒い魔力が間欠泉の如く溢れ出し周りにあった小石が力の本流に巻き込まれ宙に浮き砕き砂となりそして消えてゆく。

“バチッ！！バチッ！！”

よく見るとアスモデウスの体は黒い雷が帯電していた。

今ここに地獄の魔王が降臨したのだった。

第十二話 魔王

サイド バーサーカー

アスモデウスから放たれる強大な圧力「プレッシャー」に圧倒され

るが虹色に光る大剣を構え全神経を研ぎ澄ませ、攻撃に備える。

(どうってくる？アスモデウス…)

先ほどの剣撃とて、油断や慢心があったら剣の錆と消えていただろうが、アスモデウスの本気は一瞬の隙も命取りとなる。

奴の動作一つ一つを観察し奴の攻撃の兆候を読み取り対応するそれしかない、攻撃した瞬間はどんな存在であろうとも必ず無防備となるその刹那の瞬間を見極める。

アスモデウスの放つ、瘴気が肌を焼き、魔力が剣の切っ先を鈍らし、剣気が神経をすり減らす…

だが、逆転の一手を打つべく神経を奴のほんの些細な動きも捉えるべく張り詰め、相手に自分の心の内を見せず少しでも圧力をかけるため澄んだ水の一滴「明鏡止水」の如く感情の波を打ち消す。

奴の魔力の流れを、筋肉の一本に至るまで読み取るべく意識を集中させる。

「どこを見ているんだい？」

「ッ……！……！……！」

“ブウン” “ズサアアア”

バーサーカーを投げ捨てるアスモデウス、その眼は失望の色で染まっていた。

「もういい…もったいないけど僕の最高の技で消してあげるよ…」

左手に今までアスモデウスが撒き散らした瘴気が渦を巻き集まるまるで瘴気を吸い取るように…やがて瘴気は黒い玉となるまるで中ではうきが渦巻いているかのような毒々しい模様を描き常にその模様を変化させていた。

そして魔剣ラルル・ロブディを構えるアスモデウス

ラルル・ロブディの髑髏その虚ろな眼下に赤い光がともされ口を開き“かくかく”と音たてて振動しているまるで嘲笑っているかのよう…

その毒々しく禍々しい刀身に黒い雷が帯電しやがて一定の密度を超え雷は闇そのもとなる。

左の掌にある球体を自身の目になるように放り…

「破戒の雷「バスター・ブレイバー」!!!!!!」

その球体を、刀身が闇そのもと化したラルル・ロブディで貫く!!!!!!

球体からはアスモデウスの瘴気が、魔力が指向性をもって螺旋状の収束されたビームとなってバーサーカーに迫る。

バーサーカーは泣くすべもなく呑み込まれ、膨大なエネルギーの余波で校庭は抉れ膨大な砂塵が舞い上がり辺り一面の視界を塞ぐがバーサーカーの消滅は必至だろう。

アスモデウスは、バーサーカーのいたであろう空間に背を向け歩き出そうとするが、突如聞き覚えのある声が彼の耳に届く。

「待てよ剣帝…ファイナーレにはまだ早いぞ…」

思わず振り向くアスモデウス、あり得ないのだ魔王の自分の最強クラスの技を受け消えていないどころか声をかけてくるなど地獄にあってもそうあり得ないのだからとすれば、ベルゼバブルかサタンぐらいだろう。

アスモデウスは砂塵のカーテンの向こうを驚愕の表情で見つめる

「さあ、第三章の始まりだ!!! 竜魂覚醒ッ!!!」

続く

第十二話 魔王（後書き）

本来の技と違うところがありますがご勘弁を…

次少し短くなるかも

アスモVSバーサーカ終わったら二人のステータスを載せます。

第十三話 竜であった王（前書き）

大変遅くなりました

第一話 吸血鬼を出来損ないと呼ぶ男 少し追加しました

第十三話 竜であった王

「さあ、第三章の始まりだ！！！竜魂覚醒ッ！！！！」

バーサーカーの掛け声と共に膨大な物理現象を伴うほどの濃度の魔力が吹き荒れ、砂のペールを吹き飛ばしバーサーカーの姿をあらわにする。

額からは血を流し、左腕は在らぬほうへ向き、右足は膝から下がなくなり剣を杖にしてやっと立っておりほかの部位も傷のないところなど存在しなかった。杖になっている剣からは今までとは比べ物にならないほどの光を発し、バーサーカー自身の瞳も生気に満ち溢れている。

そして、全身の傷が、まるでビデオの逆再生をしているかのように見る見るうちに衣服と共に修復され、バーサーカーから放出される膨大な魔力がバーサーカーの体を包み最初に来ていた外套を構成する。

“ヒュン”

バーサーカーは剣を一振りし体の調子を確認し、アスモデウスに向き直り、剣を構える。

「……行くぞ！！！！光竜槍！！！！」

圧倒的な光を発している剣が瞬刃剣と同じモーションで突き出されると剣から一筋のすべてを貫かんとする閃光が放たれた。

「クツ!! 自己復元だと?!」

アスモデウスがその不気味な大剣ラル・ロブディで閃光を受けとめるがあまりに強い圧力のため踏ん張る足が地面に食い込む。

「はあああああつ!!!!!!」

なんとか光竜槍を受け切ったところにバーサーカーが上空から重力を味方につけ威力を増した斬撃をアスモデウスに見舞う。

「ツ!!!!」

アスモデウスは、受け止めた後の硬直で避けることができず、魔剣で防ぐ。

“ガッキイイイイイイ”

二つの超常の合金で作られた剣が正面からぶつかり金属音と火花を撒き散らす。

そして空中で僅かばかり制止するバーサーカーの瞳を見てアスモデウスは驚愕の色をその端正な顔に浮かべる

「ツ!!!! 竜魂解放…そういうことかっ!!!!」

アスモデウスはその怪力を持って空中のバーサーカーを吹き飛ばす

…が、バーサーカーは何事もなかったように着地する。

「宝具に並ぶほどの強い竜因子…その証である“竜眼”……」

バーサーカーのその透き通るような青い双眸は瞳孔がまるで八虫類のように縦に割れ其れに呼応してその体からは圧倒的な膨大な魔力と共にアスモデウスと同格のプレッシャーを放っていた。

お互いのプレッシャーがぶつかり合うさなかアスモデウスは尚も語り続ける。

「そして、その混じりけの一切ない竜の神気……君は……君の真名は……ッ！！」

かつて……ある王妃の一つの過ちのもと竜として生まれ堕ち、その顎門で罪なき数々の乙女たちを食い殺した竜王子……その果てに真実の愛を得ることができ人間となり国を治めた、賢王にして武王にして怪物……

かのちんけな御伽話の悲劇にして喜劇の主人公……“竜王リントヴィルム”！！！！」

眼をつぶり黙って聞いていたバーサーカーがその口を開き静かに語り出す。

「……そうだ、俺は数々の罪なき者たちを殺した……ただ温もりが、愛情がほしかつたんだ……父にわが子として認められずとも、わが双子の妹に兄として認められずともただ、温もりが欲しかった……愛に、憎しみに、悲しみに狂った俺がバーサーカー／狂戦士とは悪い冗談だ。だが同時にふさわしくもある。」

語りを聞き終えおえると終えるとアスモデウスは顔をうつ伏せあいている左手で自身の額を抑え僅かに震えだす。

「クツクツクツ……」

……否、彼はこらえていた自身の内より溢れ出す感情を……そして、それは限界点を超えダムが決壊したかの様に嗤い出す。

「あっはっはっははははッ……あっはっはっはッはッはッはッはッはッはッはッはあ……」

額に手を充てたまま夜空を見上げ尚も嗤い続けるアスモデウス……

それは世界を嘲笑っていたのか、自身を嘲笑っていたのか、目の前のサーヴァントを嘲笑っていたのか、それとも歡喜の笑いだったのかアスモデウス本人以外に知る者はいない。

第十三話 竜であった王

ひとしきり笑い終え自身の前髪を描き上げながら語り出す自身が抱えていたものの一端を……

「ふう……僕はこの巡り合わせを忌々しい神に感謝すべきかな？それとも阿頼耶識に感謝すべきかな？もしくは君を呼び出したマスターに感謝したらいいのかな？まあ何でもいいけどね……」

一端はなしを区切り、バーサーカー/リントヴィルムを見つめる…
暗い昏い瞋いどす黒い感情のこもった紅い瞳で

「僕は…君という存在を知ったときから君を…僕の手で殺したかった…」

言い終わるなり、アスモデウスの姿が纏っていた瘴気の残照を残して消える

「っ！！何度も同じ手が通じると思っなよッ！！」

リントヴィルムはそう叫びつつ自身の側面へとその光り輝く大剣を右側面に振るう。

” “ 武ウウウウンッ！！” ”

” 我ンッ！！！！” ”

二つの剣が空気を引き裂く音と金属同士が衝突する甲高い金属音が鳴り響く。

「ハアアアアッ！！！！」

アスモデウスは鏢競り合いの状態からバーサーカーをその怪力を持って吹き飛ばし追撃を仕掛ける。

上半身を軸に左腕を振りその反動を使い威力を挙げた斬撃を見舞う

「クッ！！！！」

バーサーカーは剣を下からはね上げアスモデウスの斬撃の軌道無理やり変えることで回避する。だが、アスモデウスは跳ね上げられた剣をバーサーカーに叩きつけるように振りおろす。

「シャアアアアッ！！！」

バーサーカーは今度は刀身に沿うように横から僅かばかり力を加え軌道をずらす

「いい加減にしろッ！！！」

今度はバーサーカーが攻勢に出る。

バーサーカーの斬撃をアスモデウスは正面から大剣の面積強度を活かし正面から受け止め切り返す。

バーサーカーはアスモデウスの攻撃を側面から力を加えることで軌道をずらしその時の勢いを使い重さ・速さの増したカウンターを仕掛ける。

お互いの魔力のこもった剣が交わるたびにお互いの魔力が干渉し合い剣が纏う魔力の幾分かは砕け散りその残照が校庭を僅かに照らし幻想的な雰囲気を出す。

”千ツ千っ千っ千ツ千ツ千ツ”

「ハッ！ハッ！破ア！」

「シャッ！シャ！シャアア！」

そして無数の剣閃がメロディを奏で、二人が踏み込み吹き飛ばされ踏ん張るたびに校庭の地面はひび割れ、衝撃波が校舎のガラスに罅をいれ二人から噴出する魔力が砂塵を舞い上げガラスを打ち砕く……そんな中アスモデウスの叫びが鳴り響く

「僕は、僕は君が憎い／羨ましい、憎い憎い憎い憎い／羨ましい羨ましい

僕はこんなにも……こんなにも……君が憎いぞ／羨ましいぞ……！
！リントヴィルム……！！」

アスモデウスが剛剣をふるいバーサーカーはかるうじて剣で受け止めるも吹き飛ばされる

” ザツザザアアアアアアアアアアアアアアアア！！ ”

吹き飛ばされるも剣を地面に突き立て踏ん張りながら勢いが消えるまでなんとか踏ん張るバーサーカーが吹き飛ばされた跡を追うように支えにした剣のせいで地面がぱっくりと裂けている。

アスモデウスに向き直るバーサーカー、アスモデウスは剣を血が滴るほど強く握りしめバーサーカーをにらみつけながら叫ぶ。

「何故、何故何んだ……！ 同じ化け物として生まれ望む望まずとかかわらず多くのものを殺した僕と君 に何の違いがあった……！！

いや、何も無い……！……なのに何故……！何故……！何故……！僕は最愛の女性との中を引き裂かれ、君は幸福を手にした……！！ 一体何故なんだ……！答えるツ……！！リントヴィルムツ……！！」

「……………」

リントヴィルムは答えず沈黙したままアスモデウスをその青い竜の瞳で見つめ、アスモデウスの怨嗟を憎悪を羨望を真つ向から受け止める。

「何故ッ！！僕はサラを奪われなくては為らなかつたんだ…なぜ何んだ…」

リントヴィルムをにらみつけていた剣幕は徐々に何かに耐えるような色へと変化してゆき其れにつれアスモデウスの叫びも小さくなり最後のほうは呟きと為ってかろうじて聞き取れる程度だった。

「……………落ち着いたか？」

バーサーカーがぼつりと確認のための質問をする。

「……………すまなかつたね。君だって愛するものと引き裂かれたことがあるってのに八つ当たりしてしまったりして…」

かつてリントヴィルムは市民出の女が王妃となるのを嫌った者たちの手によって二人の子供を誘拐され妃も魔術によってリントヴィルムか魔術によって植えつけられた愛情を向けられた男かどちらかを選ばされるといふ悲劇を乗り越えている。

「いや…気にするな、おそらく逆の立場だったら俺はそこで止まれる自身はない…」

「それは無いよ」

アスモデウスはバーサーカーの言葉を聞き首を横に振る。

「君は、最後まであがき続けたその果てに結ばれたんだろ？僕もあがき続けたけど結ばれなかった、世界は最後まであがき続けた者に僅かながら可能性を与える。君はそれをつかんだ、僕はつかめなかった、だからサラと結ばれることは無かった。だから」そもそも逆の立場になるということはあり得ない”それだけさ…」

何か吹っ切れたようにアスモデウスは至極当たり前という風に語る。

「しかし、もし「過去においてifは存在しえないよ」…そうか」

バーサーカーの言おうとしたことを首を横に振りながらさえぎるアスモデウス。

ふと、アスモデウスは何かバーサーカーの戦う理由が気になりバーサーカーに聞いてみたいという思いかられる。

「聞いてもいいかい？」

「何をだ？」

「君がこの聖杯戦争を戦う理由だよ。この時代には君が愛した女性も、君の子供たちも、守るべき王国

も存在しない。そんな中何故戦うんだい？僕みたいに契約に縛られているわけではないだろう??令呪とやらも瞬発的な強制力はともかくそこまで使い勝手よく他者を支配下におけるわけないし第一君は“自分の意志で戦っている”なぜ戦っているのか教えてはくれないかい？」

さすがは地獄の剣帝というべきか剣を交えた相手の剣捌きから相手

の意志がどこにあるかを読み取つ たアスモデウスが自身の好奇心の元バーサーサーに問いかける。

「あいつ…俺のマスターはかつての俺とよく似ている…」

心に虚を抱え絶望の中自身の虚を満たしてくれる存在が現れるかも知れないという希望にすがって生きていく。だが俺とは決定的に違うのは俺が狂ったのに対しあいつは何も感じてはいない理性で感情を制御しているのではない…人格を確固たる個を持ちながら感情が働いて無い。感情を理解していな がら感情が動いてない。

だから奴は求めた、制御できないほどの狂おしい感情の本流…すなわち愛だ。

あいつは、自身が愛情を抱ける存在もしくは存在との逢瀬の因果を求めている。

俺は、そんなあいつに本当の愛情とはどういうものか教えてやりたい…」

バーサーカーの口から語れる彼のマスターの現状

感情を理解できるのに感情が動かないとはどういうことなのか…それは世の中すべてのものに興味が無いということ、いわば一種のうつ病、だが彼のマスターはうつ病から無気力をのけた状態それら一体どういう状態なのか？

たとえるなら、常にモノクロの世界を見ているに等しい、感情が無くっては世界から色彩が消滅するつまりそういうことだ。

簡単に言うなれば、普段見ているテレビなどの映像機器においてもはやモノクロは存在しないといっても過言ではない。だがいつの間にかすべての映像がモノクロでしか表記されなくなり自分はそれを常に見続けなければいけないとしたらどうだろう？さらに映像の中心に大して関心も興味も抱けなかったら？

何も知らなければ何も感じることもなく受け入れるだろう。だがかつて色のついた世界／映像を見ていたなら苦痛と感じ、それから眼を離すことが一切許されなければそれはまさしく拷問と呼べるものではないだろうか。

「確かに…僕もサラと出会ってから善きにしろ悪きにしろ世界が変わって見えたからね、うん 十分な 理由だね。」

アスモデウスは微笑を浮かべながらバーサーカーの戦う理由を肯定し、眼を開きバーサーカーをまっすぐ鋭く見つめ、視線がバーサーカーを射抜く。

「僕は、僕が届かなかったところに立った君を倒せば何か変わると思うんだ」

「俺は、俺が味わった苦痛と近しき苦痛の中にいるあいつを解放するため戦う」

二人とも剣を構え向き合う、お互いから圧倒的なプレッシャーが放たれ、吹き出す物理干渉を及ぼすほどの濃密な魔力、瘴気・神気を含んだそれらがぶつかり合い台風の中のように渦巻き決戦場を造り出す。

間もなく、竜王と魔王どちらかもしくは両方がこの世界から排除されることになるのはだれの目にも明らかだった。

続く

第十三話 竜であった王（後書き）

個人的にこの話微妙…

14話は今週には上げます

友人にお前の設定が細かすぎのうえ複線が多すぎて疲れるよって言われました。そうでしょうか？

題名変えようかな…

第十四話 前哨戦（前書き）

アクセス件数5万突破こんな駄文の長ったらしくしかも更新が遅い
のを見てくれて感謝感激です。

第十四話 前哨戦

二人から噴き出る膨大な魔力、それはそれぞれに含まれる神気、瘴気が反発しあい、混ざり合いまるでハリケーンのように巨大な竜巻を作り出しそれは二人のための決戦場となりえる。

淡い緑色の光と赤黒い光が混ざり合いながらも分離し何とも言えぬ色の光の竜巻のなか二人の似て非なる境遇の剣士が向かい合っている。

「……………行くよ……」

不気味な髑髏の付いた大剣を携えた紅い衣服に身を包んだ剣士、破壊の名を持つ色欲の魔王“アスモデウス”が口を開く。

「ああ、最後の攻防だ…俺がお前かどちらかがこの世界から否定され消えることになるだろう。まあ俺もお前も仮初の存在なのだがな」

其れに答え、皮肉を口にする白い外套に身を包み極光を放つ大剣を持つ剣士、サーヴァント・バーサーカーこと真名リントヴィルム。

其れを聞き届けアスモデウスはその左の掌に吹き出していた瘴気を多分に含む魔力を収束・高速循環させて漆黒の球体を作り出す、球体はアスモデウスがつかさどる膨大な雷をすでに雷の領域を軽くとび越えたそれを含んだそれは触れるだけで対象の原子結合どころか素粒子の結合まで破壊しその存在を無に帰すだろう。

「さつきはどうやって耐えきったか知らないけど、そう何度も耐えきれぬものじゃないし今度は油断もためらいもなく完全に殺して見

せる」

「いまここで殺されるわけにはいかない、貴様こそ送り返してやるアスモデウス」

対するバーサーカーはその剣を逆手に持ちかえ地面に突き刺し手を離す、すると大剣はバーサーカーの手が離れたと同時にその光を収め沈黙する。

「素手で僕の技を打ち破るつもりか…やれるものならやってみろ！！リントヴィルム！！破戒の雷「バスター・ブレイバー」！！！！」

アスモデウスがその手に携えた黒い球体を魔剣ラルル・ロブディで貫く

黒い球体は貫かれたことでその力の流れが変化し剣の貫いた方向…バーサーカーへとまるでドリルのように螺旋を描きながら向かう。

そして、バーサーカーは左の腕を引き拳を握りしめ、左足を後ろ右足を半歩前に出した徒手空拳の構えをとる、

すべてを掘削し分解し無へと帰す紅い光の混じった漆黒の螺旋はバーサーカーへと迫りそして……

アスモデウスの技は正しく必殺の威力を秘めた一撃、たとえ封印していた竜の因子を顕在化させた今のバーサーカーとて、無傷では済まないさらに攻撃を耐えきったとしてもさらに追撃が予想される。さらに単純な身体能力では竜因子によって大幅に上昇していてもなんとか追いつくので精いっぱいな状態なのである。

(“俺自身を捨てればどうにかなるかもしれないが…” それでは本末転倒だ。…ならば、正面から撃ち貫くのみだ)

「素手で僕の技を打ち破るつもりか…やれるものならやってみろ！
！！リントヴィルム！！破戒の雷「バスター・ブレイバー」！！！！
」

アスモデウスから放たれた黒い螺旋が地面を抉りながらまるで削岩機のようにバーサーカーへと迫りくる。

そして、射程に入ったその瞬間バーサーカーは、眼を見開きその中心にむけて左の拳を振るう

拳と螺旋が接触するその瞬間、

「剛昇閃ッ！！！」

“ 刃ッシューウウウウウウウウウウッ ”

バーサーカーの左腕から一筋の緑色の閃光が放たれ螺旋を“ 打ち抜く ”、

あっさりとバーサーカーの打ち抜かれた螺旋はその力の流れを変え

始める。

なぜ、バーサーカーがこうも簡単に打ち破れたかということ、一点集中そして扇風機の止め方だ、後者については説明不要と思うので省略するが

理屈としては単純明快、ホースから放たれる水があるその先の先っぽを塞いだらどうなるだろう？

唯一の出口を失った水は逃げ場を失い急激にその圧力を増してゆく、その状態でいきなり塞いでいた先を開いたらどうなるか、答えは簡単だ。

その高まった圧力分通常よりも高い水圧で水が放たれる。同じことをバーサーカーもやっただけだ。

元々、セイバーことアーサー王のそれと違いバーサーカーは純粹な竜そのものである。

それ故に膨大な魔力をもっているがその魔力は人間の体で耐え切れるものではない。

そのため剣、あれは攻撃用の武器としての他に竜因子を顕現させた際の膨大な魔力を一定以上放出するための放熱板でもある、

竜魂覚醒状態で放熱板である剣を手放せば逃げ場を失った膨大な魔力が彼の体の中にあつという間に蓄積され破裂寸前の風船と同じ状態となる。

垂れ流し状態でさえ物理現象を伴うほどの密度の魔力が圧力によつ

て魔力が更に圧縮される。

其れを拳を銃身に魔力を弾丸にしてインパクトの瞬間に開放し敵を打ち貫く其れが“剛昇閃”である

一歩間違えば不発に終わるうえに発動のタイミングも遅ければ自身の魔力によつて肉体が破壊され、逆に遅ければ大して威力のないただの打撃となり果てる使いどころの難しい技なのだが、バーサーカーは見事にそれを狙いどおりに決めたのだ。

剛昇閃によつて打ち抜かれた螺旋は自身の力によつて裏返りアスモデウスへの道を刹那の間作り出しその向こうでアスモデウスが驚愕の表情で固まっているのが視認できる。

バーサーカーは地面に突き刺した剣を引き抜く、彼の竜の魔力に呼応し輝きを取り戻した剣を手に魔力放出によつて超加速しアスモデウスへと迫る。

アスモデウスもただ硬直しているわけもなくバーサーカーに地面を踏みしめ向かい疾走する

「雷鳴閃光ッ！！！」

「F m l o f i l a ッ！！！（虚偽の憤怒）」

バーサーカーはその剣と体に緑色の雷を宿し、アスモデウスはその魔剣の不気味な髑髏が吐き出した漆黒の焰を刀身に纏う、

「破あああああッ！！！！！」

「堆えいいやあああッ！！！！！」

二人の剣士が、剣が交わり火花を散らし交差し、すれ違っ

“ボト” “カラン”

何か水分を多分に含んだ“なにか”と金属の物体が地面に落ちた音がする、

「まだだ!!まだ僕は負けていないッ!!」

“右手と魔剣”を失ったアスモデウスが叫ぶ、その腕は二の腕が中ほどから切り落とされているが復元が始まっていたが、

「遅いつ!!!!」 「ガッ!!!!」

いつの間にか振り返ったバーサーカーがアスモデウスの復元中の腕ごと肩から切り落とす。

更にバーサーカーは魔力放出を使って更に加速しアスモデウスに斬撃を繰り出そうとする。

「っ!!ラアル・ロブディ!!!!」 「ッ!!!!!!」

“ヒュウンッ!!”

突如、バーサーカーの横から一本の黒い槍。否、蜘蛛型の変形したラアル・ロブディの足がバーサーカーを貫こうと迫るが横に飛び回避する。

「チツイイ!!面倒な!!」

ラルル・ロブディはバーサーカーをその虚ろな眼窩で見据えその足でバーサーカーを串刺しにしようと放ってくる。

バーサーカーは其れをことごとく魔力放出による超加速によって回避する、あるものは横に跳躍し、あるものはバックステップで回避し、あるものは飛び上がり避けあるものは魔力放出の反動を使い空中でありながら立体的に回避する。

それ故にラルル・ロブディの足は校庭の地面を耕すにとどまる。

「戻れッ!!!」

ラルル・ロブディはアスモデウスの元へと跳躍し彼の復元された右腕の中へ再び大剣となりて収まる。その瞬間、

「我、四元の王の名において命ずる、星の力よ我が敵を捉えよ!!!」

アスモデウスの体に通常の何倍もの重力がかかる、アスモデウスは剣を杖にして倒れないように耐える、一度でも倒れてしまうと再び起き上がることは至難の業だ。

アスモデウスを中心とした地面が陥没し、蜘蛛の巣状に地面がひび割れる。

「ッ!!!これは…古代魔術ッ!!!」

顔を上げること困難な状況でアスモデウスはバーサーカーを睨みつける。

「剣だけが能だと思うなよ!俺は暗殺などの権謀術数から家族を守

るためあらゆるものを学んだこれもその一つ！！その重力の網から逃れることは叶わんぞ悪魔である貴様なら尚更な！」

重力とは質量に比例して重さを与えるものであるが元々の重さが膨大であればその分重さも増す、地獄の七大魔王の内の一つであるアスモデウスは人間体であり、本体でないとしてもその霊的質量は膨大である。アスモデウスは自身の力の膨大さゆえに逃れることはできない。

「クツ！！こんなものすぐにディスプレイして見せるさ！！！」

アスモデウスの体から膨大な魔力が噴出し其れによって術式はきしみを挙げる。

その軋みに紛れてバーサーカーの聲がアスモデウスの耳に届き、その通常の何倍もの重さとなる頭を声のほうに上げる。

“ 月を抱いた十字の焰 茨を巻きつけて ”

バーサーカーの剣から放出されていた魔力がその淡い緑色を月の光のように青白いような黄色い色へと変色…否、変質する

“ 悲しみの碧い焰 呪われし約束その胸に ”

変質した魔力が碧い焰となって剣に巻きつき、包まれる

“ 我は銀色の矢となりて ”

「破あああああああああ！！！！」

“パリんツ！！”

重力結界が破られ、アスモデウスが自由の身となり

「F m l o f i l a ツ！！！！（虚偽の憤怒）」

“ボオオオオオ……” “ブンツ！！”

一瞬でラルル・ロブディの刀身が漆黒の焰で包まれ、アスモデウスは一閃、炎の斬撃を放ち、それはバーサーカーへと向かい暴発し砂塵を舞い上げる

爆発によって舞い上げられた砂塵から飛び出す一つの白い影バーサーカーが煙の尾を引きながら詠唱の最期の一節を唱え切る。

【総ての邪悪を屠る者なり！！！！】

碧い焰と化した剣を手にバーサーカーは疾走する。

「F m l o f i l a ツ！！！！（虚偽の憤怒）」

再び漆黒の焰を刀身に纏いバーサーカーへとその剛剣を振るう

“ガッキイイイイんっ！！！！！！”

「アスモデウス、夢の中ならいつでも会える……だから……帰って眠りにつけ……永久に……」

バーサーカーはアスモデウスの体を推し光の通路の向こう側へと送り出す。

「少し……すつきり……した……よ……ありがとう……」

そう言い残し消えていくアスモデウス、其れを見届けるバーサーカー

「あいつに礼を言われるようなことはしていないのだが……後、三つか……」

バーサーカーことリントヴィルムは夜空を見上げながらつぶやく、夜空には綺麗な三日月が夜の闇を照らし出していた。

「ああ……いつの時代も月はこんなにも綺麗だよ……エリーゼ……」

ここに地獄の剣帝と竜王の決闘は幕を閉じたのだが、聖杯戦争におけるいわば本戦サーヴァントとマスターによる殺し合いはまだ始まったもおらず、これが前哨戦にすぎないことを知っているものは極僅かであった。

続く

オチ

“ヒュウウウウウ”

冬の冷たい風が校庭を吹き抜ける

そんな中一人の白い外套を纏った青年リントヴィルムは自身の決闘場であつた場所を見渡す…

校庭はいたるところに地割れがあり一部畑でも作れそうな感じに耕されている。

校舎のガラスは一枚残らずわれ、校舎自体もひび割れ、欠けていて新たに建築しなくてはならないだろう、フェンスもヒシャゲ使い物にならず校庭を照らすライトは割れてるといふより支柱が根元から折れ地面に横たわっている。

「……………俺…知いらね!!」

バーサーカーは霧の中に消えるようにその姿を消す。

感のいい読者は気付いたと思うが霊体化して逃げたのである。

それでも王かいあんた!!

第十四話 前哨戦（後書き）

オチはテンプレです。すいません。

第15話 もつひろしのプロローグ(前書き)

あまり気にしないでください

第15話 もうひとつのプロローグ

第15話 もうひとつのプロローグ

ここで舞台は少し巻き戻る、騎士王と鞘の化身の青年の別離まで

サイド セイバー

「これで終わったのですね…」

「ああ、これで終わりだ」

夜が明ける、聖杯は破壊し戦いは終結した10年前と同じように…

「あなたの剣と成り敵を打ち、御身を守った…この約束を果たせて良かった…」

「そうだな、よくやってくれた」

「最後に一つだけ…伝えないと…」

本来この時間の人間ではない私がここにいられる時間はもう僅しか存在しない、彼に伝えないといけない戦いの中決して口にしなかった私の本心を

「シロウ……あなたが愛している…」

私の体の構成が分解され最小単位となってシフト…転移する

風に乗ってか声が聞こえてきた…

「ほんと…あいつらしい…」

其れが私の聞いた愛しい人の最期の声であった。

サイド アウト

さてここで余談だが質量とは何か？其れを知っているものはいらるだろうか？

質量とは重さとかそういうことを聞いているのではなく質量とは一体どういうもので、何故発生するかということだ。

質量とは即ち、“歪み”だ二次元・三次元これらはよく聞くとと思うが質量とは次元間の歪み：位相差によって発生するものである。

私たちの住まうこの世界は三次元：立体（Z軸）を理解し、四次元：時間軸を認識できることから三次元と四次元の狭間に存在するといわれている。

そして、根源や英霊の座と呼ばれるものは過去現在そして未来に至るまでの何らかの情報が記されているとされる。

結論から言つと根源、英霊の座が存在するのは時間軸を超越した超高次元の空間のことである。

今その超次元空間に蒼き騎士王が顕現化する。理屈は簡単だ彼の騎士王はありとあらゆる時代の聖杯が現れる戦いに赴く聖杯を手に入れるまで…

だが、いきなり時間を飛び越えて行けるはずもないだからこの超次

元空間を橋渡しとして用い各々の戦いへと赴いていたのだ。

サイド セイバー

もう幾度目になるのか…もう覚えてもいない

眼を見開いても何も見えず音さえもしない…否、認識できないこの空間を中間地点としていまままで幾多の戦いに赴いてきた…だがもうそれも終わりだ。

シロウが私の愛しい人が私のことを認め、間違いを正してくれた…後は、私の時代にあの血濡れた丘に還り幕を引くだけだ…

脳裏にさまざまな光景が浮かびあがる

私をかばい狂戦士の斧剣によって血の海に沈むかれ、

動けない私を抱き上げ自分は半死半生だというのに懸命に駆ける彼

私の聖剣を複製しヘラクレスへと挑む彼

道場で、昼食をとる私たちを優しく見つめる彼

「俺にはセイバー以上に欲しいものなんてない!!!」
英雄王に対して幾度傷つこうがお構いなしに向かう彼、

朝日を正面から受け眩しそうに顔をしかめる私が見た最後の彼

他にもさまざまな光景が浮かんではまた消えていく…

今でも耳に彼の声が残っているようだ…

「……………バー…」

耳を澄ませば彼の声が聞こえてくるように感じる。

「……………イバー…」

彼との魔力の供給ラインの残照なのか、いまだにシロウと繋がっているように感じる。

「……………イバー…」

いや、おかしい先ほどからかすかにシロウの声するように聞こえるそんなこと【あり得ないのに…】

「……………セイバー…」

間違いない確かにシロウの声が聞こえる。なんと馬鹿な…ただの間がこの空間に来れるわけがないのに確かに聞こえる…

「セイバアアアアアアアアア!!!」

ああ、間違いないシロウ声のほうへ振り向く、振り向かずにはいられなかった…そこには、鬼神にして機神が

黒い鋭角線状のひび割れた刃金の鎧をを全身に纏い、漆黒のまるで

悪魔のような、堕天使のような翼を広げ淡い緑色の光を噴出し、全身の至る所から銀色の血液を流しながら飛翔する人の顔の付いた機械仕掛けの満身創痕の神の姿があった。

「セイバアアアアアアッ！！！！」

その機神の胸部装甲が展開し内部からシロウ：愛しき人が姿を現す。

おかしい…彼の姿を視界に収めた瞬間うれしいはずなのに涙が溢れ、視界をゆがめる

愛しいあの人の姿をちゃんと見たいのに、涙が溢れ視界がぼやけてみることができない。

「シイロオウウウウウッ！！！！」

私は彼の名前を叫びながら帰る彼の元へと…

騎士王と鞘の化身である青年は再開を果たす。

これも一つの物語…そんないくつもの物語見つめながら、慈しみながら、羨みながら歌を歌い続ける一人の少女がいた、少女は自分の物語を歌にして口ずさむ…

T h e r e w a s a g a p i n m y h e a r t

Only as for night
night that can
not be exploited

It was morning before I
noticed it

Your voice wants to hear
it and

I warm up, and want to
touch it

To you yearn

Tears overflow...

A good bye beloved person

It is you who are still
unforgettable

To finish being a word
of the good bye

I am sab...

それは、好きだと言いながら別れるしかなかった悲しい物語の歌

歌を歌い続ける少女は自身を「ラプソトス：永遠の歌い手」と呼ぶ...

本編へと続く

第15話 もうひとつのプロローグ（後書き）

わかりにくかったら図解入れますんで、わからない場合は感想かメールお願いします

*ストーリーに関する質問にはお答えできない場合がありますがご了承ください

ステータス&登場人物（一部のみ）

ステータス及び人物紹介（出番がそこそこあった人だけ）

衛宮 士郎

ご存じ、Fateの主人公、高校卒業後ゼルレッチの紹介でアーカムのミスカトニツク大学へ進学する、大学2年で春休みを使い帰郷した。

デモンベイン主人公、大十字九郎とヒロイン、アル・アジフに戦い方を教わっていた、また覇道家執事ウィンフィールドのもと格闘技と執事の何たるかを学びメイドさんに剣術についての指導も受ける（バイトで一時期覇道家の執事をしていた）

ラバン・シユリューズベリイによく課外授業（一年で卒業できるほどの単位が取れるらしい）として拉致られては邪神と戦っていた。

ユノ

黒の剣年代記の精霊で覇道の遺産として魔導研究所に保存されていた。

シロウと出会い覚醒を果たす。士郎の料理によって食の虜になっている。趣味は株の運用
能力等の詳細は本編にて

イリヤ

ヘラクレスの維持に使っていた生命力が消費されなくなったことで肉体が成長を再開している。（魔術回路は生命力を魔力に変換する機関であるが故の弊害）

士郎と一年共に暮らし家事を習っており結構な腕前になっている
聖杯であったが故か聖杯戦争に関して何か知っている模様（原作やつた人ならずぐわかつちやうよね）

遠坂 凜

ご存じうっかりスキルの保有者

時計塔にわたり研究にいそしんでいたが突如、令呪の兆しが現れたことでサーヴァント召喚に挑む…が保有スキルのせいでアーチャーが捨身自殺まがいのことを再びやらかす羽目になる

虎（藤村 大河）

ご存じ士郎の姉貴分だがどちらかというとし郎が世話をしているように見える

タイガーと呼ぶと切れる、伝説の虎竹刀という恐ろしい宝具を所持しているとか何とか

士郎がアメリカに渡った後イリヤに面倒を見てもらっていたようだ。

東雲 亮（しののめ りょう）

年齢不詳、正体不明、目的不明三拍子そろった怪しい人物

吸血鬼として聖堂教会に追われているが、自身は吸血鬼ではないといいまた血を吸うこともないという

驚異的な身体能力に霊視能力、複数の魔剣（東雲が呼称しているだけではんとはどういったものかは不明）、霊剣などの不可思議な武器を用いて戦う

基本は二振りの霊剣、禍風・白桜を使い戦う、この二振りは普段、原子構成さえも分解し腕の物質構成に混合させているため持ち運びが容易となっている

これは、投影魔術の基礎である強化魔術から分岐した系統の魔術であるために似通った部分がかかり多い。

ステータス& a m p・登場人物（一部のみ）（後書き）

突っ込みどころ満載でしょうか？

第十六話 嵐の前の静寂（前書き）

OPとEDの曲を募集

特にOPなんか雰囲気が出曲がなかなかみつかりません

（一応作者はサウンドホリゾンの焰をイメージしているんですがノリがいまいち）

第十六話 嵐の前の静寂

アスモデウスとバーサーカーが死闘を繰り広げているのと時を同じくして一つの戦いが集結しようとしていた。

「グッ！！ガッハッ！！！」

外人墓地の一角に大きなクレーターができておりその中心で片膝を地面に着き咽ながら血を吐きだす一人の中年の男性。

白髪、黒髪が半々といった具合に混じり合いまるで灰色に見える髪に茶色の袴に土色のボディースーツを身にまとい左腕を肩まで覆う鎧を装着しており、その腹部には大穴が開き臓物と一緒に大量の血液を流しており髪と同じ色の顎髭は吐き出した血液によって赤黒く染まっている。

この場での唯一の光源である月が雲に隠れ辺りが闇に包まれる。

そんな中、中年の男性：其れを見下す赤と金のオッドアイが夜の闇のなかで輝いており雲がかかっていた月が顔をのぞかせその明かりによってオッドアイの主の全容を明らかにする。

其処にいたのは黒いコートの青年：東雲 亮。彼は、漆黒のハルバートを手にもつ中年の男性を見下ろしていた。

「まさか…このワシが…元人間ごときに…して…殺られるとは…
…な…」

息も絶え絶えになりながら東雲を見上げる中年の男性

「何を言つかと思えば…下らん」

中年の男性の最期の言葉を“下らん”の一言で切り捨てる東雲

「なにを…」

「いつだって、貴様ら化け物を殺すのは人間だ、“ハウレス”」

「人間か…クっハハハハハハハハハハハハ…」

東雲の答えに対して突如嗤い出す中年の男性こと“ハウレス”

「貴様がか？貴様が人間？人間だと！！嗤わせるな！！最も新しき真なる魔王よ！！」

まるで道化師^{ヒエロ}を見る目で東雲をみるハウレスその眼は見下ろされていながら見下している眼だった。

「……………貴様のその命、貰い受けるぞ…こいつは一度起こすと大量の生命力を喰らうまで眠らんのでな」

“フュン！！ズサツ！！”

ハウレスの言葉を無視しハルバートを回転させの柄を地面に突き刺す東雲、するとハウレス周辺の地面がせりあがり徐々にハウレスをのみこんでいく…もはや指一つ動かす力もハウレスには存在しておらずただ黙って呑み込まれるのみだった。

「いいか…若造…貴様が力を発揮するたびに貴様の力は広がり貴様の力を狙う者は増え続ける……いずれ必ず来るその時、貴様が世界

に絶望した時、貴様は人間にとって最悪の魔王と成りえるだろう…
わしはその時を地獄で楽しみに待っておるわ!!!世界最強の悪魔
さえ喰らう【捕食者】よ!!!!クツハツハツツハハハハ……」

言いたいことを言い続け狂ったように嗤い続けながらハウレスは呑
み込まれていった…

墓地に一人残された東雲は、ハウレスがいた場所を見つめる。

ハルバートは黒い霧に包まれたかと思うと瞬く間に黒い霧が霧散し
中から蒼い刀身の霊剣：禍風が姿を現す。同時に東雲の瞳もブラウ
ンに変化する。

「コンタミネーション・オン」

禍風は緑の光る粒子に分解されて東雲の腕の中に吸い込まれていく。

「……残念だったなハウレス…俺は何を見ても何も感じん、俺は俺
の決めた通りに振る舞い動くロボットのようなものだそんな俺が何
に絶望しろというのだハウレス？」

帰ってくるはずのない問いかけを行う東雲、皮肉を言っているのに
彼の表情は何も何の感情も浮かんではいなかった…。

時刻は六時を過ぎ日も確り沈み、夜の暗闇が町を支配していた。
一つの武家屋敷に二つの声が重なり合って響き渡る。

「ただいま、イリヤ帰ったぞ」

「ただいま戻りました、イリヤ」

口調こそ違つが全く同じ意味を持つ言葉で帰りを告げる土郎とユノ、
其れに答え奥からこの家の住人であるイリヤの声が響いてくる。

「おかえり〜シロウ、ユノもうすぐ晩御飯できるから急いで手を洗
つてきてね〜」

晩御飯と聞いて家に充滿した香りに気付く土郎、独特の甘い匂いに
牛乳の匂いで大まかな当たりをつける土郎。

「こんばんは…シチューみたいだな、ユノ急ごうか？」

「はい、今日は寒かったのでちょうどいいと思われます。イリヤの
料理がいかほどの腕前なのか気になりますし、…彼女もシロウが指
南したのでしたね 楽しみです」

落ちつた口調で答えるユノだが、雰囲気や語尾で明らかに速く食べ
たいという意志がダダ漏れなうえにどういいう仕組かは不明だが癖毛
(アホ毛)がピコピコ上下に揺れている。

ユノは何故か興味がるものに対して癖毛(アホ毛)が反応する妙な
癖(?)を持つていたのだが…土郎は何故か其れについて触れたこ

とはなかった：何故か触れたら何かが終わってしまうような危機感に襲われるのであったからだ。

（これが秘められし狂気：なわけないっか…）

少しアホなこと考えたと自己嫌悪する土郎であったとき

“カチャ、カチャ、カチャ”

土郎とユノが手洗いを済ませている間に料理をあらかじめ完成させ盛りつけを始める銀髪に紅い目の少女ことイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

白いエプロンを身にまとい手際よく盛り付けていく、メニューはだいたい土郎の予想通りでサラダにメインディッシュとなるクリームシチューであった、イリヤは元々土郎に家事を習っており桜ともつい先日までは良好な関係であり共に帰って来た土郎を驚かすために家事：おもに料理のスキルアップを目指し切磋琢磨した中でありそのせいでイリヤの料理、特に洋食は相当なレベルに達していた。

シチューと一口にいつても味付けは多彩であり、肉に下火を通す際の火加減、味付け、野菜を煮込む時間、野菜の大きさ、またルーを使う場合も複数のルーを混ぜ合わせることでその味付けは無限大といっても過言ではないほど選択肢が広がる。

まさにオムレツに匹敵するほど個人の技量によってその味を変化させる料理であった。

（桜は昨日士郎に料理作ったんだし今日はあたしの上がった腕前を見せちゃうんだから！！）

ぐっ！と拳を握りしめ決意を新たにする少女がそこにいたが、もうすでに出来上がっているものが決意を新たにしたからといってよくなるとは到底思えないのではあるが…

「イリヤ、手伝うことあるか？」

「わきゅん！！」

決意を新たにしている処に突如後ろから声をかけられなんと妙な悲鳴をあげながら飛び上がるイリヤ

「なんだ、シロウか…もうっ！！びっくりさせないでよお」

「？俺は普通に声かけたただぞ？……にしてもずいぶん面白い悲鳴だったなイリヤ？」

“ニヤリ”といやな笑みを浮かべイリヤに問いかける士郎、其れを聞いた途端イリヤの顔は見る見るうちに赤く染まっていく。

「シ、シロウからかわないでよ！！もぉ！！」

“ブンブン”と頬を膨らませ士郎に文句を言うイリヤ、その背後の洋鍋は今にも吹き出しそうになっている。

「ハハハハハっ！！悪い悪い…ってイリヤ火っ！火っ！！火を止めろっ！！！」

「へっ？…わああああああ！！！」

あわてて火を止めるイリヤ、シチューは噴き出る一歩手前で沈静化しなんとか大事にならずに済む。

「フウ…危なかった…」

火を止め、冷や汗を拭いながら安堵の息を吐き出すイリヤ、士郎もまた安堵の息を吐いている。

「ダメじゃないかイリヤ、火を使ってるときによそ見しちゃ…！まあ俺も悪かったけど火を使うときは気をつけるんだぞんだぞ、何かあったら大変だからな」

士郎の叱咤とその裏に隠された本心を聞き“しゅん”と顔を俯かせてしまうイリヤ…

「ごめんね…シロウ…シロウが帰って来たのがうれしくてついはいいじゃった…」

予想以上に落ち込んだイリヤを見て、罪悪感を駆りたてられた士郎はイリヤの頭にそつと手を置き語る。

「ま、何も無かったんだ気にするな。さあ飯にしよう何をどうしたらいいんだイリヤ？俺もユノも晩飯を楽しみにしてるんだ早く準備しよう」

そう言いながらイリヤの頭をなでる士郎、イリヤは其れを聞き俯か

せていた頭をあげ元気良く応える。

「うん！！じゃあシロウはサラダの大皿をまず運んでね！私はシチユーをよそってるから、順番に運んでね！」

「了解つと」

イリヤに答え、皿を運ぶ士郎とシチユーをそれぞれの更に盛るイリヤ、ツとその時

「先輩、イリヤちゃん今晚わ〜」

「イリヤ、空腹です」 “グウウウウウウ”

と桜とユノの二人がそろって居間に入ってくる、ユノに至っては腹の虫が合唱を奏でていた。

「じゃあ、手伝ってね “二人” とも」

イリヤは笑顔で答える。

これは、何気ない日常のページだが日常はたやすく崩れ去る、そしていつ崩れ去るかは誰にもわからない。

彼らの日常は今夜にも崩れ去るかも知れないのだが彼らは其れを知る由もなかった…

続く

おまけ

イリヤと士郎が家族ドラマを展開していたその時

“グウウウウウウ!!”

「空腹です、ひもじいです、おなか空きました…ですが、あの空間に割って入るほどKYではないので我慢しますが」

つと一人空腹と戦う魔導書の精霊がいたとさ

“ピンポーン”

呼び鈴が鳴っているがシロウとイリヤは鍋にかかりつきりで聞き逃したようだ

「仕方ない、私が出ますか…戻ってきたら食べれるようになっていることを祈っていますか…」

“とてとて”と歩きながらユノはぼやく

「ハイ、どちらさまでしょうか?」“ガラララララ”

旧いのか少し硬くなった扉を開けながら玄関を開けるとそこには
やや紫の混じった黒髪のナイスバディの少女磨桐 桜がいた。

「こんばんわ、ユノちゃん」

「桜でしたか、どうぞ中へイリヤが夕食を用意しておりおそらく私
たちが行く頃には食器を並べ始めるころだと思います。」

「じゃあ、お手伝いします。」

桜の申し出を受けユノは少し考え不確定要素を口にしてしまう。

「それまでにあの家族ドラマが終わっていればの、話何ですけどね

…」

「?????????」

ユノが言う家族ドラマに心当たりがない桜は?を大量にその頭上に
浮かべるのであった。

第十六話 嵐の前の静寂（後書き）

ユノがセイバー二号になりかけてるような…（本命は凜の度肝を抜くためのキャラだし今は、まだ影が薄いだけきつと、多分、おそろく…）

第十七話 再開と出会い（前書き）

大変遅くなりました。

バイト忙しくて寝不足と筋肉痛：

第十七話 再開と出会い

士郎、ユノ、イリヤ、桜の4人はテーブルを囲みイリヤが作ったシチューを口に運ぶ。

「イリヤ、腕上げたな！洋食だともう勝てないかもしれないな」

「美味です」

「ほうれん草がいいアクセントになっていますね」

各々感想を口にするも全員イリヤの料理が美味という共通点を持っていた。

「ふふふふ、当然よ」

イリヤはその育ちつつある胸をはり威張る

「イリヤちゃん先輩が行ってから料理の研究には余念が無かったですからね」

桜がくすくすと上品に口に手をあてながら笑う

「桜！……！それ内緒って二人で決めたでしょっ！……！……って今の無し！……！今の無し！……！……！」

桜の暴露に対してあわてながら桜を問いたただすがそれによってイリヤの努力は完全に日の下に引きずり出されることとなった。

「別に恥ずかしいことじゃないだろ？イリヤががんばったってことだろ？恥ずかしいことじゃないんだから自慢してもいいじゃないか？」

「そういうことじゃないんだよ……土郎……（ほんとに乙女心がわかってないなあ……）」

イリヤの胸中など知らずに？を頭上に浮かべる土郎

そのとき、黙々とひたすらにシチューを頬張っていたユノが言葉を発する

「ところで、大河はどうしたのですが？姿が見えませんか？」

「「あつ……」」

ユノの問いに桜と土郎がはもる。ちなみにユノの皿はまぶしいほど綺麗にたいげられている。

「タイガなら今日……ていうかしばらくこないわよ、しばらく缶詰だから」

三人に自然に生まれる疑問の答えをイリヤが語るがその回答が新たな疑問を一同に生む

「イ、イリヤ……缶詰って漫画家が締め切り間際によくあるって言う……あれか？」

「ええ、そうよタイガったら期末テスト作ってないんだから、テスト対策プリントも全学年分……組の人たちにお願いでして仕事以外で

きるまで出れないようにしてもらったの」

それを聞き士郎に戦慄が走る

（イリヤは、組長の娘である藤ねえを差し置いて組を掌握してる？
！そういえば爺さんもイリヤになんか甘かったし、小遣い上げてるし…もしかしたら実の娘より娘に見ているんじゃないかなろうか？）

イリヤのカリスマに舌を巻く士郎…夜の星空に大河が笑顔でサムズアップしている光景が士郎の脳裏に一瞬浮かんだが無かったことにして食事続けることにした。

「おかわりを所望します」

…食事の前にこの空腹娘におかわりが必要なようだ。

（（そっぴえば異常に食べるの早いのに、音がしてない…））

魔術でも使ってるの？という疑問が桜とイリヤの胸中に生まれるが士郎は見慣れているためはや疑問にさえ思わなくなっていた。

（せめて…ユノのマナーを守るところだけでも藤ねえ見習ってくれないかな…）

士郎はかなうことの無い願いを胸におかわりをよそうのであった…

第十七話 再開、出会い

「桜、夜も遅いから送って行くよ最近何かと物騒らしいからな」

前日に殺人事件があつただけに土郎の心配はもつともである。

「え？…でも悪いですよ先輩…」

「こんな夜更けに何かあつたら大変じゃないか？家族なんだから遠慮するな」

「では、私は明日の夕食に黒部和牛のステーキを」

ユノが会話に乱入し図々しい要求をする。

「あつ！！ユノずるい！！じゃあ土郎、私とデートしてっ！！」

それに乗っかりイリヤマまで要求を繰り返してくる。

「お前たちは少し遠慮しろよ…」

三人のやり取りを見て桜はくすくすと笑いをこぼす。

「わかりました。ちょっとだけ我がまま言っちゃいますね、先輩お願いします。」

それを聞き、土郎は苦笑いを浮かべながら応える。

「だから、こんなの我がまま内にも入らないだろ…わかったよ、上着を取ってくるから玄関で準備していてくれ、ユノ手伝ってくれ」

「わかりました」

そういつてユノと二人屋敷の今から置くへと二人は移動する。

「ええつと…おっ！！あつたあつた！！」

部屋の故人、衛宮切桐の部屋をあさり一着のくたびれたコートを取り出しそれを羽織る土郎、土郎があらかじめ持っていた服のほとんどは成長し体格が変わってしまったため着る事ができなくなってしまうため養父の服を拝借することにしたのだ。

「ユノ」

自分の背後にいる一人の少女の名を土郎は呼ぶ

「わかっています」

ユノが応えたその時、その瞬間ユノの体が衣類ごと無数の紙のペー
ジにバラける。

バラけたページが紙吹雪のように部屋を舞う。

土郎は黙って右手を手のひらを上にして出す、すると紙吹雪を織り
成すページは土郎の手の上で積み重なり一冊の革表紙の古ぼけた分
厚い本にその姿を変える。

土郎はそれをあらかじめコートの内側のズボンに取り付けていたホ
ルスターにしまう。

「ユノ、窮屈だが我慢してくれな？」

士郎は本へと姿を変えたユノに語りかける、それに応えるように士郎の頭に声が響く

（気にしないでくださいシロウ、私はあなたの所有物であり、あなたは私の主なのですから）
それを聞き士郎の心は少しばかり怒りに染まる。

「ユノ、前に言ったただろ自分を物としてみるのを止める。お前は飯を旨いと言って食うし、眠って夢を見ることもある、自分で考え、感じる事ができるし子供だって生める。誰がなんと言おうとお前は人間だ。人間なんだよ。」

士郎は最初語気を荒くしながら語っていたが途中からは、本を撫でながらまるで聞き分けの無い子供を諭すように優しく語り掛ける。

（シロウ、気遣いは嬉しく感じますが私が魔導書であり、あなたの所有物である事実は変わりません。【あなたの理想を叶えるための力となる】これは私が決めた私だけの存在意義です。それだけは否定しないでください）

ユノの言葉に少しばかり考えさせられる士郎。

自身を物といいつつ自分のあり方を自分で決める。自分のあり方を自分で決めるのは物には絶対にできないことである、ユノは自身のあり方を誰に強要されずに己が意思で決めたそれは人間でしかできないと事であった。

「自分でそう決めたならそれでいいか…何だ立派に人間しているじゃないか、怒って損した。」

(怒られて損しました)

「(プっ)」

二人そろって笑い出す。

玄関では桜が帰り支度をすでに整えていたのでイリヤに留守番を任せ夜の住宅街を士郎と桜それに本となり士郎の懐に収まっているユノは歩んで行く。

しばらくして上り坂に差し掛かる、ここまで来ると和風の建築物は少なく洋風の建築物がその大半を占めてくる。

その内の一軒ひときわ大きな古ぼけた洋館が見えてくる、間桐邸である。

ふと士郎は屋敷の門の前で動く人影に気がつく

「?あれは誰だ?桜知っているか?」

「あ、あれは……私のおじい様です」

士郎自身かつて何度か屋敷に招待されたことはあるが桜の祖父にあつたことは無いが桜自身が言っているのだから間違いないだろう。当然事で疑問を投げ捨てる。

…桜の肩がわずかに震えていることに気がつかず。

やがて距離が近づき人影の姿がはっきり見える

それは腰も曲がり髪のもも一本たりとも存在しなくその姿は一体いくつなのか深いしわが頭部全体に無数に刻まれどこと無く不気味な雰囲気を漂わせていた。

「おや？桜ではないか…すると隣の彼が噂の衛宮 士郎という人物かの？」

老人は士郎を見据えながら問う。

「はい…高校のときよくしてくれて、兄さんの友達だった先輩です」
それを聞くと老人は飄々と笑いながら語る

「そうか、そうかやはりお主が衛宮士郎か、ワシは間桐 臓硯と申す。孫たちから主のことはよく聞いておるよ」

「はあ、どうも衛宮士郎といえます。桜にはいつもよくして貰っています」

挨拶を交わす士郎と臓硯、そんな中桜が会話に入りこむ

「ところでおじい様はこんな夜更けにどこかに用事があるんですか？」

臓硯は一瞬桜を見つめ、すぐに先ほどと同じく飄々と笑いながら語りだす。

「カツカツカツカ…なに、TSUTA Aにレンタルビデオを返しにこのうかと思つてな今から行くところだったのじゃよ」

そついつて臓硯は左手の袋を見せる。

「そつだつたんですか…言いつけていただければ私が行きましたのに」

「なに、たまには外に出て体を動かさんと体に悪いじゃろ？」

「それは…そうですね」

「まあ、こんなところで立ち話も何じゃし客人上がって行かんかの？」

「士郎は少し考える上がったっていいのだが、この後夜の見回りをするつもりだったので遠慮することにする。」

「いえ、もう夜も遅いですからまたの機会にします、桜おやすみ」

「はい、先輩もお休みなさい」

そついつて桜と臓硯が屋敷の中に入ると士郎は今来た道へと降り帰り行くうとする。

「少しいいかの？」

歩き出そうとする瞬間後ろから声をかけられるそれは先ほど聞いた臓硯の声だった。

「何でしょうか？」

いつの間に背後を取られたのかと疑問を感じながらも振り返り聞き返す。

「アインツベルンは衛宮を憎んでおる、気をつけることじゃ」

「なっ！イリヤが？どういう事だ?!」

「さあ、アインツベルンの小娘が如何様に思うとるかは知らん、ただアインツベルンという一族は衛宮の名を継ぐ者を裏切り者の家系を恨んでおるそういう事じゃ」

一番聞きたい如何して恨まれているかと言うことは語らず恨んでいると言う結果しか語らない臓硯に士郎はイラついてしまう。

「まあ、アインツベルンの小娘に殺される覚悟あるのなら聞いてみるといいわい、カツカツカツカツ…」

臓硯は嫌な笑い声を上げながら夜の闇へと消えていった…

「イリヤが俺を俺たちを恨んでいる…」

士郎は3年前の聖杯戦争を思い出す…心当たりがあった。

そういえば不思議なことがあったことも思い出される。

イリヤと始めて出会ったあの夜、士郎自身聖杯戦争など知らない少し変わった苦学生であり自身が魔術師であることは誰も知らず、ましてやその中で7人しか選ばれないマスターに自分が選ばれるなど

誰が予想できようか…にも関わらずイリヤは言った。

『早く呼び出さないと死んじゃうよ……おにいちゃん…』

あれは、初めから土郎が聖杯戦争にマスターとして選ばれる事が判っていたが故の言葉にしか思えない。

己自身を手取るにふさわしい者を聖杯自身が選定するというのに何故マスターである彼女は令呪も現れていない土郎がマスターと選ばれると知っていたのか疑問は尽きない…

いくら考えても迷宮入りした疑問は解決することなく土郎はいつの間にか昨夜一人の女性が殺害された現場へと着いていた。

犯人は現場に戻るではないが、この辺り一帯を縄張りになっていた場合姿を現す可能性が高いためである。

ふと土郎は冬の木枯らしが吹きぬける中、澄んだ空気によって夜空に星が瞬くのをはつきりと見えることに気づき星を見上げる。

その中に一際大きく輝く星を見つけ手を伸ばす…がいくら手を伸ばそうとも手が届くことはない。

「こんなにもはつきり見えて手が届きそうなのに届かないんだよね…」

(シロウ…)

ユノは土郎の眩きを聞き思わず彼の名前を呼ぶ…彼がとても儂く今にも碎けてしまいそうに感じたからだ。

静寂が辺り一帯を支配し切れかけの街路灯がちかちかと点滅し夜の闇を照らし出す。

“ガさっ！！”

突然後ろから物音がし、警戒を厳に意識を研ぎ澄ませながら振り向く

「そこにいるのは誰だっ！！」

「そこにいるのは誰っ！！」

ほとんど同じタイミングで発せられたこれまた殆んど同じ言葉が綺麗にハモル

だが…お互いその相手の声の主の姿を確認するなり硬直する。

よく知っていたからだ。

「も、もしかして…し、土郎？…」

ツインテールだった黒髪は腰まで伸ばされ軽くウエーブが掛けられ、黒のミニスカートにロングソックスだった格好は落ち着いた黒のロングスカートへと変わり全体的に落ち着いた空気を纏うようになりより女らしさに磨きを掛けた蒼い瞳の女性

「他に誰がいるんだよ…遠坂」

自身の魔術師としての第二の師匠であり聖杯戦争を潜り抜けた戦友、かつて懂れていた

遠坂 凜がそこにいた。

「おや？こんな夜更けに逢引かなお二人さん、でも……背後霊と一緒ってのはどうかと思うぞ」

突然公園の暗闇から現れる第三者、黒いコートに黒い髪にブラウンの瞳の青年…東雲 亮

ここに運命は交じり合い始める………続く

第十七話 再開と出会い（後書き）

バーサーカーがチートや

楽しんでもらえてるのが少々不安ですね…

第十八話 黄泉返ししモノ達（前書き）

途中士郎と凜が空気になってしまいました

感想……こないかなあ

第十八話 黄泉返ししモノ達

夜の闇と吹き抜ける風が支配する中仄かに街灯に照らされた臨海公園

「おや？こんな夜更けに逢引かなお二人さん、でも……背後霊と一緒に緒つてのはどうかと思うぞ」

今ここには表向き三人の人物がそれぞれ向かい合っていた。

「っ！っ！っ！あいつが見えてる？！っ！っ！っ！これはサーヴァント？！」

「なっ？！どついうことだ？！遠坂」

二人が各々叫ぶ中 東雲 亮が呪文らしき者を口にす

「コンタミネーション・オフ」

と同時に左手には蒼き刀身を持つ日本刀が反対に右手には紅き刀身の日本刀が携えられる。

そして…

「違うな…」

否定の言葉と共に一瞬、亮の姿を二人は見失う。

「っ！逃げる！！遠坂っ！！！！」

次の瞬間、亮は遠坂 凜の目の前にいた、その紅き刃が頭上にて街

灯に照らされきらめき振り上げられていた。

「しまっ！…！」

凜が声を上げる。

「俺の名は東雲 亮……鬼切りだっ！！！」

言葉と共に刃が振り下ろされる。

第十八話 黄泉返ししモノ達

凜に向かい振り下ろされたはずの刃は凜のすぐ横の空間を切り裂く、

「むっ…浅かったか…」

亮は何もないはずの空間を切ったのにも関わらず手ごたえから仕留め損なっただという意味の言葉を発する。

すると…

「グっ…馬鹿な…霊体であった私を傷つけただと？」

刀の軌跡のやや後方から男の声が聞こえてきた…口調やトーンがだいぶ違うが衛宮 士郎に良く似た声が…

同時に霞から現れるように一人の黒い衣服に紅い外套を羽織った、白い髪に黒い瞳の褐色の肌の男性が膝をついた状態で現れる。

凜はすぐに男のそばに駆け寄り亮と男の間に立ち、亮に向け指を刺す“指差しの呪いガンド”の構えである。

「アーチャー…じゃなかった、ファントム大丈夫?!」

亮をにらみつけながらその背の後ろの男性、かつて聖杯戦争で呼ばれし弓兵。紅き弓使い大英雄ヘラクレスを単独で五回も葬った名も知らぬ英雄、アーチャーであった。

アーチャー…否ファントムの姿を確認した士郎はやっと思考が追いついたのか問いかける。

「お、お前は…アーチャー！なんでお前がここにいるんだ?! お前はあの時、城で死んだはずだ?!？」

そもそも聖杯戦争中しかサーヴァントは現界できないはずだ。」

士郎にとって聖杯戦争とは忌むべきものであり、人々の安寧を脅かす排すべき物であった。

聖杯戦争の代名詞とでも言うべきサーヴァントがここにいるという

ことは、聖杯戦争が始まるもしくは始まっていることに他ならない。

「ちょっと!! 士郎!! そんなことより目の前のこいつをどうにかするほうが先でしょっ!! ……ファントムどう? いけそう?」

士郎を凜が怒鳴りつけたあと背後のファントムに問いかける。

「フム…何、かすり傷とさして変わらんさ、どうと言う事はない」

紅い外灯を羽織ったファントムは右の肩口から左のわき腹にかけての刀傷を掠り傷と称して立ち上がり、凜の前へと出る。

「サーヴァントが、マスターに守られていては格好がつかないのでな…先ほどの礼を兼ねて私に行かせてもらおうか」

ファントムは不適な皮肉な笑みを浮かべながら告げる。

「ええ、わかったわ、ファントムそんな訳わからないやつギッタンギッタンにしちゃいなさい」

「了解した」

ファントムは自身の内なる世界・精神世界…剣の墓標が無限に突き刺さる紅き荒野より白と黒の刀身を持つ二刀一対の中国剣を現世に実体化【投影】させる

夫婦剣【干将・莫耶】

古代中国呉の刀匠干将与妻の莫耶、及び二人が作った夫婦剣陰陽二振りの短剣。アーチャーを象徴する宝具。互いに引き合う性質を持つ夫婦剣。

それを陽剣・干将を右手に、陰剣・莫耶を左手に携え亮に告げる。

「さて、自身が刃を向けたものがどのような存在なのか身をもって知るがいい」

ファントム…かつて弓兵だった亡霊は陰陽の剣を両の手に携え東雲にその身を弾丸のように加速させ疾走する。

ありえない…：士郎と凜は目の前の光景が信じられなかった…：自身がかつてサーヴァントと相対したが故に。

ただの人間が霊体状態のサーヴァントに傷をつけたに留まらず互角に渡り合っているなど信じられなかった。

サーヴァントは過去、現在、未来において空想、実在をとわず人々の思念が英雄を核にして生まれた思念集積体が実体化した存在であり、精霊の一種である。サーヴァント…：英霊は人類を滅びへと向かう因子が発現しその時代に因子を排除する因子が発現しなかった場合世界によって実体化し滅びの因子を排除した後その時代から存在を抹消される。

人類を滅びから救うという方から彼らサーヴァント・英霊は守護者とも呼ばれる…：すなわちサーヴァントに対抗できるということ

は。それなりの神秘を内包した存在か限定的な条件：サーヴァントが不利な条件、敵対者が有利な条件が何重にも重なって始めておきる言わば奇跡であり、それと真つ向から対峙できるということは世界とも渡り合えるということに他ならないのだ。

それが今…眼前にて起きているのだ

幾たびも赤と白、黒と青の瞬光が交差するたびに甲高い金属音が鳴り響き火花が散る

「フンっ！！！」

「閃っ！！！」

赤と黒の外套をそれぞれ纏った二人の男の両の手に携えられた剣が交差する。

「さすがはサーヴァント、吸血鬼…出来損ないとは格が違う」

亮はそついつつ白桜を横なぎに振るつ

「お褒めに預かり光栄だな、しかし君はあの時、最初から私を狙つ

ていたな」

白桜を陰剣で逸らしながら言う、二つの剣が重なり真っ赤な火花を散らす。

「当然だ、俺は鬼切り…虚^{まじろ}わぬものを屠るが使命」

軌道をずらされ振り上げた状態の白桜を振り下ろしながら答える

「故に此度の聖杯戦争で長きに渡る死者を戦わせる、などという悪趣味なゲームは終焉を迎える」

振り下ろされた白桜を両の剣を交差させて受け止めるファントムだが、亮の剣戟の威力の前に地面に蜘蛛の巣状に罅が走る。

「フム、それは困るな…我が望みはマスターを勝利へと導くこと、終わらされてはかなわん」

押されているのも関わらず皮肉な笑みを浮かべながらなんでもないという風にファントムは語る。

「そうか」

亮の左手の禍風から言葉と共に突きが放たれる

「最も…悪趣味という点に関しては同感だが…」

迫りくる突きを鉄心入りのブーツでまるでサマーソルトのように刃先を蹴り上げ回避し、空中を爆転し地面に着地するなり地面を蹴りその両手に携えられた白と黒の中国剣を次々と振るいながら続きを口にする。

「世の中、バトルジャンキー戦闘狂というのもあるぞ」

ファントムの鋭い連激を次々と捌き一撃も食らわない亮

「貴様がそうなのか？」

「まさか、私は無駄な戦いはしない主義だ」

「そうか……それにしても貴様：ほんとうに守護者か：存在自体が歪だ。」

いくつものファントムの剣をそのすべてを相対速度を0にした上で横にわずかばかりの力を加え亮はファントムの剣を回避していた故に亮が防御に回ってからは火花が散ってはいない。

「
」

東雲の問いに沈黙を以て答える赤き双剣士、それは肯定に他ならない。

再び交差する二対の刃金、真つ赤な火花が散るその中で漆黒の外套を纏った青年が確信を持った言葉を紡いだ。

「
反英雄か」

「だとしたら如何だというのか？」

それは肯定に他ならない決定的な言葉

反英雄、それは既存の英雄に討たれた物語の悪を司る、悪行を為し結果として世界に貢献した英霊と正反対の存在

「別に如何もしないな　　だが、死者は死者らしく涅槃に還れっ
！！」
「断るっ！！」

鏢迫り合いの密接した状態では双方てが出せないと同時に後方跳躍、
間合いを取り直す。
双方ともに両手に刃を握ったまま脱力、およそ戦闘の構えとは思え
ないほどの自然体
それは無為の構え、力を抜き自然体でいる事で相手に攻撃・防御の
予兆を感じさせず行動を予測させない構え、一切の防御・攻撃の予
備動作を行わない故に死と生が背中合わ背となる構え

「
「

両者ともに無言、真冬の肌を刺すような冷気を含んだ風が吹き抜け
る。

そして赤と黒、対の双剣士の間の空気が圧力を増していく、殺気と
剣気がぶつかり合い水面下で火花を散らしているようだ。

士郎と凜は二人を固唾をのんで見守る。それしか出来ないからだ。

“ キンッ！！キンッ！！ ”

そして両者が同時に動いた。

赤と黒、白と赤、黒と青それらが交差し同時に二つの金属音が短く
鳴り響く。

“ カラン、カラン ”

二つの風が交差し駆け抜け、四つの剣閃が奔りる。
そして……比較的大きな金属が地面に落ちた音が鳴り響く…

「うそ…」

「うそだろ…」

「……………」

戦いを見ていた二人もファントムさえ驚愕の表情を浮かべる。

宝具…人々の幻想が詰まった一級の神秘

干将・莫耶の刀身かんしやう ばへやが切り落とされたのだ…

切り落とされた干将・莫耶の断面はまるで鏡のように光を映し、覗き込んだものの顔を映す…

やがて“パリん”とガラスが割れるような音を立てて破片ごと消え去る。

「くっ!?!」

ファントムは再び干将・莫耶を投影し亮に向かい切りかかる。

「無駄だ…」

ファントムの中国剣と亮の刀が交え割るたびに刀身が切り落とされる。

刀身が切り落とされるたびにファントムは剣を投影するがそのすべ

てが亮によって切り落とされる。

(高位の宝具ならば…)

大包平、童子切安綱、日本刀の最高峰とされる二振りの刀を投影し振るうもまたや刀身を切り落とされる。

グラム、デュランダルなど東西南北かまわず魔剣、聖剣を投影し振るうもすべて一閃の元に切り落とされる。

(近接戦闘は危険だ)

ファントムは剣による近接戦闘を危険だと判断し、手に黒鍵を投影し亮に投合する、

投合された黒鍵は亮によって真つ二つに切り裂かれる。

その間に後方へと距離をとったファントムは漆黒の弓左手に投影し、その強靱な脚力で高く高く跳躍する。

そして…

「喰らうがいい…」

ファントムからまるで機関砲…ガトリングガンのように無数の矢が亮へと降り注ぐ

「破邪顕正」

自身に降り注ぐ無数の矢を確認した亮は自身の内に眠る一つの魂を

呼び起こす…

右手の紅刀・白桜が青白い光に包まれ弓に変化する。

左手の青刀・禍風を地面に突き立て、左手に青白い光の矢を生み出し…

「万物悉く打ち落とせっ！霊弓・乙姫っ！！！」

ファントムの打ち出した矢のうち自身に命中する矢だけを速射砲のように光の矢を次々と打ち出し破壊する。

矢がぶつかり合うたびにぶつかり合った矢が砕け光の小塊へとなり果てて、夜の宙に舞う。

亮に命中することのなかった矢は公園の地面を砕き砂塵を舞い上げ亮の視界を一時的に奪う。

いまだに空中にいたファントムは呪文と共に一本の捻じれた剣を引き出す

「我が骨子は捻じれ狂う（I am the bone of my sword）」

捻じれた剣…偽・螺旋剣（カラドボルグ？）を夜天を背に紅い外套をはためかせながら弓に携え弦を引き絞る。

夜の闇に融け入りそうな漆黒の弓の弦は限界まで引き絞られ、弓は軋みを挙げる。

限界まで魔力をこめられ破裂寸前となった偽・螺旋剣（カラドボルグ？）がはみ出した魔力を雷として纏う

それを真名と共に解き放つ！

「カラドボルグ？偽・螺旋剣っ！！！」

放たれた偽・螺旋剣（カラドボルグ？）は砂塵を空間ごとねじ切りながら亮へと向かう、その瞬間、黒い刀身を持つ直刀を先ほどの光の弓に携えている亮の姿があった。

「忌閃は敵を射抜く…！！！」

バチバチと闇と光がお互いを否定し合い反発しているのを押さえ込む亮は迫りくる偽・螺旋剣（カラドボルグ？）の切っ先に向けて黒い直刀を弓から開放する。

直刀は空間を切り裂きながらまっすぐ偽・螺旋剣（カラドボルグ？）へ向かい、

二つの剣でありながら矢として放たれた剣の切先がぶつかり合う。

二つの剣が触れたその瞬間、偽・螺旋剣（カラドボルグ？）は真っ二つに裂けこめられた魔力が暴発し、剣に秘められた概念により破壊のベクトルを得て巨大な爆発現象を引き起こす。

その爆発によって弾き飛ばされた黒い刀身の直刀は宙を舞い。

”ガキンっ！！”
地面に突き刺さった…

ファントムは驚愕の表情で亮を見据える…もっともそれは戦いを見ていた二人も同様であったが。

「貴様……一体何者だ？、唯の人間が真つ向からサーヴァントと戦えるに飽き足らずに宝具まで破壊するなど……」

それを聞き亮はにやりと口を三日月のように吊り上げながら弓を剣に戻す。

「言つただろう？俺は鬼切りだと…なっ！！」

亮が言っている途中で横から突如として白い閃光が、膨大なエーテルの本流が触れるもの総てを砕き、削り取り、消滅させながら亮に迫りくる、それを跳躍し回避するも背後にフルフェイスの西洋の白銀の騎士甲冑に全身を包んだ騎士が現れる。

「ほう？良くよけたな…」「っ！！！」

亮は空中でありながら背後に振り向きながら右手の紅刀・白桜を振るう………が

その手に携えられたエクスカリバー（約束されし勝利の剣）に酷似した雰囲気を纏った西洋剣、白銀の刃が亮が振るうよりも速く振られる。

「がっ！！」

亮は苦痛の声と共に切りつけられ、その斬激はいかほどの重さであったのか亮の体をやすやすと吹き飛ばし。

そのまま亮はすぐ近くの海へとつながる川の水面に叩き付けら巨大な水柱を上げまるでスコールのように大量の水滴が公園に降り注ぐ。そして亮は浮かび上がることなく川のそこへと沈んでいったのだ。た。

“カチャッ”と鎧を音を立てて地面に着地する甲冑の騎士……すると甲冑の騎士の背後、夜の公園の影から現れる一人の男、は士郎と凜に話しかける。

「衛宮に遠坂、久しぶりだね。にしても危なかったね顔見知りだったから手助けさせてもらったよ。ああ、礼はいいよこっちが勝手にやったことだからね」

男は飄々としながら一方的に語る、その男の顔を声を存在を士郎たちは良く知っていた…

「あんた…生きていたの…？」

「お、お前…お前は」

その長年悪友として付き合っていた士郎が見間違えるはずもなく。

桜と同じ色の髪、瞳を持つもの……間桐 慎二を

「ん？なにどうしたんだよ二人とも？幽霊でも見たような顔してさあ」

それを聞いて士郎は問わずには要られなかった。

「慎二……お前……バーサーカーに殺されたはずじゃ……」

続く

第十八話 黄泉返ししモノ達（後書き）

アーチャーのクラスは全クラス同票でしたので作者の偏見と独断で決定させてもらいました。アンケートに答えてくれた読者の皆様もことにありがとうございます。

これから物語は加速していきます。

（ほんとはもっと早くここまで来るつもりだったのに…）

第十九話 完全なる決別（前書き）

人物紹介更新してあります（サーバーントのみ）

第十九話 完全なる決別

「じゃあ、イリヤ。留守番頼んだぞ」

「任せといて シロウ」

玄関の扉が閉められ、桜とシロウの二人がじよじよに遠ざかっていくのが曇り硝子越しに見えるがやがて見えなくなる。

「ハア……」

見送ったイリヤの口からため息が漏れる、イリヤの心内を知る者はイリヤのみである為なぜため息をついたのか知るすべはない。

「……………さてつと」

イリヤは反転し居間へと向かおうと歩を進めようとした其の時、玄関に2メートルをゆうに超える人物が現れる……が、その体躯から男であることは分かるが暗闇に大半が隠れその姿が見えることはない。

「良いのか？」

「何が？」

男はイリヤの背に語りかけ、イリヤもまた背を向けたまま答える。

「あの者のことだ、このままでは何れ必ず巻き込まれるぞ……」

「……………イリヤよ、それは“今”この瞬間やも知れぬぞ。」

イリヤは目を閉じ背後の男にゆっくりと語る

「それは仕方ないよ、だってね。【シロウは聖杯戦争で生まれ】、【聖杯戦争でそのあり方を固定した】……シロウが聖杯戦争に関わるのは必然…言ってみれば運命フェイトなんだよ」

イリヤは微笑を浮かべ語る、其の時だけの救いがあるような気がするIFの話を

「前回の聖杯戦争でもしかしたら、“自分のためにも生きることを決めたシロウ”、“誰かだけの味方になったシロウ”、“誰かに救われたシロウ”になっていたかもしれない……そしてそれらの内のいくつかだと聖杯戦争は完全に終わっていたかもしれない、私がここにいなかったかもしれない。

でもそれはIFもしかしたらのお話だね。今のシロウには何の関係のない話、シロウは戦い続ける、剣を振るい続ける、鉄を鍛え続ける、皆が皆幸福となるそのときまで」

それは、絶対に終わることのない悠遠へと続く戦い。彼の身が朽ち果てる間で続く戦い。

自らの意思で彼はその戦いへと身を投じ続ける、報酬に人々を救ったという結果のみを得て…

「シロウは自分よりも他人を救うことを優先すると思う、だってシロウは自分のもつとも大切だった物を“自身を幸福に導くモノ”を切り捨ててしまったから、捨てたことを無意味にしないためにシロウは“立ち止まらない”。

うづん、“立ち止まれない”あなたなら分かるんじゃない？
自分の意志じゃないとしても自分の妻子を殺めてしまいその罪を償
うために【12の試練】を潜り抜けたアナタなら……バーサーカー、
うづんアーチャー……」

男、かつて狂戦士として呼ばれた大英雄ヘラクレスはイリヤの問い
に沈黙を返すのみであった。

第十九話

今、目の前に間違いなく桜の兄の 間桐 慎二だ。

しかし奴がいるのはおかしい、

3年前の聖杯戦争での一戦、新都に聳え立つ一際高いビルの屋上で
ライダーをセイバーの宝具【約束されし勝利の剣】エクスカリバーが消滅させた。

そのあと、宝具使用による魔力枯渇でセイバーが倒れたセイバーを

担ぎ戻る途中で“見てしまったのだ”

真っ赤な血の海の中、死臭漂う夜のビルの廊下で変わり果てた彼の姿を、もはや原型をとどめずグチャグチャの肉塊と成り果てその中であつた彼であることを示す、血に塗れた学ランを

そしてその犯人は次の日の夕刻、郊外の森の中の城で本人の口から語られた。

『馬鹿っ！！簡単に人を殺すなんていうなっ！！！！』

『あら残念ね…私ね、もう一人マスターを殺しているんだよおにいちゃん。』

昨日の話しただけ予想外といえは予想外だったかな、アイツはおにいちゃんが片付けると思ってたのに。

ごめんね、シロウがやらないから私が代わりに殺っちゃった。ほんとは横取りって好きじゃないんだけど…』

「慎二……お前…バーサーカーに殺されたはずじゃ…」

「ん？なんだそのことか………そんなことよりさあ」

慎二は全身^{フルプレートアーマー}甲冑に身を包んだ騎士の隣にへと歩をすすめ、その肩を気安く叩く。

「どう？こいつ僕の新しいサーヴァント【^{トレイター}反逆者】って言うんだ。あんなカスのライダーとは訳が違う。」

そう言いつつ遠坂と、ファントムと遠坂に呼ばれていたアーチャーに視線を向ける慎二。

「遠坂、きみは前と同じのを呼んだんだ。まあ、当然といえば当然だね前回と同じ条件で呼んだんだろう？違う条件で呼んで前よりも弱かったら目も当てられないからね」

慎二が一方的に語る、確かに同じ条件で同じ結果になるのは必然だ。だが、遠坂はたしかセイバーを呼ぼうとして失敗してアーチャーを呼んだはずだ。だとすると……

そうなのか？遠坂？

視線で問いかけてみる。

“さっ”

視線をはずしやがった。

（決定……前と同じポカやらかしたんだ。遠坂家固有スキル【うっかり】は健在だな）

”ゾクツウウっ！！！”

背筋に突如として悪寒が走る。

それが（後半）いけなかった、背筋に走る悪寒の発生源、遠坂は

「衛宮くん、いま、何か、“余計な”事考えなかったかしら？」

アカイアクマと成っていた……

「何も考えておりませんっ！！サー！！！」

遠坂が極上（紅い悪魔）の笑み（黒い）を向けてきたので0.1秒、人間の限界を超えて反応してしまった。

視界の隅でアーチャーことファントムが腕を組みながら明後日のほうに顔を向け冷や汗を流している。

止める！助ける！何とかしろっ！！

ファントムに視線で助けを求める。

無理だ、諦める

首を“フルフル”と横に振りながら断られた。

「何処を見ているのかしら、衛宮くん」

「サーっ！！申し訳ありませんっ！！！」

「よろしい、余計なこと考えていると呪っちゃう（ガンド乱れ撃ちしちゃう）ぞ」

「凜、君の年齢で【呪っちゃう（ガンド乱れ撃ち）ぞ】は止めたまえ。

その…見ていて痛ましいぞ。」

ファントムはなんとも居た堪れないといった表情で忠告する。

「うっさいっ！……！」

「ガハっ！！」「メキヤっ！！」

ファントムの余計な一言で切れた遠坂の一撃。見事な寸頸が決まり、嫌な音を響かせた後ファントムは崩れ落ちた。助けようとしてくれたのだらうか？

「で、あんなんで生きているのかしら？そこんところ聞かせてもらいたいんだけど？」

崩れ落ちているファントムを尻目に遠坂は慎二に尋ねる……だが

そんなことよりも俺の意識は慎二のサーヴァント、トレイター（反逆者）へと向いていた。

それにしても……あいつ、見たことがある何処だ、何処で見た？

甲冑の騎士を見た瞬間から何かが引つ掛かる、俺はあいつを知っている。

あいつの持つ紅い鍔、柄を持つエクスカリバー、あれは解析によってその正体は分かっている

“ガラティーン”セイバーの甥に当たるガウエイン卿が所持していたエクスカリバーの兄弟剣、彼の聖剣と同じく神によって鍛え上げ

られた神造兵器

【だが、やつはガウエインではない】

それだけは確かだ。読み取った剣の記録と今現在において、剣を所持している者が一致しない。

「ふうん、まともに答える気はないってわけね。」

「だから、言っているじゃないか。たまたまだよ。」

「ひき肉になったはずのあんたが何で、五体満足でいるのかちゃんと答えなさいって言ってるんだけど?」

しばらく考え事で二人の会話を聞き逃していたようだ。

ふと、俺は地面に膝ぐらいの高さで立ち込める霧のような靄……否、冷気に気づく

“出来損ないの虫風情の使い魔が、不意打ちとは遣ってくれたな……”

声はその場にいる全員の耳に届く、その声は先ほど 트레이ター によって切り捨てられた 東雲 亮 の声であった。

全員の視線が声の発生源：東雲が消え去った川へと向けられる。

そして驚愕する、川に流れていたはずの大量の水は氷塊へと変じていおり其処に立ち込める白い冷気、

「トレイターっ！！仕留め損なつたのかっ！！この愚図っ！！」

「馬鹿なっ！確かに手ごたえはあつたはずだ。」

罵声をトレイターにあげる慎二と声色から驚愕により驚きの声のみを上げるトレイター

「川を凍らすなんて、なんて……っデタラメ」

「凜っ！！下がっているっ！！こいつは普通とは違っっ！！」

遠坂が文句を言う、ファントムは彼女をかばうように前に立つ。

(妙です…)

(何がだ？ユノ？)

ユノが俺に語りかけてくるが回りの者には聞こえていない。

(これだけ大規模な魔術現象であるにも関わらず魔力を感知できません。さらに言うなら先ほどのファントムとの戦闘において魔力を感知できたのは黒い剣を弓から放った一度のみです)

ユノの言葉に未だ地面に突き刺さる黒い刀身の直刃の日本刀を見つめる……っ

“ ドクンっ！！ドクンっ！！ ”

その刀は激しく脈動していた。剣を視界に納めたため無意識に解析

しようとしてしまいが解析できなかった、ある一つの事実を除いて……

(剣が…… “生きてる” っ!!)

意思を持っているのではなくそれ一つが完全な生命体であったのだ。

“ 冷刃剣醒 ”

“ ドゴオオオオオオオオオオっ!!!!!! ”

破碎音と共に氷の河川が吹き飛び砕かれた無数の氷塊と共に黒いコート
の青年 東雲 亮が飛び出してくる。

“ スチャ ” 華麗にコートの裾を靡かせ公園に着地するその右手に携
えられていた紅い刀身をもつ刀はその刀身を軸にした氷の大剣へと
変化していた。

「ふうん…結構、頑丈何だね。でもお前じゃ僕の 트레이ターには勝
てないよだつて「うるさいよ出来損ない」なんだつて? 」

慎二が引きつりながらも先ほど不意打ちを決めたため自身が有利だ
と思ったのか、明らかに挑発と思われる戯言を吐こうとするが東雲
に遮られる。

「出来損ないと言ったんだよ、虫野郎が。人の命を“喰らわねば”
自身の命を保てぬ矮小な存在が出来損ないでなければなんだつて言
うんだ? 」

ああ、そうか。すまないな虫けら風情にはそのことに気づく思
考力さえあるはずもないか。」

「き、貴様言わせておけば……」

「なんだ、返しも下手だな。所詮虫には猿真似は出来ても人間にはなれんか、さすがは出来損ないだ。……だが、虫なのに猿真似とはどういうことだ？」

東雲の口から速射砲のように次々と罵声が飛び出て、さらには哀れむかのような言葉さえ飛び出てくるが哀れんでいるのではなく明らかに馬鹿にしている。

それよりも、東雲がいった人を“喰らわねば”という言葉だ。

一言、そして昼間の調査における“魔導書を使用していない魔術師による殺人”

だが、矛盾点もある慎二は魔術回路が存在しないはずだ。ならば一部の例外を除き魔術は使えない……だが今はどうだろう？

慎二は見たところ書を所持していない、なのにサーヴァントを従えている。

「慎二、お前マスターの証“令呪”はあるか？」

とりあえず聞いてみる、慎二は自己顕示欲が強い俺が聞けば自慢せずには要られないはずだ。

「衛宮つ！！そんなことよりも僕を馬鹿にしたこいつを殺すことが先決だ！！」

「慎二……答える……」

「ごねそうだったので殺気をぶち当てながら問い返す。」

「っ！！分かった！！分かったよ！！これだよっ！！！！」

慎二は右手の甲を俺に見せ付ける。それは偶然か、必然か……かつて俺の左腕に刻まれたのとまったく同形の令呪であった。魔術回路が存在しなくては令呪は現れない、令呪と魔術回路は？がっているからだつまりどういうわけかは分からないが慎二は、魔術回路を持っている。

「遠坂、確認する。間桐の魔術属性は何だ？」

「し、士郎？……水よ、そして特性は略奪よ。」

昼間の調査による情報と今の情報がパズルのピースのようにかみ合う、未だ不完全ではあるが事件の一部を浮き彫りにした。

それを聞き俺は一度目を閉じ心を決める、人々の命を喰らう悪鬼として慎二を討つことになるかもしれない、友であろうと邪悪であるならば討つ覚悟を

「慎二……何人殺した？」

「はあ？！僕が人を殺したって？馬鹿言うなよ何だって僕がそんなことしなくちゃいけないんだよ？」

「言い方が悪かったな……お前、何人喰った？」

「っ！！！！！！」

慎二の顔が驚愕に染まる、有り得ないものを見るような視線を向けてくる。

「教えてやるのか？エミヤとかいつの」

東雲が知っているようだ、慎二は反応から確実だ。あいつは人を喰って命を繋いでいる。

「頼む。」

「ふう………108人だ。」

108人、名も知らぬもしかしたら知っているかもしれない人たちに黙祷をささげる。

「慎二っ！あんたっ！よくも私がない間好き勝手遣ってくれたようね………ファントムっ！！」

「任せておけ。」

「殺せるわけにはいかない。」

ファントムが両手に干将^{かんしょう}・莫耶^{ばくや}を取り出し切っ先を慎二に向け、それを庇う様にトレイターが剣を向ける。

この後、慎二は完全に俺を敵に回す決定的なことをその口から漏らすことになる。

「何だよ！？あんな奴等、魔術師でもなんでもないやつらなんか、

なんの役に立たない無能なやつらなんか、むしろ僕の食料となって
光荣だろ?! サーヴァントに人間の魂を食わせるのだって、恒例じ
やないか?!」

「あんた、自分が特別な何かと勘違いしてない?」

「勘違いなんかしていない、僕は聖杯に選ばれた特別な存在なんだ
よ!! 僕が、この僕だけが死ぬなんてあつてたまるか!! そんなこ
とになるぐらいなら何人死んでもいいから僕を生き伸ばせるのが道
理だろ!!」

慎二が何かわきわめいている、目を覚まさせるも何も慎二は…もう
人間じゃない。

なら終わらせるしかない。

「あきれた…もういいわ、ファントム、チャッチャと掃除して頂戴」

「ふむ、確かにいるだけで吐き気を催してしまうな…早々に片付け
るとしよう」

いつもの皮肉な笑みはなく嫌悪の表情でファントムが答えると、東
雲が思いがけないことを口にする。

「手伝いはいるか?」

「確かに、あれを一分一秒速く片付けるには貴様の助力があつたほ
うがいい、しかし後ろから切りかかれられてはかなわないな。」

先ほど切り合っていたのだから当然の返答。

東雲が湧き出した異形を目にして咆える。

「じゃあ、こいつらが今朝のニユースの犯人か?!」

思わず聞き返す、その瞬間全員の意識が慎二から離れてしまった。

「じゃあね遠坂、衛宮」

「待て! つ慎二っ」

「待ちなさいっ!」

制止の声など無意味に慎二は黒い影に包まれたかと思うとその影は地面に溶け込むようにその輪郭を崩し消えていく。トレイターもまた霞へと消える。

慎二に向けて突き出されたてが虚空を掴むにとどまる。

「さて、こつちを先にどうにかしたいのだが……?」

はっと我に返る遠坂と俺、

「土郎は下がって、サーヴァントも持たないあなたじゃ足手まといよ……!」

遠坂が叫ぶ、だが今までもそしてこれから俺は引き下がりなどしない。

“今の俺”には力がある、なら尚のこと下がるわけにはいかない。

「遠坂っ！俺も戦う！今の俺には戦う力がある、行くぞ“ユノ”！
！！」

（イエス・マスター“術式形態選択・魔導法衣形態”）

術者と魔導書が真に一体となり【智は力なり】体現せしめし最強の
魔術師の証
それこそが…

「
「 マギウス・スタイルウっ！！！！

」
」

続く

第十九話 完全なる決別（後書き）

感想ほしいな〜〜

東雲の剣はスターオーシャン3のアイシクル・エッジをイメージして
てください

慎二が喰った人の数は108人間の煩惱の数と同じっ

第二十話 新たな姿（前書き）

今回ちょっと話の流れ的にイメージしにくいと思ったので短めにしています。

第二十話 新たな姿

「さて、こつちを先にどうにかしたいのだが……？」

東雲は凜と士郎の二人に問いかけその直後、弾かれる様に疾走する。

「フンっ!!」

東雲が地面を蹴りコートを靡かせ、空気を引き裂き一瞬で異形の群れの中へと飛び込み。

「閃っ!!」

“フン！フン！フン！”

右手に携えた氷の刃を持つ氷の大剣を振るい同時にいくつか風を切る音が聞こえる。

“ザシュっ!!”

一瞬の後、気色悪い色の体液噴出しながら、鋼鉄の甲殻を持つサソリを一瞬で細切れにし、キマイラはそれぞれ両断され息絶える。

だが、その周囲の異形たちは東雲に一齐に飛び掛かり、己が牙の、己が爪の餌食しようとするが其れは叶わなかった。

無数の地面から生えてきた氷柱の鋭利な先端に貫かれ、宙に釘付けにされていたから

「『守護氷槍陣』っ！！」

東雲が氷の大剣を地面に突き刺すと同時に地面から無数の槍のように鋭い氷柱ツノウツが生え、異形たちを貫いたのだ。

貫かれた異形は見る見るうちに氷に侵食され、氷のオブジェと化す。

「砕けるっ！！」

地面から剣を引き抜きざまに東雲が発する言葉と共に、異形は自身を貫き氷の槍と共に砕けて破片はすぐさま解けて消えていく。

「来いっ！！疾風はやてっ！！」

東雲が未だ地面に突き刺さった儘の黒い直刀に左手を向けて叫ぶ。

“カキンっ！”

黒い直刀、疾風は金属摩擦音を鳴らし勢いよく地面から引き抜かれ、空気を引き裂きながら飛来し東雲の左手に収まる。

疾風が手に収まると同時にそのブラウンの双眸はまるで人体を流れる血液のように紅い右目に、まるで暁の刻限より顔をのぞかす太陽のような金色のオッドアイへと変化する。

「『闇に住まいし風の精よ、我は許す……」

汝らが望むがまま祝杯を挙げ、騒ぎ、舞い踊れ……」

疾風を肩に担ぎ、東雲が詠唱を行う

つと同時に刃が瘴気を多分に含む風を纏う。

「『ラファール』っ！！！！」

疾風が振りぬかれ、ソニックブームがキマイラたちを地面や周囲の建築物ごと蹂躪し、粉々に吹き飛ばす。

しかし、異形は次から次へと沸いてきてきりがなく。とても減っている様には見えない。

そして地面が光ったかと思うと其れは魔方陣となり中央から3メートルほどの上半身のみゴーレムが現れる。

それは、鎖の？がれた杭を肩や背に打ち込まれ、まるで魔方陣に？がれているかのようなであった。

そしてその剛腕が東雲に振り下ろされる。

「ぐっ！！」

剛腕を右手の氷の大剣で受け止め耐える。その超重量と怪力のあまり、東雲の足が公園の舗装を砕きめり込み、地面に蜘蛛の巣状の地割れを作り上げる。

「なめるな……！！」

メキメキといいながら、地面に陥没する具合が増していき地面の地割れも広がっていく。

「『黒き風、汝らは吹き荒ぶ風の切っ先……！！』」

裂き、穿ち、そして薙ぎ払う者なり……！！』」

東雲の詠唱と同時に黒い風が無数の矢を生み出し、東雲ごとゴーレムを包囲する。

「『我が号令の元、敵を射貫き、破碎せよっ！！』」

黒い風の矢が一斉に放たれ、ゴーレムを周囲の地面ごと破碎し尽くす。

砕かれた地面が砂塵のカーテンとなり周囲の視界を奪う。

”フュン！！”

わずかに風が巻き起こり砂塵を彼方へと運び、風の矢の着弾地点には大きなクレーターがあらわになりその中央に佇む東雲の姿があらわになる。

其の時

「『 マギウス・スタイルウっ！！！！』」

「『

「あれは…一体…？」

黒き剣を携えた錬鉄者が顕現した。

第二十話 新たな姿

「マギウス・スタイルウっ！！！」

「」

士郎とユノの咆哮がこだまする。

つと同時に士郎の懐に収められた“黒の剣年代記”のページが紙ぶきのようにその暴風のような魔力の奔流に乗り宙を舞う。

そしてページは士郎を中心に渦巻き。やがて一気に集まり本のページで作られた繭を作り出す。士郎をその内に納め。

「一体…何なの!？」

凜の呟きは魔力の奔流にかき消され、誰の耳にも届くことは無かった。

そして繭を構成するページは見る見るうちに吹き通る鋼色に変色…

否、本のページは刃へと変貌し無数の剣の刃で構成された繭となる。

“バアアン！！！”

剣の繭は弾け、中にいた士郎がその姿を現す。

魔導書・ユノと一つとなり、魔導書に刻まれた知識を術式をその身に宿した。

最強の魔術師となった士郎が、以前とは違う士郎が、

赤みを帯びた頭髪はまるで刃のような透き通る白銀へ、

肩口までの体に張り付くような漆黒のボディースーツを身に纏い、

琥珀色の瞳は、夜の闇を照らす月のような金色に

右腕の甲には、灰色に光る五芒星が刻まれ

左腕の甲には、青い輝きを放つ令呪が刻まれ

「っ！！青い令呪っ？！有り得ないっ！！」

凜が驚愕の声を上げる。

（そういうことか、やつから発せられる圧倒的な魔力、力の波動：私はこのような力を持ってはいなかった……それにあの姿：、既に道は変わったというのか……）

ファントムは彼が自身とは違う道を進んでいることを理解する。

“ヒュウウウウウウんっ！！！！”

荒れ狂う魔力の奔流は一気に士郎に収束し砕けた繭の破片たる刃も士郎に群がり、組み合わせさり？み合わせさり剣の刃と同じ透き通る白銀の外套となり士郎の身に纏う。

「ブレイド・ロードっ！！」

（武装選択・【バルザイの偃月刀】）

士郎の腕から緑色に光る魔術文字が溢れ、複雑に絡み合い輪郭を形成する。

輪郭を形成された其れは存在の厚みを増して行き一振りの赤と黒の幾何学的な模様、構造の偃月刀形作る。

其れこそ歴代のマスター・オブ・ネクロノミコンも愛用する魔術師の杖にして剣、【バルザイの偃月刀】である。

剣をその手に握り、

“ブウンっ！！！！”

一振りする。剣風により一瞬、白銀の外套がはためく。

「さあ、俺たちの力見せてやるぞっ！！ユノっ！！」

（了解ですシロウ）

一陣の風となり士郎は駆け出す。そして、その背を見つめる紅い亡霊がいた。

（ならば……真に貴様が力を持つに相応しいか、貴様がその力を得て、どう変わったのか魅せてみる！！エミヤ シロウっ！！！！）

己と始発点を同じくする青年の背をファントムは見送る。

第二十話 新たな姿（後書き）

マギウスシロウの軽装形態のボディースーツはアーチャー私服半そでVerです。

で外套は武装連金のシルバースキンをイメージしてください（帽子なしで襟は立ててません）

第二十一話マギウス(前書き)

O P T e m R e s i s t a n c e L i n e

皆様ありがとうございました。

第二十一話 マギウス

魔導書

其れは、外道の知識の集大成

その中でも最上位の魔導書は魂と自我と肉体を持つ

さらに最高位の力をもつ魔導書は【術者とその身を一つとする】

魔導書の知識をその身に刻み込み、魔導書の宿す神秘を肉に、記された術式を血に、

その強靱な肉体は人を超え超人と化す

その身に秘めし魔力は人を限りなく不死身に近い存在へと導く

体内を駆け巡る複雑な術式は人の身ではなし得ない超常の力を与える

されど、その力は外道、暗黒の力……

故に闇の意志で力を振るものは破滅する。

狂気に吞まれ、力を無闇に振るい…やがては破滅する。

だがそれらは所詮力に振り回されていに過ぎない。

正しき怒りと憎悪のもと力を振るい

暗黒の力を、光の意思を持って行使する者

宇宙の悪意を享受出来ない脆弱な心
理不尽に抗い続ける不滅の意思
剣が折れようと折れた刀身を腕に縛り付けてでも戦う壮絶な覚悟

それらの条件こそ最強の魔術師マジウスの条件である。

第21話 マギウス

「さあ、俺たちの力見せてやるぞっ！！ユノっ！！」

(了解ですシロウ)

脚部から高密度の魔力を瞬間的に噴出しまるでロケットのように加速し一気に東雲が駆け出したとは逆方向に存在する異形の軍勢へと駆け出す。

魔刃結界を攻性に切り替える。

(涼解『靈頭あらたかな刃よ、我等に仇名す諸悪を悉く蹂躪せしめよ……行けっ！！』)

腕を振り下ろす。

つと同時に無数の偃月刀が一斉に駆け出し、撃ち出される

そして縦横無尽に宙を舞踊り、異形を切り刻む。

「
っ！！！！」

異形は断末魔を声にならない声で上げ、血液を体液を撒き散らし細切れの肉片と成り果て偃月刀に秘められた炎の力により燃焼する。

異形が燃える炎が、辺りを僅かながら照らし出し土郎の白銀の外套をうつすら赤く染め上げる。

すると、土郎の足元の地面が光を放ち魔方陣が展開し、先ほど東雲が打ち砕いたのと同じゴーレムが現れ、その剛腕を振り下ろす。

士郎に降り注ぐ5つの光弾、
士郎は柔道の受身のように地面を転がり回避し、光弾が降って来た空に視線を向ける。

すると其処には悪魔のような一对の翼を羽ばたかせ、牛のような角のはやした馬の頭蓋骨の頭部をもつヒトガタの動く石像【ガーゴイル】が5体浮遊していた。

士郎は其れを金色に変色した双眸で見上げ睨みつける。

「一気に墜とすっ！！！！弓をつ！！！！」

(了解、聖弓ウィリアム・テル起動)

士郎が左手の魔銃を投げ捨てると同時に再び魔術文字が溢れ縦に長い物体を

金色に光り輝く幾何学的な模様、構造の弓を顕す。

「……………」

金色の弓を左手に、右手に光の矢を作りだす。

そして、其れを光の矢を金色の弓に沿え弦を絞る。

ぎちぎちと弓が軋みを挙げ、光の矢は上下に二本ずつ分裂し…計五本の光の矢が携えられた。

「お返しだっ！！^{トレース}投影・開始っ！！！！」

ユノに接続された魔術回路が起動し士郎からユノへそして再び士郎へとめぐり純度、量を増幅させた魔力を流され神秘を実行するサーキットとして稼動する。

士郎は自身の内なる世界より一本の剣、先ほど自身の内なる世界に突き刺さった捻じれた剣を引き上げる。

士郎の右手に現れる一本の“魔剣が捻られ劣化させられた剣”は、矢として士郎の左手の金色の弓に携えられ、非常識なまでの魔力が弓から注ぎ込まれ“破裂寸前の風船状態”になり弓と同じく金色に輝き出す。

「我が骨子は捻じれ狂う……！！
^{カライト}偽おツ……^{ホルク}螺旋剣？っ！！！！！！！！」

放たれた剣にして矢は光の螺旋となり空間を掘削しながら突き進み、一つ目の竜の片割れに接触する。

その瞬間……

世界が染まった

夜の漆黒も、音さえも消し飛びその爆心地である一つ目の竜の片割れは水面から生えていた僅かな根元を残し消滅し、残ったほうの竜も爆発の影響をもろに受け一時的にその機能を停止していた。

それを尻目に士郎は白銀の外套を靡かせ着地する

「次っ!!!」

すぐさま士郎は破壊の影響で満足に動けないでいる片割れに意識を向けた其の時、

僅かに残っていた龍の根元からまるでウィナーの保護幕をはぐように新たな首が生えてきた。

そして、士郎を爛々と輝く紅い瞳で睨みつけ、今度は水の散弾が士郎に放たれ飲み込まれる。

だが、

「第四の結印は『エルダーサイン』 脅威と敵意を祓うものなり
っ!!!」

士郎は水弾の軍勢に向け右手を掲げながら口訣を口ずさむ。

すると士郎の手の先に白く光る五芒星が展開され士郎を水弾の嵐から守りきった。

「く、限きりがないな……」

水弾を防ぎきった士郎の口からこぼれるつぶやき。

片方を倒しても、もう片方を倒している間に倒したほういたちが回復する。
鼯いたちごっこだ。

やつらは同時に討たなければならない、エミヤ……貴様が右のやつを殺とれ……

士郎の鼓膜に東雲の声が突如として木霊する。

「『氷結の女王……その息吹にて彼のものを凍て付く氷の棺に永久の眠りに誘わん……！』」

東雲の詠唱が木霊すると同時に竜の周囲に白い冷気が立ちこめる。

『ブリジットコフィン……!』

冷気が一気に二匹の龍に収束し透き通る氷の棺に閉じ込めその動きを止める

(士郎……!今が!)

「ああ……!」アルゲンティルム・アストルナム……!」

士郎の右手に再び金色の光の矢が生まれ、そして弓に携えられた

其れと同時に一つの人影が夜空に輝く月に浮かび上がり東雲の音が響く

雷刃剣醒

時を同じくして土郎とユノの声が特定の音階と単語によって意味を成し星間領域に干渉し神秘を引き起こす言霊となる。

『天狼星シリウスの弓よ放て…！』

（我は弓、我は蛇、我は弓、我は星……）

光の矢は携えられたまま周囲の光を吸い取りその輝きを序々に大きくしていく。

東雲の氷の刃の内に眠る白桜の紅い刀身に描かれた白い桜の花びらの絵柄が刀身を侵食し始めやがて、純白の刀身へと白桜は姿を変えた。

『悪神セト、蹂躪せよっ…！』
弓が放たれる。

“パリン”

硝子が砕けるような音と共に東雲の白桜を覆っていた氷の刃は内側から吐き出された蒼い稲妻によって弾け飛ぶ。

放たれた弓はその姿を黒狼の顎頤へと変えその口から破壊の意思を収束された光線を吐き出す。

竜の根元は蒸発し残った氷漬けの頭部が宙に舞う。

「食い破れ天狼シリウス!!!」

「襲爪雷斬つ!!!」

光線を吐き出した黒狼の顎頤は竜の頭部をに喰らいつく。

東雲は稲妻を吐き出し続ける白桜を重力の助けを借り、竜の頭上から猛スピードで落下しながら一刀両断する。

「（昇華つ!!!）」

士郎とユノの声が重なり竜に終わりを告げる。

「久遠の虚無へと帰れ！」

竜を一刀両断した東雲はそのまま氷の大地に着地し竜に背を向け別れを宣告する。

竜の頭部を加えた黒狼は内側から全ての存在を吸い込む黒い穴となり竜といっしょに吸い込まれる消滅し黒狼を吸い込んだ穴も数瞬の後蒸発して消え去り、東雲に両断された竜は蒼い光に包まれたのち其処に何も存在していなかったかのように綺麗に消え去った。

東雲は士郎に向き直り聞きなれない言葉を口にする。

「まさか、“代弁者”が此処に居るとは思わなかったぞ……」

続く

第二十一話マギウス（後書き）

元ネタ

魔刃結界 先代マスターオブネクロノミコン アズラッドの必殺技

聖弓ウィリアム・テル マスターテリオンが使用していた弓 もらった

番外編その一

「人生は眼が覚めているだけでたのしいのだ」

風が吹き抜ける草原で虹色に輝く宝石の剣を携えた老人は俺に言った。

「だからこそ、真の意味で俺の眼を覚まさせるモノを。俺の心の還る場所を俺は探しているのだ」

黒衣の赤眼の老人に俺は返す。

「そうか、求める貴様が見つけれずに求めていなかった我が娘が見つけるとは皮肉もいいところだな、“4番目”」

「何が言いたい“二番目”」

「何、簡単な事だ“殺人貴”と“月の姫”を救ってはやれんか？貴様が求めてやまないモノを見つけた矢先にそれを奪われた彼らを」

黒衣の老人キシユア・ゼルレッチは己の偽善に従い訴える

「……俺がこの世界に希望を見出さなくなった時、門を開け。それが条件だ」

「ほう、貴様が嫌いな魔術師の様な事を言うのだな“魔法使い”？
ゼルレッチの赤い瞳と俺の龍の瞳の視線が交差し、同時に一際強い風が草原を撫で、草原の草をさらっていく。

「等価交換は世界の基本だ、それを破れば碌でもないことになる。ただ一つ等価交換が成り立たない現象、人はそれを“奇跡”と呼ぶ」

番外編 月と時 前編

最も大切なモノとの別れ、だけどそれははじめから決まっていたことで結果自体は来て当たり前
結果は同じでも過程が違った。

唯、ただ違ったのは……

俺は、あいつを愛してしまった。

吸血鬼の姫である彼女は血を吸うことで眠りを避けることができる
だから俺は

俺の血を吸えアルクエド

けどあいつは…

ううん、吸わない

なんでだ？吸えない理由でもあるのか？

うん、好きだから吸わない

今にも泣き出しそうな笑顔であいつは言った。

そして、

お願いこれからもずっとそのままです。

“笑って生きて行ってね”

そう言って

ばいばい

そう言い残し、霞のように消えていった

蒼い夜空を見上げ、月を見つめる

「あのバカ女…」

何度目かわからないがあいつのことを指す言葉を口にす

「お前がいないと素直に笑えないだろうが…そんな事もわからないのか…」

遠野 志貴は旅に出ることを決めた。

そして幾たびかの月日が巡った。

「いい加減あきらめたらどうだ代行者？」

真つ赤な夕日によつて赤く染められていた大地

そこには周囲一帯に肉塊が散らばり、死臭と硝煙、それえに血の臭いが立ち込める丘の上で

その顔を横から消えかけている夕陽に照らされながら十の武器を地面に突き刺しその一つ漆黒のハルバートに背を預けながら黒のロングコートに身を包んだ青年、東雲 亮は肩や手に十字架と羽の様なペイントのある青い瞳の日本人の面影がある地面に這い蹲る少女に問いかける。

「…誰が！」

「女を殺すのは趣味じゃないのでな、諦めて二度と来ないでほしいものなんだが。」

「どの口で言っているのですか！」

周囲に散らばる肉片は元々、聖堂教会と魔術協会の混成部隊であり、亮を討伐するために集められた者たちだ。その構成メンバーは魔術協会からは執行者、聖堂教会からは代行者という超実戦派の実力者

のみが集められていた聖堂教会きつての実力者であるいましがた亮が問いかけた少女“弓のシエル”を投入していることから本気具合が見て取れる。

「あなたが殺した者達に女だけがいないわけないでしょう!!」

男女、協会と教会関係なく何のためらいなく葬った亮に対してシエルは叫ぶ

「俺に殺意を向けるのが悪い、殺そうとするのなら殺されることを覚悟しなければならぬ正義の味方気取りで人を殺そうとするモノに遠慮する義理も義務もない」

“ガキン”

「あなたの様な強大な力を、魔王の力を持ちながら星に縛られることもなく、さらには魔法さえ己がモノとする異形の血をひくあなたは間違いなく世界のバランスを壊す存在です」

両手持ちのピルバンカーを地面に突き刺しそれを杖にして立ち上がるシエル。

「だから、俺の存在を否定するのか？オマエタチ聖堂教会は、モルセルトだから、実験材料として俺を欲するのかモルセルト魔術協会は」

亮はハルバートを引き抜き、その切っ先と視線ををシエルに向ける。その瞳は赤と金のオッドアイへと変化している。

「あなたには同情出来るところも多分にあります。実験体として殺され続けた私には魔術協会、聖堂教会この二つが正しいなんてことは絶対はないという事は理解できません。しかし、元とは言え吸血鬼であった私が生きていくには組織の狗になるしかないんですよ」

パイルバンカーを構え、瞳を閉じ息を整え自分に向けられる刃を感じながら眼を再び見開き。巨大な杭打ち機“第七聖典”の切っ先を亮に向ける。

「そうか…ならば心安らかに逝け!!」

亮がハルバートを持ち、シエルに向かい一気に駆けだし、

「はあああああああつ!!!」

シエルも魔術で身体能力を強化し亮に洗礼の杭を打ち込むべく駆け出し、二人が接触する瞬間僅かに先立ち第七聖典が突き出される

「ふっ…」

亮は不敵な笑みを浮かべ、ハルバートの切っ先を地面に突き刺し棒高跳びの要領でシエルを飛び越える。

「!!!!!!」

洗礼の杭は、無様にも虚空を突き刺すにとどまる。

“タンっ…”

シエルの背後に軽やかに亮は着地し、その着地の動作さえも利用しハルバートを放つ構えをとっていた。

「力を抜け…苦しいと感じるも間もなく逝けるぞ…」

シエルの背後から声をかけ、反射で振り向きつつあるあるあるシエルにハルバートの斧刃を振るう。

“フユン”

ハルバートの大質量を乗せた刃が空気を引き裂きながらシエルの首元へと迫る。

やらせない

“シャンっ!!”

明かりと暗闇、昼と夜、その境目の刻限に一つの閃光が奔る。

「へえ……」

「え……」

亮は驚嘆、シエルは驚愕の声を其々上げる。

亮が振るったハルバートのそれが柄の中から先がすっかりとなくなっていたのだから…

“フュン、フュン、フュン…ガキンっ！！！”

少し遅れて、ハルバートの消えていた先が回転しつつ宙を舞いながら落下し地面に突き刺さる。

そして、亮とシエルの視線がそれをなした人物の背へと向けられる。

「うそ…何故あなたが此処に?!」

「知り合いか…」

その人物を眼に納めシエルはありえない者を見る。

「遠野君！！！」

遠野志貴はゆつくりと振り返りながら口を開く。

「先輩、少し聞きたいことがあるんだけどいいですか？」

一つの閃光を走らせた張本人は宝石のように青く輝く瞳で、右手に握るナイフをきらめかせながら、まるで学校で宿題の応えを聞くかのような気軽さで語りかける。

「…とその前に…」

が、しかし亮を瞳に納めた瞬間、志貴の空気が変わる。

まるで底なしの暗闇で蠢く何かの様な、絶対零度の氷の刃の様な負の無限大の殺意が纏われる。

「ソイツヲ殺サナイト……」

「殺人衝動か？それに地雷王を一度とはいえ殺すとは何かしら厄介な能力も持っているようだな」

志貴に特大の殺意を浴びせられながらも何も変わらない様子で亮は手元と少し離れたところに突き刺さった漆黒のハルバート“地雷王”を交互に見やる。

漆黒のハルバートはまるで吸血鬼の末路のように黒い灰と成って崩れ風にさらわれていつている。

「来たれ！二つのハヤテよ……」

丘に突き刺さっていた残りの武具の内、二振りの刃がひとりで引き抜かれる。

それは亮の呼び声に応えるように宙を舞いながら亮のもとへと移動する。

“ガシっ！チャキンっ！！”

二振りの刃、直刃の日本刀を両の手に掴む。

白い半透明の結晶体クリスタルの様な刀身の刃、“颯”を右手に、

漆黒の刀身を持つ禍々しい空気を漂わせる刃、“疾風”を左手に
そして無為の構えで、遠野志貴を見つめる。

「俺に殺意の刃を向けたモノには殺意の刃を反すのみ」

青い瞳の殺人貴は右手のナイフを逆手に持ちかえ眼前に構える。

さあ…殺し愛おうノ殺シテヤロウ

続く

第22話 題名はまだない(前書き)

遅くなりましたが更新します(PCが壊れてストックがまっさらになつてしまい以来書こうとするたびに虚脱感が重くのしかかつてきて…)

第22話 題名はまだない

薄暗い闇の中ボォッと浮かび上が薄水色のスフィアが浮かび上がり辺りをわずかに照らし出している、それを覗き込む一人の少女。

年代は十代半ばといったところだろうか、長い金髪を後ろで束ねポニーテイルにして、魔なる者の証である紅眼を携えている。

そして、小女の顔立ちやまとう空気は士郎の姉のような存在である藤村大河に酷似している。

「へえ、この子【衛宮】なんだ…ケリイがいるこの街で魔術にかかわって同じ姓…無関係とは思えないなあ……………どう思う?“キヤスター”」

そのスフィアには異形の軍勢と戦うマギウスとなった士郎の姿が浮かび上がっている。

そして少女は自身の背後にいくつかの階段の上に設けられた王座に坐する同じく朱眼を持つ存在に語りかける。

「…無関係と考えるには少々できすぎだな、なんらかの関係者だろう」

それが発する声から青年と呼べる年代の存在だということが取れるがその顔は薄暗い闇のベールによって隠されはつきりとみることはできない。

「…ってことはやっと、やっと見つけたんだ…ケリイの手がかりをつ！
ねえキヤスター？」

「推奨しかねるな」

「ええ~~~~ちよつとくらいいいじゃないっ!!」

むくれる少女、それに対して玉座の青年はため息をつきながらに言う

「未だ力は不十分、アスモデウスもハウレスも敗れた残りの封印は
2つ…

そんな状態で日中は満足に力を使えない君がいつでもこのこ殺さ
れに行くだけだ」

「大丈夫だよ、あの子の年齢から考えるとたぶんケリイの子供か何
か…だから大丈夫だよ」

「理論的解釈に欠けるが…護衛を連れて行かないぞ」

「~~~~~ありがとっ!!キャスターっ!!」

天真爛漫という言葉が当てはまるような笑顔を向ける。

そして少女は再びスフィアに目を向け、それに映る士郎をその向こ
うにいる存在を幻視しながらつぶやく。

「待っていてねケリイ…あの時の約束を守ってもらうか、

あの時のお願い通り……【私を殺してね】」

「まさか、“代弁者”が此処に居るとは思わなかったぞ……」

東雲と名乗る人物が聞きなれない言葉を発した。

「代弁者って何のことだ？」

士郎は聞き返す、すると東雲が驚いた表情を作る。

「なにっ！？力を持ちながら自覚していないのか！？」

「だから一体何のことだよ！！」

「…そうか、自覚していないのなら言っても無駄だが、一つ言っておく俺とお前は最終的に必ず否定コロシしあう、そういう運命まためだ。」

意味深な言葉を発しながら東雲は背を向け暗闇に向かって歩を進めようとする。

“ダアアンツ！！”

その時、

一発の黒い魔力の塊が東雲の蟬谷を掠り、髪の毛を何本か飛ばし朱い筋が作り出される。

「何の真似だ」

東雲が背を向けたまま背後にいる人差し指を向けている遠坂 凜に
問いかける。

濃密な圧力が噴き出ているがそれにひるむ様子もなく凜が東雲に向
け言葉を発する。

「あなたには聞きたいことが山ほどあるのよっ!! 士郎にもあるけ
どそれは後でOHANASIするから、あなたはいつたい何を知っ
ているのか洗いざらい吐いてもらっわよっ!!!!」

何気に士郎に死亡フラグが建った。

「なんか嫌な予感しかしないんだが!？」

(冥福をお祈りしますシロウ)

「死亡確定っ!?!」

「今ここで、俺とことを構えるつもりか…やめておけサーヴァント
が負傷したマスターなど格好の標的以外何物でもない…それに焦ら
ずとも必ず再びみえるさ俺たちはな」

士郎を無視して話は続く。

「どっついつこと?」

「どっついつことだ」

東雲が振り向き右腕の袖をまくる

袖から現れた右前腕には朱い半分に割れた盾のような文様とそれを縦に貫く槍のような模様が浮き出ている。まちがいなくマスターの証“令呪”であった。

「あんたも!？」

凜が驚きの表情になる、その瞬間いつ間にか霊体化していた旧アーチャー：ファントムが東雲の背後で干将莫邪を手に実体化し、東雲の首めがけて白い中華剣の刃を振るう。

「ランクといえど人柱を使って作られたこの武器の概念は重く通常の武器であればバターを切る熱ナイフのように武器ごと相手を切り裂く。」

“ガキインっ!!!”

「くっ!」

「英雄^{ヒーロー}は遅れてやってくるってなあっ!!!」

刃が振り下ろされる瞬間、実体化する英霊がその手に持つ宝石の大剣で陰陽の刃を受け止め、互いに火花を散らす。

そして火花越しにファントムを見つめる蒼い双眼を持つ純白のロングコート^{グコート}を羽織る大剣士、

「遅れすぎてそれしか出番がないぞ、バーサーカー」

「マジで!?!」

「大マジだ」

「ガ
ンっと!!」

“ガキンっ!!”

口でショックを表す擬音語を発しながらその怪力でファントムを吹き飛ばすサーヴァント：バーサーカー

「ちいっ!!!!」

ファントムは吹っ飛ばされるも華麗に着地する。

凜は即座に自分たちの不利を察する。

アーチャーは負傷しており全力は無理、士郎も今は戦力になるがサーヴァント相手だと未知数、自分は完全に足手まとい

対して、向こうは近接戦闘でファントムと互角以上の近接戦闘、弓による中距離戦闘能力を持つマスターに能力等が一切不明のサーヴァント、さすがにバーサーク状態のヘラクレスよりはましだろうが…能力が未知数すぎて手が出せない。

戦えばおそらく最初にファントム、次に私、最後に士郎が二対一に持ち込まれ敗北

「…仕方ないわね、今回は諦めるとするわ……………覚えていやがれよ…」

最後にぞつと地獄の底から響くような芯の凍るような声を発する遠

坂であった。

「……なかなか恐ろしい御嬢さんだな……お前も大変だなあ……」

「ほんとにな」

「ふっ……まっただ……」

しみじみと言うバーサーカーとそれに士郎が同意し、ファントムも苦笑しながら認める。

「あんたらも……覚えていなさい……！！！！」

拳をわなわなと振るわせ蟬谷に青筋を浮かび上がらせる凜

「そんなどうでもいいことはともかく戻るぞ、バーサーカー」

「あいよつと……じゃあな！」

バーサーカーは霊体化し虚空へと消え去り、東雲は驚異的な跳躍力を持って街路灯に飛び乗り、次々と跳躍しながら夜の空へ消えて往った。

「ちょっと待ちなさい！！どうでもいいってどういふことよおおお
おっ……！！」

凜の叫び声もが虚しく夜の公園に響くのであった。

「遠坂、近所迷惑」

「うっさいっ！ー！！」

「バツ八っ！！」

士郎は凜にぶっ飛ばされるのであった。

「いったい何者よあいつ…アーチャー何かわからない？」

「さて…どうだろう…ただ…あのサーヴァント…バーサーカーとトレイターには以前感じたことのある空気を感じた」

「昔あったことがあったの？」

「いや…私にそんな記憶はない」

「と言ってもあんたまた記憶喪失じゃない…士郎は何かわからない？」

凜は士郎に尋ねる、士郎は顎を抑えながら感じたことを口にする。

「バーサーカーのほうは余りわからない、ただトレイターの持っていた剣はガラティーンだった。」

「じゃああいつの正体はガウエイン！？」

凜が驚くのも無理からぬ話だった、ガウエイン卿…太陽に比例して力を増し、かのランスロットと引き分けるほどの実力者でありその最後は従弟であるモルドレッドに討たれてその人生の幕を下ろした英雄だ。

だが、

「いや違う…剣の記憶と本人の剣の型が一致しない」

「じゃああいついったい何よ！？あんたみたいに宝具を複製しているっての？冗談じゃないわ！！」

「いや凜、おそらくそれも違うぞ」

唸っている遠坂をアーチャーがいさめながら発言を否定する。

「どうということ？」

「あれは真作だこの男のような模造品ではない、仮にも彼の騎士王の聖剣エクスカリバーの兄弟剣たる神造兵器をそつたやすく複製などできるものか」

「じゃあ何！？あの金ぴかみたいにすべての原型を持っているってわけじゃないわよね！？」

「遠坂、それも考えにくい…あれは原点じゃなく本物のガラティーンだった…つまりあいつはどういうわけか分からないが他人の宝具が使えるんじゃないかと思う」

「それなんてチート？…でもそれが一番可能性としては高いか…あ

れしか使わなかったってことはいくつか条件があるのかも…」

遠坂がぶつぶつとつぶやき自己閉鎖モードに入ることになったらただでは帰ってこない。

だが、もう一つ気になることがあった。

「…お前がいるってことは、聖杯戦争がまた始まった…ってことだな」

「その通りだ、衛宮 士郎…私はマスターを勝利に導くために剣を振り敵を射抜く、そしてマスターでない貴様にこの戦いに介入する権利はない…せいぜい指をくわえてみているがいい、半端な実力では無駄死にするだけだ。」

ただ、冷酷にファントムは告げる、しかしこれは一種の警告…いや、注意だ。

介入するならそれなりの覚悟を持ってという。

「ふざけるなっ！指をくわえてみているだっ！？昨日ここで殺された人みたいに無関係な人が巻き込まれるのを黙ってみているっていいのか!？」

そんな…そんな後味の悪いこと出来るかあ!!!!」

「士郎?!」

士郎の叫びというか違和感に凜が驚きの声を上げる

「俺は…デモンベインだっ!!魔を断つ者だっ!!!!人々の現実を侵す魔を弾劾する一振りの剣だっ!!!!」

アーカムで出会ってしまった、知ってしまった

ただ無慈悲に凌辱される世界を、命の叫びを

それは、子を奪われた母の嘆きか

それは、子に明日を与えてやれなかった父の怒りか

それは、親を奪われた子の憎しみか

「俺は、俺はっ！！この胸に宿る正しき怒りと憎悪に目を背けることなんて俺にはできないっ！！！」

「…いいわ、士郎あなたにも手伝ってもらっわ、いいわねファントム？」

「仕方ない…不確定要素が増えるのはどうかと思うがマスターの判断に従おう」

瞳をつぶりながらファントムは凜に返し霊体化する

「じゃあ行くわよ士郎、道すがらゆっくりOHNASIIさせてもらっわよ」

「…あの行くつてどこにでしょうか…」

冷や汗を垂らしながらに返すと凜は【何を言ってるの？】的な表情をした後にその長い髪を手で払いながらに言う。

「何処つて…言峰教会に決まっているじゃない、私まだマスター登録してないし？」

「しるか!」

続く

第22話 題名はまだない(後書き)

… 士郎が、刹那・F・セイエイみたいなこと言い出した

第二十三話 潜む吸血鬼

「……ここにはあまりいい思い出なんてないんだがな……」

赤い髪に琥珀色の瞳を持つ青年衛宮士郎は年季の入った教会、自分の兄弟ともいえる者たちが搾取され続けた言峰教会を見据えながらつぶやく。

「…あたしもよ、自分の腹に風穴開通させてくれた奴の寢床にいい思い出なんてあるわけないでしょう？」

「丁度よかったですね、腹にため込んでいるなにかも一緒に流れ出たのでは？」

「なに？この古本娘、ケンカ売ろうつての？今なら大特価半額セールで買い取ってやろうじゃないの！！今なら特別赤い意味不明なサ―ヴァントもおまけでついてくるわよ！！さあどう！！？」

「拒否、安物買いの銭失いになりますよ。第一そちらが買い取りなにおまけがついてくるとか半額とか意味不明です。」

「ムキイイイ！！士郎こいつ売らせて！むしろ燃ヤサセロ！？」

「遠坂…目の焦点が合っていないぞ……」

アカイアクマの昏い剣幕にたじろぐ士郎、ユノの正体を知ったときはジャイアリズムを持って寄越せと言ってきたがユノがそれに反発それから道中ずっとケンカしているのだ。

「シロウ、口づけを交わした相手を買ろうとか燃やそうとか考える
わけないですよね…?」

つばらな瞳で士郎を見上げる少女ことユノ

アカイアクマの業火にニトログリセリンを叩き込むようなまね
は辞めてくれ

つと衛宮士郎はお星さまになった養父キリツグを見上げながらに思うのであ
った。

八八つ士郎は八方美人だな!!

なんか聞こえた気がしたが無視した。

だが、八方じゃなくて発砲のような気がしてならなかった。

第二十三話 潜む吸血鬼

“ギギイイ”

一行は年季が入った教会の扉を開ける、

すると、

「うっ!!」

「これはっ!?!」

「…強烈ですね…!!」

聖堂の中にまで立ち込めるその匂いは日本人ならばその正体はすぐわかるもの。

三人の鼻をつく強烈な香りはカレーの香りだ。

正直、ゾンビとなったもの達が地下に居た場所の上でかぎたくなる匂いではない。

「おや、おやこんな夜更けにお客さんですか〜?」

奥の扉からシスター服の遠坂と同じ青い瞳のシスター、土郎が先日公園であったシスター・シエルが顔を出したのだ。お玉片手に…

「おや?衛宮君と…そちらは遠坂の御当主ですか私はシスターシエルと言います。」

「そうよ、用件はわかってる?」

「はい、聖杯戦争におけるマスターの登録ですね!!
よかったあ、誰も来てくれないんですもん。私が(休暇を削って)来た意味があるかかなり疑問だったんですよ!!」

シエルは巧みな手さばきでお玉を振るいながら喜びを表現する。

「誰も来ていない…?アインツベルンや間桐も?」

遠坂の疑問の声にシエルは一気に真面目な顔になり説明を始める。

「はい、そもそも今回の聖杯戦争はイレギュラーなんです、担当の神父…御2人は知っていると思えますが彼から聖杯戦争が突如始ま

つたと連絡を受け私が此処に派遣されました。」

聖杯戦争において監督役は今まで未使用となった令呪を所持し、いつものサーヴァントが呼び出されたかを知る魔術礼装を所持することを許されているのだ。

もともと未使用の令呪は綺礼の死亡と共に全て失われたが。

その魔術礼装によって聖杯戦争が始まったことを知ることができたのだろう。

だがこれは異常である、聖杯戦争は本来五〇年周期で起きるものであり前々回は一〇年今回は三年、だんだんと間隔が狭まってきているのだ。

「ふうん、じゃあ何のサーヴァントが呼ばれたかぐらいはわかる？」

「そうですね：既存のサーヴァントはライダー・アーチャー・バースーカー・キャスター
アサシン残りの2体がイレギュラークラスとなっています。」

「なあ遠坂？」

「何よ士郎」

「イレギュラークラスってなんだ？…：そういえば慎二のサーヴァントは確かトレイターとかいう妙なクラスだったけど…」

「…：そうか、前は普通のクラスしか出なかったからあんたは知らないか。」

「いい？士郎、聖杯戦争において全て普通のクラスが出ることの方が

珍しいの過去では一つか二つくらい入れ替わったクラスが出たそうよ。

で、イレギュラークラスは私のファントムと慎二のトレイターでしょうね、気を付けなければならぬのはイレギュラークラスは固有スキルが分からないの。」

「固有スキルって確か三騎士の対魔力とかキャスターの障地作成とかか？」

「あら？物わかりがいいわね。そうよ、いろんな意味で慎二たち間桐は要注意ということね…それはそうとあんたに聞きたいこととあるんだけど？」

遠坂がシエルに向き直りながら

「なんででしょう？」

「この町で魔術関係の殺人が起きてるでしょう？そこんとどうなってるの？」

「それについて御二人にご相談があります。」

「いいわ話してみてください。」

「はい、つい先日ある吸血鬼を追っていた代行者が死体で発見されました。この冬木市近辺で」

「「!?!?」」

シエルの言葉に息をのむ士郎と凜

代行者、聖堂教会における戦闘のスペシャリスト彼らに狙われたらまず逃げられない。

「そして、厄介な事に吸血鬼は一体ではないのです。それぞれ別稿で追っていたのですが両方に迎撃されたようです。」

「そいつがマスターとなって住人を襲っている?」

士郎の言葉にシエルがうなずく

「おそらくは…」

「名前くらいはわかってるの?」

「片方はわかっていますが、もう片方は不明です」

遠坂の問いに首を振りながらシエルは答える。

「いいわ、分かっている方だけ教えて」

シエルは、その名を口にす。

「はい、名前は“東雲 亮”…彼には気を付けてください。」

「あいつが…普通の吸血鬼じゃないのか?」

亮は吸血鬼の証である赤眼を持っていなかったため異端であることはすぐにわかる。

「いえ、彼は対真祖用の戦闘生物として星に生み出された者たちの末裔で、特定の条件下では赤い月でも確実に殺されます。そしてそれはサーヴァントにも適応される。」

一級の神秘を殺すまさにアンチ・イマジンといえる存在だとシエルは言っているのだ。

「なんで星の触角たる真祖が自分の生みの親である星に天敵を生み出されるのよ？おかしいじゃない」

「それは、真祖の起源と深いかわりがあります。真祖は確かに星から生み出されたものですがその実態は月のアルティメット・ワンが地球で活動するための器なんです。彼女・彼が地球を乗っ取る保証がない以上それに対する抑止力が必要だったのです。」

「それが…」

「はい、彼 東雲 亮の起源です。…そして、死徒二十七祖が第五位ORTは彼に討たれ消滅しました。」

従って現在の死徒二十七祖の第五位は彼となっています。」

「なんですって!？」

最強の攻性生物、地球外の何かが起源と言われる最強の捕食者、それを討伐するなど普通はあり得ない。

「そして彼を討つことができるのは人間のみ…しかし普通の人間では到底無理です、人間にして人間を越えし者…黒き剣の所有者であ

る衛宮士郎、あなたしか今、この冬木の町で彼を討つことができる存在はいません」

第二十三話 潜む吸血鬼（後書き）

東雲は地球に敵対する存在と敵対した時のみアラヤとガイヤ双方からバックアップを受けることができるため真祖やサーヴァントを超越する存在となれます。

ただし、通常は両方から独立した存在であるため力の供給以外の補助は受けていない。

ネタバレといふかなんといふか：

この小説後半でアチャ子（アーチャーの能力を獲得したイリヤ）が登場します。お楽しみに

サーヴァント一覽 VER 2

サーヴァント

アーチャー：ヘラクレス

マスター / イリヤスフィール・フォン・アインツベルン（元合法
ロリ姉）

筋力 A

魔力 B

耐久 A

幸運 B

俊敏 B

宝具 A

スキル

対魔力 B …… 魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、傷つけるのは難しい
千里眼 B …… 視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。
他に相手の弱点を見抜ける

直感 B …… 直感・第六感による危険回避

心眼（偽） A …… 視覚妨害による補正への耐性。第六感、虫の報
せとも言われる。天性の才能による危険予知である

宗和の心得 B …… 同じ相手に同じ技を何度使用しても命中精度が
下がらない特殊な技能。攻撃が見切られなくなる。

宝具

十二の試験^{ゴットハンド} …… 隠された能力。死亡しても自動的に蘇生^{レイズ}がかか

る。蘇生のストック数は十一回。

射殺す百頭ナインライフズ

ヘラクレスの持つ万能攻撃宝具。生前の偉業「ヒュドラ殺し」で使った弓を元に、彼の持つ武技を流派の域にまで昇華させたもの。状況・対象に応じて様々な攻撃方法に変化する上、様々な武器で使用可能。

公式で明言されたものは対人用の「ハイスピード9連撃」、対幻想種用の「ドラゴン型のホーミングレーザーを9発同時発射」の二者。

???????

???????

バーサーカー/リントヴィルム
マスター/東雲 亮

筋力 B +

魔力 A

耐久 B

幸運 B +

俊敏 B

宝具 D

クラス固有スキル

狂化/現在発動しておらず効力を発揮していない

スキル

耐魔力 A 現代の魔術では傷一付けることは叶わない

魔力放出 A 瞬間的に魔力を身体や剣に纏わすことで能力を上げる
スキル

魔術 A 古代の現代では失われた魔術に加え竜族の魔術を使える
カリスマA 軍団を指揮するスキル一国の王としては破格のランク
竜魂覚醒 普段眠らしてある竜因子を目覚めさせ能力、技能を1
段階強化するスキル

?????

?????

宝具

??????

リントヴィルム

とある国の王妃は世継ぎが生まれなことに嘆き苦しんでおり、そのとき現れた魔術師に

「城の庭に咲く薔薇をお食べなさい、赤なら女子、男子なら白ただし両方を食べてはならない……」

食べれば災いが起きる」

王妃は魔術師の言うとおり薔薇を食べたが両方が男女両方がほしくなり二つの薔薇を口にしてしまう。

その結果……王妃は双子を出産することとなる、玉のように美しい女子と雄の竜の幼生態を、

竜の子は王妃のベットの所で幼少期を過ごし、自身の父である王に自分を子と認めるように懇願するが王は拒否しそれに怒り狂ったりリントヴィルムはならば「自分の妻となる女性を差し出せ、さもなければ貴様を食い殺す」と王を脅迫する、それに伴い国中の見た目美しい娘たちがリントヴィルムに宛がわれたが誰もリントヴィルムを愛さず、悲しみに、怒り狂ったリントヴィルムは絶望を感じながら自身を拒絶した娘たちを食い殺すこととなる。

リントヴィルムによって数多の女性が犠牲になりリントヴィルムの存在が国中に知られることなり誰も娘を差し出さなくなり、国政も傾き始めたころ国の辺境に住まう貧しい一家の娘に白羽の矢が立つ。

家族は拒否しようにも貧しく拒否できず泣く泣く娘を送り出すこととなる、が娘はリントヴィルムを拒絶せず受け入れてリントヴィルムに寄り添い眠りにつく。

すると、娘の夢に魔術師が現れリントヴィルムを人間にする方法を教える、娘は朝目覚めると同時にその方法を実行した。

すると、緑色の翼竜であったリントヴィルムはそれそれは見た目麗しい端正な顔立ちの美男子となり、後に目覚めたリントヴィルムと娘はその場で結ばれ、後に結婚し二人の子をもうけることとなる。リントヴィルムは国をよく収め賢王として、他国の侵略を跳ね除ける武王として君臨し、竜王と呼ばれることとなる。

フアントム／??????（前アーチャー）

マスター／遠坂 凛（受け継がれしうっかり）

筋力D

魔力B

耐久C

幸運E

俊敏C

宝具ランク評価不能

クラス固有スキル

不明

スキル

耐魔力C 聖骸布の外界からの守りの力

千里眼C 視力の良さ、遠方の標的の補足、動体視力の強化

心眼（真）B 修行、鍛練によって培った洞察力。極地において、

その場に残された活路を見出す戦闘論理

魔術 C オーソドックスな魔術の習得、得意力テゴリーは不明

宝具

アンリミテッド ブレイド ワークス（無限の剣製）

固有結界 視認した武器を複製するただしランクが一つ落ちる
ランク評価不能

?????/?/アスモデウス
マスター/?????

筋力 A +

魔力 A +

耐久 A +

幸運 E

俊敏 B

宝具?

クラス固有スキル
なし

スキル

不明

所持武器

ラルル・ロブディ

アスモデウスの呼び声に答え地獄から這い上がってくる大蜘蛛。その頭部は人の髑髏となっており見るものすべてに恐怖と嫌悪の感情を抱かせる

変形しアスモデウスの剣になる

魔術結社、ダークネス・ドーンの首領の名前より
機神胎動デモンベインには本人?が登場している

技

ガーディアンブレイカー：防御無視の攻撃、素手で相手に触れ漆黒の雷で相手を攻撃する

破戒の雷：バスターブレイパー本編第十四話参照

F m l of i l a（虚偽の憤怒）：サタンやベリアルの力を雷の周波数を変更することで生み出した炎、変換機にラル・ロブデイを使用している

トレイター／??????

マスター／間桐 慎二（腐って虫の湧いたわかめ）

筋力 B +

魔力 B

耐久 C

幸運 B

俊敏 C

宝具評価不能

・対魔力 A . . . A以下の魔術は全てキャンセル。事実上、現代の魔術師では傷をつけられない。

・騎乗 B . . . 騎乗の才能。大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない

直感 A . . . 戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。研ぎ澄まされた第六感はや未来予知に近い。
・魔力放出 A . . . 武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって、能力を向上させる。

・カリスマ B . . . 軍団を指揮する天性の才能。カリスマは稀有な才能で、一国の王としてはBランクで十分と言える

宝具

?????????

所持武器

ガラティーン：栄光掴みし太陽の剣

第二四話 依頼（前書き）

空断からたちはガジェットガオーと同じ外観です

アレクトはマブラヴ オルタネイティブの武御雷と似たような外観です

第二四話 依頼

アーカムシティーの地下深く、霸道財閥秘密基地の格納庫に聳え立つ神像。

ハンガーに肩部と両足を固定され格納庫の暗闇の中照らし出される直径50メートルほどの機械仕掛けの神像。

そのすぐ横にはまるで竜のように長い首を持つ鳥を連想させる機獣が眠っておりさらにその横には18メートルほどの同じく機械仕掛けの神像が格納庫の固定器具に固定され眠っている。

「デモンベインと空断カラタチの整備はどうなっていますか？チアキ」

「銀鍵守護神機関正常、コル・レオニス一号、二号共に正常稼働中、空断の制御OSネクロノミコン機械言語写本も正常、仮にいま敵が出てもすぐに出られますで」

執事服をピシッと着こなす男性ウィンフィールドは巨大な機械仕掛けの神、その模造品デモンベインの胸部の前に設けられた網目状の床の整備用の足場の上で通路上に設けられたコンソールを通して自動整備人形オートマトン「トイ・リアニーター」を操作しているポニーテールに眼鏡をかけた関西弁の訛りがある発音のメイドに問いかけ、それに満足する答えが返ってくると同時に話に一切浮かばなかったデモンベインの半分以下の大きさしかない機神に視線を向ける。

「アレクトはどうなっていますか？」

まるで神道の意匠を盛り込んだ鎧武者、全体的に三次元曲線で構成されつつも鋭い印象の人食い鮫のような凶暴性を秘めた頭部を持つ漆黒の機体、その背には漆黒の双翼が折りたたまれて携えられている。

「んんんアゾート・ホーとの戦いから動力機関が変質して来ているんですわ、今は様子を見るしかありません」

クトウグアの子アゾート・ホー、極低温の灰炎を持ち旧神によって封じらせし神を呼び覚ます使命を持った神、かつてハイパーボリア大陸を封印されてなおもれ出る力の余波で氷滅させた神。

アーカムの隣町のプロヴィデンスに復活したツウトグアをデモンベインが

邪神の封印を解くために飛び去ったそれをアレクトを駆った土郎がそれぞれ討滅した。

その熾烈ともいえる星の智慧との最終決戦からアレクトは不気味な沈黙を保ち眠っていた。

「…衛宮様から“使う可能性が在る”とのことでしたので万全を期したいところなのですが…」

苦い顔をするウィンフィールド、デウス・マキナ鬼戒神を使うというのはどういう状況か彼は身をもって知っている。

それはまさしく神との戦い、一瞬の隙が命取りとなる。

「しかしこいつはデモンベインと違ってまったくの未知の存在ですから…」

「ええ、この機体も動力源も我々には未知のものです…ですができる限りのことはしておいてください。」

「了解」

アレクト、復讐と怒りの神の名を持つ機神。

その正体は謎に包まれている。アリゾナ砂漠に放置されていた前回の大十字 九郎のデモンベインを回収に向かった瑠璃の父親である霸道 兼定が発見・回収したものであるがその時点で動力機関と右腕を欠損し構成素材が鬼戒神と同じオリハルコンで作られていることしか判明していなかった。

オリハルコンと同種の素材でありデモンベインの構成素材でもあるヒイロカネを使用し右腕を左手の複製という形で修理したものにウエストが【勝手に】ラバン博士が深きモノから強奪した魔術触媒を埋め込んだ結果。

衛宮士郎とユノの乗ったそれは…

ペルゼビュートの怨霊呪弾を起爆剤に完全起動し全身の形を変えたそれは一種の暴走状態に陥り、ペルゼビュートをその搭乗者であるティベリウスごと消滅させマスターオブネクロノミコンを苦しめた。

黒く染まった勝利の剣【エクスカリバー】を振るうその姿は戦慄と畏怖を覚えさせるが衛宮士郎はそれを御することに成功する。

その搭乗者の証ともいうべき左手の青い令呪を刻まれた。

まるで、クトウグアとイタクアが大十字九郎を主と認めたときのように

アレクトの動力源にされた魔術媒体、死の神デイスの心臓は怨霊を喰らい力とする儀式魔術中枢だ。

故にアレクトの動力源は死者の魂と想念だ。

その動力源それが変質してきている…それがどういうことなのか知るものは誰もいなかった。

ただ、魔都アーカムの地下深くで瞳に暗闇を写す漆黒の墮天剣士の電子脳髓が戦いの予兆を感じ取り自らの心臓を作り変えようとしていた。

第二四話 依頼

「何だつてこのへっぽこ魔術師がそんな最強の幻想種に勝てるのよ」「へっぽこつてひどいな・・・」

凜のあからさまないいようにつなだれる土郎

確かに魔術師としては二流どころか三流なのであからさまな反論は

できない。

(たしかに剣製以外はへっばだよ)

ほとんどの魔術式の演算・行使はユノ任せだ、自分は魔術行使の指示と脳内に設計図を描くことぐらい……しかしアーカムの魔術使いはそれで正解なのだ。

魔導書というコンピュータを使い己が目的達成するために魔術という力を振るう、故にアーカムの魔術師は皆、ほかの魔術師たちから見れば魔術使いに分類される。

不可能を可能にするべく万進する魔術師と違い己が欲求を満たすための道具に過ぎないのだ。

「まず、東雲は世界からのバックアップとアラヤからのバックアップの両方を受けるため手がつけられないのです。」

「それは分ってるわ」

シエルの言葉に間髪入れずに返す凜、

「アラヤ側の存在にはガイアが、ガイア側の存在にはアラヤがバックアップに着くからだろう？でも俺でもそれは同じじゃ………あ、そういうことか」

「どついつことよ士郎？」

一人勝手に納得する士郎に凜は問う、若干の不満をこめて
曰く

なに一人で納得してんのよ？

的な感じで

「簡単な話です、士郎は負の無限力の補助を受けています。」

唐突に凜の疑問の声にユノがこたえた。

「負の無限力…？」

「そうです、あなたも見たはずです凜。

士郎の左手に浮かぶ青い令呪を…それこそ死の神デイスと契約した証、士郎は敵対者が殺したものからの補助を受けれるのです。」

「そう…そういうこと…」

士郎は人間だからアイツはガイアからしか補助を受けれず、ただの人間相手に受けれる補助もたかが知れてる。

そして負の無限力からの補助を受けて同じ土俵にいや、優位に立てれる唯一の存在…そういうことね」

「はい、彼が士郎を代弁者と称したのは士郎が死者の無念を晴らすために行動するもの、死者の無念の嘆きを力で代弁するからという意味があつたのではないかと思えます。」

「まったく…非常識にもほどがあるわね、アンタ」

ユノとのやり取りの結果再びスングいジト眼で自分を見据える凜に思わずたじろぐ士郎、何年立っても力関係は変わらないのである。

「……でどうでしょう？衛宮さん聖堂教会と聖杯戦争監督役として彼の討伐に協力してはいただけませんか？」

三人の会話が終わるタイミングを見計らって東雲討伐を士郎に依頼するシエル。

しかし

「なあ、あんたらが東雲ってやつを狙うのは異端だからか？」

「そうですが、なにか？」

士郎は気になっていた、彼は自分のことを鬼切と呼び聖杯戦争を悪趣味といいそれを終わらせると言っていた。

まともな感性を持っている証拠だ、そんな彼がむやみやたらに人を襲っているとは考えにくかった。

「じゃあ聞く、そいつが自分から“人間”を襲ったことがあるのか？」

「なにが言いたいのですか？」

シエルの顔から笑みが消え冷たい青い瞳の視線が士郎に注がれる。

「俺は自分の目で見たこともないのに誰かを悪と決め付けて手にかけるような真似はしない。それにアイツはキマイラと戦っていた、俺たちを惑わすには非効率的過ぎる。」

一緒に戦ったといえば聞こえはいいが第三の敵が現れたための一時

的な共闘だった。

その後のやり取りから考えてもあいつが人食いの可能性は極めて低い。

「俺は誰かのための英雄になりたいけど、誰かの人形になるのは真つ平だほかを当たってくれ。」

「……………」

士郎の琥珀の視線とシエルの青い視線が交差し聖堂が静まり返る。

「……………ふ、ふふふふふふ……………」

突然口に手を当て笑い出すシエル、何か懐かしいものを見たかのような笑いだ。

「いや……、まんまと見抜かれてしまいましたか。確かに彼は自分で人間を襲うようなまねは絶対にしません、彼が人間を殺すのは殺意の刃を向けられたときか外道を眼にしたときぐらいです。」

「じゃあ……やっぱアイツは人じゃないってだけで追われていたのか？」

「はい、彼には同情すべき点は多々ありますが私も首輪つきなもので一応の形を取らせてもらいました。……上が五月蠅いので。」

……しかし、あなたのその意固地で真つ直ぐでありながらどこか歪な様子は懐かしい人を思い出させます。」

遠い眼をするシエル、彼女は想い人を思い浮かべる吸血姫と添い遂げることを決めたもつとも死に近いその人を

「さて、ここからは私個人としてのお願いです。この町におきている怪異について私は介入するだけの権限を持ちえません。前監督役の行動により監督役の権限はかなり失ってしまったので…だからお願いしますどうかこの町をよろしくお願いします。」

「俺たちの町だ、当然全力を尽くすよ」

「ありがとうございます 怪我人を見つけたらこちらに運び込んでください心霊医療には結構な覚えがありますので」

「わかった、そのときは頼らせてもらおうわ。」

「士郎、おなか空きました。」

「もう!?!」

「動いたので」

「動いたのほとんど俺じゃないか!?!」

「頭を動かしたので」

「……わかったよ、帰ってイリヤにシチューを温めてもらおう」

「ブイ」

こうして三人は教会を後にして帰路に着くのであった。

外伝その二

私は夢を見る

流れるように過ぎ去って行ってしまった大切な人との思い出
もう、その先がなくなってしまうた物語り

私は、語りを遮りながら、出鱈目（ＩＦ）を織り交ぜながらゆっく
り風変わりな出来事を映し出し

在り得たかもしれない物語りを私に魅せる

それは不定期に私を楽しませ、心を癒し、救いが在るような錯覚を
覚えさせる。

だけど、それは、想像するほど、創造するほどに私の心を蝕む
時の流れが思い出を徐々に劣化させ、あの人の顔をぼやかしていく

今はまだ、

今はまだ……………覚えていられる。

だけど、あなたと共に生きられないのが

共に駆け抜けた景色が思い出になってしまったのが

悲しい、哀しい、かなしい

この身を捕らえる千の鎖が冷たくて

千の城の玉座が冷たくて

何よりこの孤独と、時折見るあなたの隣に私が居ない…

あなたの笑顔は私の心を癒やすけれど、同時に私の心を凍てつかせる

寒い… 怎いよ……… 志貴

私は、ますます心が凍える事がわかっていながらそれを止められない
星を通して彼の姿を見る

342

なんで？

星から送られてきた彼は辺り一面の死体が転がる丘である… 代行者
の、先代ロアの女と共にいた…

とあるモノと相對して

だめ!!

それは人間の勝てる… いや、どうにか出来るものではない

やめて!! 志貴! 死んじゃう!!

星の血栓、負の思念集積体を己が身の一部として取り込み武器とし

て振るうも一つ一つの真祖

月の民が月のアルティメット・ワンの複製品なのに対してあれは…
対アルティメット・ワンの超攻性免疫抗体

時の民

精霊王の一族、同時に星霊王の血さえ受け継ぐ彼は異質にして最高峰
人間がどうにか出来るようなモノではない

愛しい男性おとこの死、それが明確に浮かび上がってしまう。

制御できない感情の本流が私の中に渦巻く

そして鎖が砕ける音が聞こえた。

番外編 死と時

赤と金、魔を表す二色の残光…赤は血に飢えし獣を意味する生粋の
魔を表す色

金は魔眼にして魔眼にあらず祖は神眼

蒼：本来清いモノを表す色だがそれがもたらすのは漆黒の“死”のみ

その普通から乖離した超常の瞳を持つ二人が交差する。

「……………」

「閃っ！！」

“キーン！！”

月のみが照らす丘で火花が散る。

月の明かりを受け鈍い光を放つ短刀：七夜と闇の中においてその輝きを喪わない風の刃と月の明かりさえ反射しない漆黒の闇風の刃が二刀を操り高速で立ち回り、その不安定な重心を利用し変幻自在に立ち回り斬撃を放つ金と赤のオッドアイの黒づくめの青年

東雲 亮

対して、ただ異様：東雲が旨いのに対して異様：

東雲が風ならば彼は蜘蛛

人の意識の死角を付きながら、蒼い残光を残しつつ移動し、閃光の如き斬撃を放つ

同じく黒づくめに青い瞳を光らせる、遠野志貴

「その体術…貴様、七夜の生き残り…か…」

「……………」

亮の言葉は自意識を極限まで薄め、殺人衝動により遠い忘却の果ての修練を浮かび上がらせ、一つの殺人マシンと化した志貴には届かない。

更に二つの閃光を纏った異なる闇風が交差する。

“キーンっ！！”

「……………」

「言葉さえ喪つたかっ！！」

嘲りを含めた怒声を放つ。

自分と同じ退魔の一族…中でも七夜と亮の生来の一族“青龍”はあらゆる意味において対極をなしていた。

青龍家は退魔というより守護を前提とし、魔性の存在でありながらその実対極な力をもつ一族でありその力は魔なるモノにしか影響を与えない式典や方術を人の属性故に受け付けられない混血であろうと例外なく葬り去る。

人を捨て特別になりながらも人間らしさを喪わず、それゆえに力を発揮する一族

対して七夜は混血のみを対象にした退魔の一族であり、暗殺の一族だ。

人間で在りながら特別に至るが、その過程で人間らしさを捨てた一族この二つは永久に相いれない。

さらに、この二人は内面的にも在り方も対極をなしている

遠野 志貴に好感を持つ人間は多いがその実彼が持つ濃厚な死の気配故に皆近づこうとはしない、志貴自身善人の人格を為しているがそれは後付けのモノでありその根底には世捨て人的な思考が眠って

いる。

対して亮は、その過去から逆に表層に世捨て人的な人格を形成してはいるがその根底はどうしてもぬぐいきれない、人の良さが眠っていた。それは復讐相手の息子であるキリツグに対して手を出していない事から窺う事が出来る。

つまりこの二人、表層人格と潜在人格が完全に逆なのだ。

更には得物にも言える

短刀それは暗殺において如何に相手に気取られずに殺すかという部分においては最適だろう。

二刀、亮がそれを選んだ理由は、いつか自分が守りたいモノが出来た時一つの剣では一つしか、己の身しか守れない。つまり己を含めた何かを守る際には二つの剣が必要という思いから派生している。

幾度もの交差、そのたびに地面が爆ぜ砂塵を舞いあげるも鋭い剣閃が砂塵のカーテンを切り裂き、その剣風がまた新たな砂塵を舞いあげる。

お互いが互いに一撃必殺を放つもの二人とも高度な未来予測と超直感故に未来を読んでいるため相互に回避される。

“ダっ！！”

同時に二人が砂塵と剣風の嵐から離脱する。

「……………機械の様な人間は見るに堪えん、此処で終われっ！！」

龍魂：覚醒っ！！」

志貴の感情を亡くした瞳を鋭い視線で射抜いていた亮の瞳の瞳孔が縦に割れる。

周囲に魔力の本流が吹き荒れ物理的な干渉を起こすほどの高密度の魔力、龍族のみが使う事の出来る魔力が亮の周囲に渦巻きコートをはためかす。

「刹那の間に鳴り響く鋼の鎮魂歌レクイエムの内に眠るがいつ」

亮は地面を踏み砕き爆発の如き砂埃を巻きあげながら、志貴に迫る。右手の颯を投げ捨て、疾風を肩に担ぎ両手持ちに変える。

「……貴様八邪魔ダ……」

志貴の蒼い瞳から赤い線が…血涙が流れ出る。

亮の死を理解しようとして脳に過負荷がかかり毛細血管が破裂したのだ。

極死：七夜

飛奏

互いに死の風と化した二人がぶつかり合う、志貴の眼が捕らえる死は何者で在ってもしても逃れる事の出来ない死をもたらす

亮の一撃は空間さえも切断するほどに研ぎ澄まされた一撃、龍の魔力と風の魔力を纏い放たれるそれはどのようなものであるかと破壊

を与える。

この後に待っているのは……どちらかあるいは両者の死という結末……

ではなかった

「ぐっ!!」

突然、二人の間に衝撃波が奔り、次に瞬間には黒刀を握った亮の左腕が宙に舞った。

「あ……」

「あなたはっ!!」

宙を舞っていた左腕が墮ちると同時に二人は驚きの声を挙げる。

真っ白なドレスを身にまとった永遠を象徴するかのように静かにたたずむ

金色の髪の子

まるで月が人の形を取ったような儂さと静かな明るさを纏った女性

アルクエイド・ブリュンスタッドその人だった。

「ア、アルクエイド……」

遠野志貴の瞳から血涙を洗い流す滴が溢れる…止め処なく求め続けた

求め続けていたそれが眼の前に愛して、愛して

狂おしいほどに愛した愛おしい女性が

眼の前に…居るのだから…

志貴の顔は笑顔なのか泣き顔なのか既に判別がつかない

せっかく愛おしい人が眼の前に居るのに景色がぼやけてはつきりとは見えない

だけど景色をぼやかしているモノを止める事は出来ない

志貴はアルクエドに向かって一歩

歩を進めようとする。

「アルクエイド…会いたかつ

」志貴…それ以上…来な…いで…お願いだから」

志貴はアルクエイドの拒絶の言葉によってその出そつとしていた一歩を止める。

「
つ…!…!…!…!…!」

アルクエイドの雄たけびと共に彼女の瞳が金色に変わる

そして、彼女が地面を蹴ると同時に地面が爆ぜ、音速を超えて亮に迫り

“ザアアアアあんっ!!!!!!”

狂爪が切断された腕の断面を押さえている亮に振り下ろされた。

“ダ
ンッ！！！！”

「くっ！！」

亮はその狂爪の一撃を右手一本で掴みこらえる。地面に足がめり込み蜘蛛の巣状の罫が奔る。

「月の姫…と、言うことはその七夜の小僧が殺人貴…ということか」

「
っ！！！！！！！！」

亮が掴んでいる腕に力が押し込まれ、地面の輝を押し広げる。

徐々に押し負け狂爪が亮の頭部を抉り砕こうと迫る。

「……仕方がない…か、【獣神変】っ！！！！！！」
「っ！！！！」

亮の腕…いや、全身に血管が浮き出ると同時にアルクェイドは全力で掴まれた腕を振り払い離脱する。

亮の千切れた左腕から蒼い炎が噴きでて新しい腕を作り出し、それだけにとどまらず全身を炎が覆う。

天を衝くような巨大な蒼炎の柱

それは逆巻くように渦巻、まるで天へ螺旋階段が伸びているようで

ある。

そして炎の中の人影は徐々にその姿を変える。

“ジャアアアアン”

炎の柱を内側からその鋭利な爪で引き裂き、連結刃のような三本の尾で切り裂きそれが顕れる。

体を覆うマグマが冷え固まったような質感を持つ固体の炎を連想させるような青黒い竜の甲殻

その重厚な気配はそれを纏う存在が超越者であることを知らしめる。

その背後でゆらゆらと揺れるのはあらゆるものを切り裂き、削り取る三本の連結刃に酷似した尾

そしてその存在は体中から白い湯気を上げながら名乗りを上げる。

「輝竜戦鬼 闘牙

ここに現臨

っ！！」

第二五話 開闢

住宅地を縦に貫く大通り、冬木市の旧都俗に言う住宅地はその大通りを挟んで洋風と和風が分かれているという珍しい様相を呈している。

当然、士郎の家は武家屋敷で遠坂の家は洋館と全くの正反対だけにその立地も大通りを挟んで正反対なのである。

そんな大通りの坂を挟んで士郎と凜はそれぞれの家へと帰路就くための別れの言葉を交わしていた。

「じゃあね士郎、明日アンタの家に行くから」

「分かった、今回も俺の家を拠点にするのか？」

「そうよ、士郎の家ってなんか落ち着くのよね…魔術師の家ってみんな穴倉みたいで嫌気がさすのよ。たぶんイリヤも同じことを言うでしょうね」

「そっか、じゃあ明日待っているよ遠坂」

ユノを傍らに控えさせた士郎は確認を澄ませると凜に背を向けユノに視線を向ける

「じゃあ帰るか」

「はい、シロウ」

自分たちの家へと歩を進めていく土郎とユノ、カッソカッソと夜の住宅街にアスファルトに打ち付ける靴の音が響き街路灯が二人の影を伸ばす。

「シロウ…」

金色の瞳はまっすぐ前を向いたままにユノは土郎に語りかける。

「なんだユノ？」

シロウは自分の胸元ほどの高さしかない少女を見据えながら聞き返す。

「…あなたはなぜ空からのあなたを大事にしてあげないのですか？

何故、知性だけで生きようとするのですか？あなたの心は死んだ訳ではない眠っているだけ

それなのになぜ見て見ぬふりをし続けるのですか？共にあなたという人格を育んだもう一人の貴方を」

「ユノ？」

「人は知性だけでも生きていける…でもそうやって生まれた思考は自身を顧みない凡そ人のものとは思えないものになってしまう。

それは機械の生き方です。

あなたは誰もを救う正義の味方を目指し大十字 九郎という明確な容を目指すようになった…しかし あなたは最愛のものを“切り捨てた”でも…

彼女が愛したあなたは切り捨てるしかないーを自分に当て嵌めるそんなあなたを好ましく想い同時に守りたかったのだと思います。…そんな彼女が今の貴方を見たらどう思うのでしょうかね」

ユノの言葉に心臓が凍りつくような錯覚を覚える士郎は思わず立ち止まってしまう。

「ユノ…」

そして相棒パートナーの名前を呼ぶ、そしてそれに応えるようにユノはそのプラチナムブロードの髪を靡かせてゆっくり振り返る。

「シロウ…魔術師の運命とは矛盾を孕むものです。適切な目的と力を持った者はまっとうな運命を生き、果しえぬ目的と大きすぎる力を持つものが魔道を歩むのです。」

あなたが魔術師マジクスとしての運命を得たのはまさしくそれであり、あなたがいくら研鑽と努力を重ね幾つもの試練を乗り越えようとあなたは満たされる事はない。

なぜならあなたが一番幸福にした“かった”存在はどうあがいても幸福に為れず故にあなたもまた幸福には為れない」

「それでも俺はアイツとの別れ後悔しない、たとえ俺の理想が叶わない運命だったとしても俺はそれを乗り越える」

「そうですかならば運命に抗えばいい…それもまた、貴方の運命なら」

「混ぜっ返すなよ」

士郎はユノの言い回しに若干、不機嫌になる

「そうではありません、私はただ警告するだけ。貴方は破滅の淵に立っている。

かつての多くの術者がそうであったように、私はあなたにそうあって欲しくはない、

忘れないで下さい、あなたの破滅はあなたを慕う多くの人の悲しみであり、理不尽な不幸であると…」

ユノは月を見上げながら呟く様に最後の一節を口にする。
まるで願うように、祈るように、悼むように、

その通りですよ

突如として女性の声が夜の住宅街の響き、風切音が士郎の耳に届くと同時にユノに向かって鎖が繋がった杭がまるで矢の様に迫る。

「ユノっ!!」

思わず士郎は地面を蹴り駆け出しユノを腕に抱くと地面を転げるように杭を躲す。

「おや、不意を突いたつもりでしたが…素晴らしい反応ですね」

鎖特有の音を奏でながら杭が闇へと引き込まれ、そしてその闇の中から身長170cmほどの長身の女性が顕れる。士郎はその女性を知っていた。

「お、お前が…なんで　ライダーっ!!!」

腰に届くまで伸びたきめ細かく美しい薄紫の長髪、そしてその顔の半分を覆うほどの漆黒の眼帯

「おや、私を知っているのですか…なるほど、前回の私を知っているということでしたか…まあいいでしょう」

一瞬、考えるような動作の後に納得そして自分の行動に関係があまりないと至ったのかすぐさま両手に持つ鎖で繋がれた杭の切っ先を士郎に向けるサーヴァント・ライダー

「警告します、貴方は聖杯戦争に関わらないで頂きたい、それがマスターの意志です。」

「マスターの？お前のマスターは慎二じゃないのか？」

慎二が魔術師出なかった時の前回の聖杯戦争と同様の手法を用いればサーヴァントを二体従えることができるかと士郎は踏んでいた。サーヴァント維持の為に他者から命を略奪するのは間桐のお得意の魔術だからだ。

思い出したくない事柄ではあるが似たような手段を用いて前回、聖杯戦争監督役　言峰　奇礼はサーヴァント・ランサー　クーファー・リンとサーヴァント・アーチャー　ギルガメッシュのマスターとなっていた。

「?なぜ私のマスターがそのような人物になるのか理解に苦しみます」

(となると誰がマスターだ?)

士郎の思考は混乱を極める。

同じサーヴァントが二回も続けて召喚されることはかなり稀有なことだ。

今回の紅い弓兵はマスターと召喚条件が同じだから同一の英霊が召喚され、士郎自身のかつてのサーヴァント・セイバーは召喚に使用した触媒が同一という条件がそろったというあくまで例外的な現象だ。

しかし、全く異なるマスターで同じ英霊が召喚されることはゼロと
いわないまでもかなり可能性が低い。

同一の触媒を用意するまでもライダーの真名 メデューサに縁のあるものなど想像がつかない、しかも限定して呼び出す意味もない。
なぜならライダーは其処まで強力なサーヴァントではないのだから、

「そんなことはどうでもいいので回答を求めます」

「断るっ！俺はこの聖杯戦争にとって招かざる客なんだろ」

士郎は地面から立ち上がる、ユノもそれに従う

「ですから、関わらないでくださいそうすれば無関係で居られます。
貴方を殺すことはマスターの本意ではありません。」

「どづいつことだ？」

「あなたに応える義理はありません…そうですか残念です」

士郎の問いをはねのけたライダーは身を蜘蛛の様に屈ませ、今にも士郎に襲い掛かる構えを取る。

「あなたの魔導書か、その四肢、感覚器官そのどれか一つでも奪えばあなたはもう闘えない…： 貴方の戦士としての命ここで貰い受けますっ！！！」

眼帯の向こうにある両眼が士郎を捉える、ライダーはそのクラスに反して膂力と速度に秀でている、前回のランサーに引けはとらない速度生身で士郎に対抗する手段はない。

「やらせるかってんだっ！！やるぞユノっ！！！」

「御意、我が身、我が力はあなたの為に」

しかし、士郎は一人じゃない。

彼の傍らにはまるで花嫁の様に添い遂げる外道の知識を宿した精霊が居るのだ。

「マギウス・スタイル魔導法衣形態っ！！！！！！」

ユノが一瞬で無数のページにバラけ、士郎を中心に宙を舞う

「やらせませんっ！！！！！！」

ライダーはマグウススタイルに変身するまでの僅かなタイムラグを狙い、地面を蹴りまるでスプリングラーの様に地面すれすれを黒い影となつて迫りその手の杭をまさしく弾丸のごとき速さで投合する。人の腕ほどある鈍い金属光沢を放つ杭が士郎に迫る。

「お願い、アーチャ　っ！」

唐突に突然に士郎の耳に聞き覚えのある妹分の声が届く
その瞬間に一筋の閃光、風を空気を引き裂きつつ矢が飛来し甲高い音と火花をまき散らしながら士郎に迫る杭を弾き飛ばした。

「援軍ですか」

忌々しげに弾かれた杭を鎖を引くことで回収するライダーが呟き、あるはずのない視線を向ける。

白銀の外套に身を包み、マグウススタイルとなった士郎もその方向に金色に変化した瞳を向ける。

「…イリヤ？」

その人物は二メートルをゆうに超える岩の巨人の麓に立ち天真爛漫の場違いの笑みを士郎に向ける。

「危なかったね、お兄ちゃん」

大英雄ヘラクレスとイリヤスフィール・フォン・アインツベルンニ

度目の聖杯戦争が始まったのだった。

第26話 足跡

「誰かと思えばあの卑怯で狡賢い、若童の系譜ですか」

「祖父の行いに対して我は戦士として軽蔑の念を抱いている
同じにするな、それは我への侮辱だ。」

ライダーは顔を覆う眼帯越しにヘラクレスを睨み付け、ヘラクレス
ことアーチャーは唾棄するように自身の祖父に対する嫌悪を露わに
する。

それも当然、ヘラクレスは彼女に関係を迫り後に彼女が見舞われた
悲劇の元凶であるゼウスと卑怯な手段で自分の首をはねた存在、ペ
ルセウスの娘との間に生まれた子なのだから

「……しゃべってる」

言葉を交わすライダーとヘラクレス、その光景に思わず声を漏らし
てしまう士郎

それもそのはず彼が知るヘラクレスなど岩を削りだして作られた斧
剣をただその強化された怪力の儘ただ力まかせに振るい敵を粉碎す
る狂戦士だったのだから。

その最期の瞬間以外

「久しいと云うべきか…かつての少年よ、我とは違ふ我との盟約を
守ったことに礼を言う」

ヘラクレスの金色に光り輝く瞳が士郎を捉える。
その瞳は知性を宿し信念を持った戦士そのものであった。

そしてヘラクレスは虚空よりを一振りの剣を振りぬき星夜に翳す。

「故に、我は主の願いと盟約を通した貴公の為にこの剣を振るおう
今亡き我妻、我が子達に誓って」

天を突くその剣は奏銀に輝く刀身に月明かりを反射させる。全体的な雰囲気こそあのかつて士郎のその身を砕いた斧剣に似ているがそんな雑なものでは無い。

洗練いや完成された一本の剣

魔を切り裂く神聖なる力を宿した一本の神剣、ヘラクレスの2メートルをゆうに超える巨体とほぼ同じ大きさを誇る斧剣たる大剣

嘗てヒュドラの強靱な首を断ち切った創玄にして冷酷な剣

「…しかたありませんね、ここは引くとしましょう。マギウスと大英雄相手ではいささか分が悪い。」

ライダーはそう言い残すと構えを解き虚空へと消え去る。恐らく現実への干渉力を下げ霊体化したのだからこうなってしまうえば如何にサーヴァントといえど手は出せない。

「ふう〜ん、さすがというべきかしら？相変わらず虫けらみた

いに逃げるのだけは得意ね、マキリは」

イリヤが目を細めながらライダーが消えた虚空を見つめていた。

「で、イリヤ説明してくれるか？」

ライダーとの会戦のあと自宅に戻った一行は居間に集まり、士郎が湯呑を前にするイリヤに問いかける。

「もう知ってると思うけど聖杯戦争が再開したのよ。」

「こんなに短い間隔でか？」

あっけらかんと言つてのけるイリヤに士郎は疑問をぶつける。

通常聖杯戦争は50年周期であり前回の聖杯戦争は聖杯が顕現直前で破壊されたことから冬の土地の魔力が臨界の儘であり周期が早まったあくまで例外的なものである。

「早まって当然よ。シロウ…前の聖杯をセイバーに壊させたわよね？」

「ああ……」

イリヤの言葉に相槌を打つシロウ、今でも士郎ははっきりと覚えて

いる。

自分の左手に残った最後の令呪を使い、自分の最愛の女性にそれをあの宙に穿たれた黒い穴を破壊させた。

「それは前々回、セイバーが召喚された時と全く同じ結末、なら結果も同じになるのは通りよ。」

「　　だとしても早すぎないか？」

前と条件が同じならば今回も10年は再開に掛かるはず、前回から3年あまりに早過ぎるのだ。

「　　土郎、忘れた？前々回は二体のサーヴァントが残ったまま聖杯が開かれた。でもね、前回は開かれた時こそ6体のサーヴァントが退場したけどそのあと、さらにもう一体サーヴァントが聖杯にくべられた。」

「　　ギルガメッシュか　　」

セイバーが言峰を倒した土郎の元にやってきた。それはセイバーと闘っていたギルガメッシュ前々回から現界していたアーチャ　を打倒したからに他ならない。

「　　そうよ、サーヴァントはね消滅するとのその膨大な魔力は聖杯に蓄えられるけど結局、聖杯は破壊された。その時にその膨大な魔力、サーヴァント七体を構成していた魔力が冬木の土地にばら撒かれたの。　　あとは言わなくてもわかるよね？」

本来、聖杯戦争は龍脈に蓄積された魔力が一定に達した時開始され

るが、消費されることのなかった魔力によって聖杯戦争開始のための魔力がそのまま使われ周期を短くしてしまったのだ。

イリヤの説明を受けて士郎は眼を閉じ心を鎮める。結局、最愛の人を人柱にして得た平穩はその場凌ぎにしかならなかった。

でも、そのわずかな時は士郎に力を与え知識を与えた。

「イリヤ、聖杯戦争を【起こさせている】のはなんだ？」

瞳を開くと同時に発した士郎の言葉にイリヤは一瞬目を見開いた後に目を細める。

「へえ、シロウ気付いちやっただ…」

「当然だろう、聖杯戦争だって始められたのはこれで6回目って話だ。なら聖杯戦争が繰り返される以上、この土地に聖杯戦争を起こす何かが生まれたか生まれたそう考えるのが自然だ。」

「まあ、気付かないわけないっか…そうだよ、シロウは強くなっただから」

少し遠い目をするイリヤ

彼女は一旦目を閉じ、ゆっくり開くと同時に語り始める。

「始まりはかつてアインツベルンに在ったとされる秘法、第三魔法へブンスフィールを蘇らせるための儀式だった。」

「第3魔法 魂の物質化」

士郎の横に居たユノがイリヤの言葉に反応する。

「そう サーヴァント、魔導書の精霊、真祖：これ等はすべて魂が不完全ながら物質化した存在よ。言わなくても判ると思うけどどれも人間の限界なんか簡単に飛び越えているわ。」

イリヤの説明に頷く

サーヴァントや真祖は人間がどう足掻いても太刀打ち出来る相手ではない。如何に近代兵器を用いようとも如何に魔術で対抗しようともアリが像に勝てる道理はない

それぐらいの戦力差があるのだ。

「人間の身でその魂を物質化、魂は不変な存在だから不老不死となり本来肉体が枷と為って発揮できなかった魂本来の力も行使できる人間の上位存在へと進化する秘法、それが」

「第3魔法へブンスフィール」

「そうよ、だけどそれはアインツベルンから失われてしまった

だから彼らは必死に魔法へと至る道を模索し続け、根源にたどり着くことで魔法に達しようとしたの 嘗ての栄光をその手に取り戻すために

愚かね、魔法に達する事が出来るから根源にたどり着けるのに、いえそもそも魔法使いとは世界が紅い月に対抗するために産み出した免疫的存在、魔術師の到達点でもなんでもないのに」

自嘲気味に自分の出家を口にするイリヤ

「アインツベルンはどうして聖杯を求め始めたんだ？」

「簡単よ、根源：アカシツクレコードと呼ばれる情報の渦、そこには全てがあつて全てがない　　根源に到達できれば必然と第3魔法を実現するための手法も判明するわ、そのために魔法に到達しなければならぬ」

「融こつこだな…」

「そこで聖杯よ、全ての願いを適える杯：それで根源に到達し第3魔法を手に入れようというのよアインツベルンは、そのため魔術協会、聖堂教会の手が届かない東方の果て、この日本へマキリと共に渡つてその土地を治めていた遠坂を引き込んで聖杯降臨の為の儀式、聖杯戦争を始めたのよ。」

「マキリ…?」

聞きなれない言葉に士郎が頭を傾げる。

「確か、こつちじゃ間桐とか名乗っていたわね、あの蟲共わ」

マキリ、間桐

唯、漢字に直し読みを変えただけの安直な名前だ。

「イリヤ、蟲共つてどういうことだ？」

「そのままの意味よ」

まるでその存在を侮蔑するように嫌悪の表情を形作るイリヤ

「マキリ・ゾオルケン　聖杯戦争を始めた張本人にしていまだ
生き続けている吸血鬼みたいな奴よ、朽ちた体を自分の使役する蟲
で代用して生き続けているまさしくゲールよ
正直、正体知っていると触れるどころか視界にさえ入れたくないわあ
のゴキブリもどき」

結構日常で垣間見る黒い悪魔を例に出すイリヤ、初めて彼女がそれ
を見たときの騒ぎは凄まじいの一言であった。

彼女の実家は北国に存在するために居ないのだ“黒いG”と略した
らまるでどこぞの角突き機動兵器を連想させる存在は

「そんなに嫌いなのか……」

イリヤの嫌悪具合から察した士郎がコメカミから一筋の汗を流しな
がら顔を引きつらせる。

「当然、あいつが出てきたら私のアーチャ　に踏みつぶして貰うわ」

イリヤよ、我も蠢く虫を踏み潰すのは些かクル物があるのだが

イリヤの言葉に反応してかヘラクレスの嫌そうな声が響く、家に入
れなかったのだ……でか過ぎて

ともかく、流石に蠢くGの軍団を素足で踏み潰すのは大英雄といえど精神ダメージがでかいようだ

「そう、ならヒュドラの矢で溶かしちゃって速攻で、一秒でも早くに」

心得た

イリヤの代案に速攻で返事を返すヘラクレス、そんなに虫を踏み潰したくなかったか。

それもそうだ、俺だってごめんだ

なんか話が蟲退治に完全にシフトしているが宝具を殺虫剤代わりなのは如何なものだろうか、そしてさり気無く間桐の使役する蟲が黒いGで固定されている。

「確か彼の事務所であれを666匹倒した時は死闘でしたね」

ユノよ思い出させないでくれ、バルン炊いたら出てくるわ出てくるわ…黒いGとか
ゴミ袋がパンパンになるほど詰まったG、清掃のゴミ回収の人も心底嫌そうだった。

あの煩いマッドサイエンティストに時々ぶつけ様かと本気で思ったこともあったけど

ある意味、究極の対人宝具化かも知れない

「ところでイリヤ、少し話がづれるがいいか？」

「何、シロウ？」

「さっき言った間桐の爺さんに会ったときに言われたんだ」「アインツベルンの人間は衛宮の人間を裏切り者の一族を憎んでいる」「ってな」

士郎の言葉に反応してイリヤの空気が冷たい刃物を思わせるものに切り替わりめが怪しい笑みを携える

「ふうん……余計なことを、よっぽど私を敵に回したいのかしらゾオルケンは……」

殺気をばら蒔きながら呟くイリヤ、その怒りとかいろいろ混ぜ込んだそれは今ここにはいない人物へと向けられている。

「ふう〜〜〜〜仕方ないつか……」

ため息をつきながら殺気を納めるイリヤは観念したように語り出す。

「遠坂が土地とサーヴァント召喚システムを、マキリがサーヴァントを従わせるための令呪を、アインツベルンが聖杯召喚の為の器をそれぞれ提供して冬木の4つの龍脈を使用して聖杯戦争を始めたの、
　　ただど当然それを手に入れることができる存在は一人だ

け、だけでもアインツベルンはお世辞にも戦闘に秀でた魔術師の家系では無かった、だから負け続けた　　そこで4回目となる聖杯戦争で一人のフリーの魔術師を雇い入れたわ　　」

4回目、フリーの魔術師　　セイバーが参加し養父であるキリツグがセイバーのマスターとして参加した聖杯戦争

「その男は強かった、誰にも負けないほど強かった。だからアインツベルンは彼に一族の女を娶らせ子を産ませ、最良のサーヴァントを宛がい聖杯戦争に臨んだ」

最良のサーヴァント、それはすべてのステータスのバランスがとれなおかつ魔術師との連携に秀でた剣士のサーヴァント^{セイバー}

「男は敵を迎え撃ち最後まで勝ち残った、聖杯入手はほぼ確定だけど男は自分を迎えいれたアインツベルンからしたら裏切りに等しい行為を行ったの　　その男は聖杯を手に入れる直前で聖杯を破壊した。」

ここまでくればほぼ確定、無意識に握りしめた拳に力が入り冷や汗が流れおちる。

「ま、まさか　　」

上ずった土郎の言葉にうなづくイリヤは決定的な言葉を口にする

「そう、男の名前は衛宮　切継：私のお父さん　　お兄ちゃん、私たち本当に兄妹なんだよ」

第二七話 元凶なりし力

夜の風が吹き抜ける中、住宅地の外れに存在する墓地公園に一人の青年、東雲 亮の姿があつた。

「…愚かな男だ、全てを救いたいと願いながら凡てを救うため、全てを救うのを諦めた。

お前はその時点で正義の味方じゃなくただの掃除屋に成り下がつた
」

その漆黒のオーバーコートを纏つた青年は一つの墓石を見下ろす。

「本当にお前は愚かだ……度し難いほどにっ！ 衛宮切継！！！」

怒りを滲ませた声を墓石にかける。

月明かりによつて作られた影がその墓石に掛かる……それに刻まれた名は“衛宮 切継”

衛宮士郎の養父でありイリヤスフィール・フォン・アインツベルンの実父である。

「…お前を苗床にして育つた元凶なりし力、貰っていくぞ」

そう言つて亮は腕を引き絞り…

“ドゴオオンっ！！”

墓石に突き刺す。

墓石の粉塵が舞う中、墓石内部の骨壺に突き刺した腕を引き抜く。その腕には仄かに赤い燐光を放つ花の実が握られていた。

「フォルテ…まずは一つ」

フォルテを呼ばれた実を握りしめながら亮がつぶやく、その瞬間、突然世界が闇に包まれる。

“ヒタヒタヒタヒタヒタヒタ……”

先ほどまでであった月明かり、星明り、住宅街から差し込む外灯凡ての光が消失し世界が闇のみが存在する空間に謎の音が響く。

「…この悪気、やはり俺を狙ってきたか　お前の天敵たるこの俺が元凶なりし力を手に入れるのを拒むか　」

亮は後ろから徐々に迫る怖気さえ伴うそれに向き直る。

それは黒い影、人ほどの不定形のタールが容を持ったような影でありつつ確かにそこに存在する重厚な存在感を醸し出す存在

「下がれっ！こいつはっ！！！！」

亮を庇うように純白の外套を纏い宝石の大剣を携えた蒼眼の青年が景色から浮き出るように亮の前に立ちふさがり剣を構え睨みつける。

その眼差しには天敵に対する慄けが宿っている。

しかし、自分の主を守護するためサーヴァント・バーサーカーは実

体化し立ち向かおうとする。

しかし

「バーサーカー、お前が下がれ」

自分を守るうとする騎士に亮は命令を下す。

「しかしっ！！！！」

「“下がれ”と言ったっ！！！！」

突然発した亮の言葉に思わず反論するが、それを大気を震わす一括で抑え込む。

「正純の英霊であるお前ではあいつに対し無力だ。最悪、取り込まれて終わりだ。

今、ここでお前を失うわけにはいかない！」

「……く、スマナイ」

謝罪の言葉を残しバーサーカーは無念を残す表情のまま構えを解き、風景に溶けいるようにその存在密度を薄め霊体化する。

「カンケルよ、災力を宿したのが貴様だけだと思っな

『命の淀みより生まれし獣よ　我が威力と為れ！魔剣覚醒

っ！！！！！！』

亮は虚空より二振りの禍禍しい剣を引き抜き構える。
それは対の日本刀しかし左右で全く特徴がかみ合わない。

右手に握るはまるで黒い水晶のような直刃の仕込み刀
左手に握るは刃が鮫の歯のように無数の細かな刃が
一列に並ぶ相手を削り裂く鋸をそのまま日本刀にしたような大太刀

二刀を引き構えると時を同じくして左の瞳が紅く浸食され右目が金色に変貌し、色違いの瞳で敵を射抜きながら言葉を口ずさむ。

「如何なる命とも共生できない一個体のみで完結した一方的な捕食者、癌生命体^{カンケル}

この世界の全ての物質、エネルギーは振動周波数の違う第一原質工
ーテル結合体に過ぎない、他者のそれを自分固有の振動数へと変換
し融合させることで他者を喰らう総てを奪う奪略者！！」、

両手に握る刃を構え紅いラインが浮かぶ黒影に対し戦闘態勢を取る。

「しかし、貴様のその力は俺の《イザナミのミコトの呪い》さえ打ち消す起源の命力^{ジエネシック}の前には力を失う」

一瞬、亮の周囲を覆った緑色の氣^{オーラ}、その光を受け、黒い影は僅かに
進行を躊躇う。

「 仕る！」

闇の中、災いとなる力を刃に加工し携えた混血の青年が癌カンケルと呼ぶ黒い影に向かい駆け出した。

第二七話 元凶なりし力

親父キリツグがイリヤの実の父親！？

突然告げられた驚愕の真実に眼前の銀髪を携えた少女を注視する士郎
心臓の鼓動が高鳴りその心音が耳元で聞こえる。

「私はもともとの聖杯戦争にシロウを殺しに来たんだよ…
だってそうでしょう？キリツグが聖杯を壊した、母様の命と引き換
えに顕現したそれを壊した 　それは裏切りよ。」

イリヤは卓袱台の上に置かれた湯呑の水面にその表所を映しながら
語る。

前回、言峰がイリヤを聖杯の憑代としたようにキリツグはイリヤの母、自分の妻を生贄にしたことになる。そこにイリヤの母の意思があったのかどうか知る術はない。

「母様を殺しその死を無駄にしてアインツベルンを　私を捨てて、そのせいで無理やりバーサーカーを召喚させられて無理やり契約させられた。」

聖杯戦争前に召喚されたバーサーカーが一步動くだけで私の体は全身が引き裂れた。」

通常、サーヴァントの召喚・維持は人間の身に余る奇跡と言ってもいい偉業だ。

聖杯戦争期間中は聖杯がサーヴァント召喚維持の手伝いをするためそこまで負荷が掛かるわけではないがそれが無いのだ。

しかも、バーサーカーは全サーヴァント中最も魔力消費の高いクラスだ。

現に今までバーサーカーを召喚した魔術師たちはイリヤという例外を除きすべて魔力枯渇により自滅している。

それを聖杯の補助なしで維持している。自滅行為だ

「そんな苦痛を何年も何年も受け続けていたのに当の本人は見知らぬ子供を拾い、実の子である私に向けられるはずの愛情が全部その子供に注いでるって言われたのよ。」

許せると思う?」

無理だ。

キリツグは間違いなくイリヤから見たら裏切り者であったし、その愛情が深ければ深いほど憎しみは深かっただろう。

そして自分は彼女から唯一の肉親を奪った存在だ。憎むなど言うほうが無理だ。

「ま、こんなところかな　もう夜も遅いし休みましょう。

聖杯戦争が始まってしまったんですもの休める時に休んで置かないと」

話を打ち切り、体上がるイリヤ。

当初は正座になれず痺れた足でこけていたが今ではそんな事があつたなど微塵も感じさせない優雅な流れるような仕草でその銀髪を靡かせる。

「なあ、イリヤ　今でも俺を憎んでるのか？」

襖をあけその奥へと消えそうになるイリヤの背中を見せながら聞く、聞かずにはいられなかった。

「ある意味、少しね　ねえ、士郎好きの反対はなんだと思う？」

イリヤは振り返りながらに自分に問いかけ、それに少しばかり頭を捻り答える。

「……………嫌い……………？　いや、違うな無関心だ。」

「うん、そうね。憎いってことは其れだけ関心が在るって事。

だからねシロウ、私の憎しみはねあの時、土郎がセイバーをバーサーカーから庇ったその時に揺らぎ始めてねタイヤキを食べさせてくれたあの時には完全に裏返っちゃったんだよ。」

苦笑しながら答えるその顔は少し大人っぽいお姉さんが聞き分けのない弟に言い聞かせるような表情かおだった。

「だからね、シロウ。私はシロウの事が大好きだよ

」

「くっ

逃のがしたか」

忌々しげに周囲を見渡しながら呟く東雲 亮
墓地公園に立ち並ぶ筈の墓石の群れはその面影を残してはいない

在るものはチェンソーで削られたように欠け、
あるものは縦に真直ぐ切れ目が入り、
あるものは粉末状まで細切れにされ、

東雲を中心としたある一帯はそこだけ濃硫酸でもぶっかけられたか

のように生物・非生物問わず泡立ち煮え滾る液体へと溶解していた。

しかし、東雲の立つその部分だけ地面が元のまま残っておりまるで洋海に浮かぶ孤島を連想させる。

ふうふうふうふう……よくアレを退かすことができた
のう若いの

突如として墓地公園全体に響き渡るようなしわがれた声が響く

「何者だ」

亮の瞳が動き、声の主を探す。

なに、そう殺気立つでない。ヌシの濃厚な殺気はこの老骨に
はちとき

「っ……!!」

“ヒュン ドガアアアアンっ!!……!!”

一瞬で両手に持っていた刃の柄を繋げると共にそれを霊弓：乙姫へと変化させあいていた左手に青白い光の矢を生み出し即座に流れるような動作で自分の後方に向け射る。

矢が着弾し、まるで大砲でも撃たれたように一帯が吹き飛ぶ。

「危ないのう…最近の若者はせつかちでいかん」

吹き上げられた粉塵の中に人影が浮かびカツンカツンと杖を突く音と主に一人の老人が浮かび上がる。

「なるほど、この気配　悪鬼にすら劣る化生の類か…」

その老人、間桐臓硯に向かい嫌悪の表情を露わにする。

「かつかつかつ　　そう言うでない儂とて又シのように不老であればこのような方法を取ったりはせん。」

「巫山戯るな　　貴様は醜悪だ。」

貴様のような奴が居るから生まれるのだ　　カンケルは」

「眩しいのう、又シの生き様は生の活力に満ち溢れておる。そしてその肉体も　　欲しい、欲しいのう。」

世界に渦巻く災力を無効化し老いることも朽ちる事もないその遠大な命　　その肉体」

「……なるほど、貴様が聖杯に賭ける望みは不老不死か下らんな」

「　　貴様には分かるまい。見よこの肉体を。」

刻一刻と機能を失い、悪臭を放ち、体は内側から溶け、こうしている間にも脳細胞は蓄えた知識を失っていくのだ。

る望みだ。

「 儂は蟲の苗床に為り続ける苦しみ、生きたまま腐敗する苦しみの末に悟った。」

自己の生存を求めるのは本能！それに理由など要らぬっ！！理由がなければ生きられないそれは唯の人形だ。苦しいのなら死ねばいい ？そんなものは人でないからこそ言えるのだ！違っかつ！？

【生命のアルティメット・ワン】 青竜に連なる真祖よっ！

「！」

“ ざわざわわ ”

老人の姿がザワツク、無数の擬態した蟲が蠢く。それを吐き気を押さえながら見据え一挙一挙、周囲の全ての情報を感覚器官から収集し不意に備える。

「 お前にこそ何が分かる……！」

亮の口から押し殺したような震える音が漏れる。

短い生に叶えたい願いにその全てを賭し駆け抜けた人間がいた。

絶望の中で見つけた唯一の宝を抱きしめ守るために懸命に闘った人間がいた。

死して尚、愛したものと居たいと己が魂の限界を超えて居続けた人間がいた。

人間は酷く矮小で醜い だけど、真剣に生きた人間の眩い、刃金の鈍い光沢とは違う一瞬の煌めき

花火のように咲いては散って行った人間たちを見てきた。

その輝きを眩しいと思いつつながら、焦がれながら生きてきた。
それはかつて失った光、掛け替えの無い何かを持つ人間の輝き、閃光のような人生を力いっぱい生きる命の鼓動。

その尊さに涙し慄れた。

その原点を忘れず、抱き続けた人間たちの壮絶なまでの生き様は熾烈にして鮮烈。

畏敬の念さえ覚える。

「自分が何のために生きたいのかさえ、その苦しみに何故耐えなければいけないのかさえも忘れて、同じように運命というレールの上を自分なりに生き足掻こうとする人々を喰らい虐げ、嘲笑う貴様はやはり醜悪極まりない」

「な、に？」

老魔術師の意識の奥底にある何かに東雲の言葉が杭となって突き刺さる。

その奥底に眠ってしまった何かは臍硯の自意識を揺さぶる。

「最早、門答は 無用」

鋭い視線を不定形に歪む老人に向けながら殺意をさらに込める。
そして漆黒のオーバーコートの内から取り出すは黒鍵、それを弓に
番い弦を引き絞る。

「貴様も元凶なりしもの　　ならば貴様に何が何でも死んでもら
う。」

「オルトスを生み出す為に、貴様のその罪　　貴様の命で贖
えっ！！！！」

人間ステータス表

東雲 亮

称号、死徒27祖第五位、鬼斬り、第四魔法使い、

身長175cm（軋間紅摩と同じ）

体重78kg（上記の人物より少し軽い）

年齢：肉体年齢 20 実年齢 67歳

起源 理解

属性、流、中立、調和

好きなもの：花鳥風月、真剣に生きる人間

嫌いなもの：半端な人間、衛宮切継、衛宮士郎、豆、漬物

天敵、プライミッツ・マードー、龍殺しの英雄

能力（封印時）

筋力B+

魔力B

耐久D
幸運C
俊敏A

スキル

真眼A :あらゆるものの本質を見ぬく洞察力もはや魔眼の領域
浄眼A :七夜の一族モノより能力が安定しており魂と其処から
生み出される生命力を視認できる。

生命力が形を変えたモノである魔力も見える。

剣術A :研ぎ澄まされたその剣はあらゆるものを切り裂く

魔術C :オーソドックスな魔術を習得、

【強化】【解析】【分解】【変化】【混合】【投影】【再構成】を
極めている。

霊術A :魔を払う霊力を使った業、霊力とは精神エネルギーの
こと

リミピッドチャンネルB :星と対話する能力、同じ能力を保有して
いる者同士でも会話できる(念動力Lv6)

影視A :情報認識、理解能力を極限まで極めた能力、第三者視
点をも用いて戦うことが出来る。また、相手の次の攻撃全てを揺ら
ぎとして視認できる。御神の神速のワンランク上の技能

料理A :うまい

龍魂覚醒 :受け継いだ龍の血を目覚めさせ能力を大幅に上げるス
キル

蒼き王 :人の中立としての極限

獣神変 :人外の力を表面化させて第二形態への変身を行う。生身
で軋間紅摩と同等の身体能力があるが所詮魔になりそこなっている
彼(未完成の紅赤朱)と獣神変を行った亮(人間と紅赤朱の完全な
融合)との間には超えれない壁がある。

戒放 :アムニスの花の実を摂取することでその実に応じたレベルで

星からの制限が解ける。

単純に生命力をプールし力を発揮するが、オルトスの実を摂取した時のみ完全に星からの制限が解かれ最強の存在となる。

その他

龍の血を引いているため龍殺しの概念武装にめちやくちや弱い（当たらなければどうということはないって言っただけ壊した）

ちなみに豆と漬物が苦手、（単純に味の好みで）

魔剣・死徒27祖の第11位スタンローブ・カルハインの2000年は浄化されず残り続けるとされる固有結界と化した怨念を剣の形に凝縮したもの。無数の怨霊や死徒を葬った結果その怨念を吸収し強大な力を得たため通常は五つに分解して使用しており霊刀・禍風を触媒に顕現化させ魔力の消耗を押さえている。

霊邪・高位の退魔士が己が精神を加工し生成した唯一無二の武器、魔力に頼らず超常の力を発揮し魔を狩る。通常は一人一つであり他人が使うこともできないが所有者が命と引き換えに他人に託すことで他者が使える事がある。

東雲は現在5つ保有している。

東雲のコート

通常は耐久力・防御力に難がある東雲がその弱点を補うために制作した聖外套

聖骸布で作られ、繊維にイブン・ガズイの粉末を混入させている為黒くなっている。通常は対魔力C程度の防御力だが物質と霊質を結びつける作用があり水銀で作った装飾が疑似魔術回路としても機能

し魔術効果を増幅する魔術礼装でもあり怨霊相手の場合は呪いを物理的な衝撃に変換し呪いによる霊障をそらす効果もある。

また魔術的防御以外にも対刃、対弾加工を施して肘から手首にかけての袖には強力なネオジウムを埋め込んでおり一時的に刀の刀身を吸着させ手を瞬時に空に出来る。(抜刀のときは瞬間的に磁極性の向きを変化の魔術で反転させ反発力で抜刀する)

衛宮 士郎 (マギウス)

身長 185 cm

体重 88 kg

年齢 20才

起源 贗作

属性：剣、中立、混沌

特技、家事、工作

能力

筋力 B

魔力 A

耐久 C

幸運 E

俊敏 C

投影(剣製)：士郎の得意とする魔術、刃物であれば見ただけで複

製を可能とする魔術。どんな剣を投影しようにも魔力消費は一定というチーと反則、ただし武器使用に関する反動はこの限りではない

解析：本来は魔力を対象に浸透させ物体構造を解析する魔術だが、士郎の場合は半ば本能的に作動し込められた概念など存在自体を解析してしまふ魔術というより魔眼の一種ともいえる技能

弓術：天性の才能、シリウスの弓を使った場合最低狙撃距離は8キロ

ブレイド・ロード
剣現：投影した武具を魔術情報に置換し魔導書に保存しておきそれを任意に引き出すことで戦闘中における武器の準備時間をほぼゼロにする魔術、検索・召喚管制は基本ユノが行っているが士郎自身からも行える。またすでに形あるものを呼び出しているので魔術回路にかかる負担、魔力消費はほとんどない。

ブレイド・メモリー
剣録：投影・複製した武具を魔術情報に置換し魔導書に収納する魔術、ゲートオブバビロンに近い、当然バルザイの偃月刀やロイガー&ツアール、カリバーンも保存されている。

アル・アジフが暴君の魔銃を収納したのと同じ魔術

冥王の契約：死者の無念を晴らすべく邪悪を打つマイナス思念の浄界者としての契約、左手に青い令呪として刻まれた

覚醒者の主：クトウグアの子、アフォームIIザアの支配者右手の甲に灰色の紋章が刻まれた。

魔術：強化の派生をあらかた習得してはいるがどれも本来のものは少し違う

礼装（魔具含み）

聖弓ウイリアム・テル：金色に輝く幾何学的な構造の弓、マスター
テリオンから貰った。

魔導書、黒の剣年代記：歴代の黒の剣の所有者の生涯と宇宙の真理
が記されているとされる書。通常の魔導書と違い黒の剣の所有者に
関する記述が増えるたび魔導書自体が成長する。

ストームプリンガー：黒の剣年代記に記された黒の剣、斬った対象
の生命力・魔力を吸い取り自分のモノにする呪われた剣。刀身が黒
くなるほど隙間なくルーンが刻まれており黒神木と同じ性質を獲得
している。吸収した力の総意にを持ち主に伝える。場合によっては
神さえも殺す対神武装

第二八話 イリヤ

触れるだけで壊れそうだった。

こんなにもか弱い命が、妻の腕アイリの中で、静かに息づいていた。

その柔らかさに、あたたかさに、惧れすら抱いた。

そして何より　　愛おしかった。

この想いを余さず漏らさず伝える術を僕は知らない。

幾千幾万幾億の言葉を用いても、この世界全てに存在する言葉をかき集め紡いでもこの想いを形にすることは叶わない。

まるで究極の芸術を形にしようとする画家、だがそれを形容できなくとも一向に構わない。

ただ、ただ抱きしめ、口づけて名前を呼ぶ　　ただ愚直に不器用に

其れしかこの胸に溢れる感情を君に訴える術を僕はそれしか知らないから。

そして、そんな事すら叶わない己の無力を、激しく呪う。

目の前の雪景色を見つめていた眼まなこを自分の腕に向ける。

傷だらけの掌

血まみれな掌

数えるのも馬鹿らしくなるほど引き金を引き殺してきた。赤子を抱けない…化け物の腕だ

この小さな命から母親を必ず奪う自分にこの子を抱く資格はなかった。

我等が往く道にあるのは死者の骸で舗装された地獄への一本道。それこそ僕たちが望んだ道、全てを平等に愛するが故に凡てを平等に殺す

それこそが僕、衛宮切継の道だ。

だけどノだから、

この子にだって、無数の道と無限の選択肢がある筈だ。次代のユステイーツア型ホームクルスを生み出すエキドナとなるべくして生み出されたこの子、聖杯として機能すべく調整を行われたこの子にも無限の未来がある筈なんだ。

第二八話 イリヤ

眼を覚ます。

眼を開き、床に敷かれた布団から上半身を起こし周囲を見渡す。

衛宮邸の比較的はずれに位置する自室で彼、衛宮士郎は数度、頭を振り意識を完全に起こすと布団から立ち上がり身支度を整え布団を

畳むと洗面所へと向かう。

「~~~~ブクブク……」

「……………」

絶句、たどり着いた洗面所は蛇口が開けられたまま水が流れ出て貯まり、そこに流れるようなプラチナブロンドの頭髮の少女、自分のもう一つの半身とでもいうべき人外の魔導書の化身が頭を突っ込んだまま水泡を吐き出していたのだ。

「……………台所で顔洗うか」

今見たモノを記憶から消去、見なかったことにして台所に向かう。

ユノは極端に朝に弱い、時折寝ぼけては洗面台に頭を突っ込んだまま熟睡するのだ。

一か月に一ダースほど

「ふわ~~~~おはようシロウ……」

「おはよう、イリヤ」

朝食の用意を行っていると思間のおろしき、今頃呑気に夢の世界（水中）もしくは三途の川で遊泳しているであろう少女と同じよに長

いがより純白に近い長髪を携える15、6歳ほどの年齢に達した妹分が重そうな臉を擦りながら現れる。

「シロウ…今日のゴハンなに…?」

そう言いつつ席に着く、相も変わらないその様子に微苦笑をひっそりと口元に浮かべる。

…と昨夜の会話を思い出す。

お兄ちゃん、私たち本当にキョウダイなんだよ

外見はキリツグには余り似てないな…：そういえばイリヤの髪は母親譲りって言って居た、恐らく母親似なのだろうがイリヤの楽しむときは楽しむという子供のような感情の起伏はやはりキリツグと親子であるという事実を認識させる。

自分とイリヤは血の繋っては居ない兄妹

「どうしたの、シロウ…?」

「ん、ああ…：すまない、少し考え事していたんだ。今日の朝飯は体が暖まるように卵雑炊にしてみたんだ。」

どうだ?つと居間と繋がっている台所から半歩振り向き問う。

「あ…、それでいい匂いがしているんだ」

台所から通う匂いにまだ見ぬ朝食に舌鼓を打つ義妹

自分はこの娘の最後の家族、幾ら魔術師の命題だからと年端もいかない娘に聖杯戦争などという重責を負わせ血みどろの戦いに放り込

むアインツベルン宗家の連中は家族などと呼べるものではない、認めはしない。

「んじゃもう少しで出来るから顔洗って来たらどうだ？寝癖立っているぞ」

「シロウが直して~~~~」

「仕方がないな」

「えへへ~~~~」

駆け寄り頭を差し出す妹分の髪を苦笑しつつ手櫛で解く

サラサラと流れるような銀髪が指の隙間を流れていく、くすぐったく目を細める少女

イリヤの嬉しそうな表情を見て思う、彼女の家族は自分だけなのだ。恐らく切継はこの子の事が心残りだった筈だ。今思えば度々外国へと出ていたのはイリヤ迎えに行くためだったのだろう。

キリツグから受け継いだものは夢だけでは無かった。このまだか弱くさみしがり屋な女の子を自分が守らずしてどうする。誰が守る。セイバーは救えたけど救えなかった、この手で守りたくて幸福にしたかった。

だが、其れはもう叶わない。

「ほら、出来たぞ。でもちゃんと顔洗ってシャッキリしてこい」

「うん！」

元気よく返事をする。と銀の少女は駆け足で台所から出てゆく、そして自分はそれを見送る

自分はセイバーの代わりにイリヤを選んだのかも知れない、という思考が脳裏を過る。ある意味それはどうしようもないモノかもしれない。

衛宮士郎はすでに壊れた存在、人を救うという原則に従い行動するだけ、感情や人格は後付けされたモノだ。

通常原則、人間が最も幸福にしたいと思う存在は自分自身である。人を愛することも自分が愛されたいから、人を救うというのも他者を救うことで自分自身をも救われるからだ。

だが、衛宮士郎にはそれがない。

最も幸福にしたい存在の席、そこが空白なのだ。一時期そこにはセイバーという存在を与えられたアルトリアという少女が居たが今は再び空席だ。今そこにイリヤが座ろうとしているのだ。

彼の世界最強の魔導士・大十字九郎なら陽性の笑みを携えてそれを笑うだろう。

彼がかつて自分に言った言葉が脳裏を過ぎる。

『大切なもの、それが在るのはいいことだぞ。だけどよ、そもそも衛宮士郎はその定義が曖昧すぎるんだ。』

理想を目指すのはいいがそれを目指すあまり自分の大切なものを蔑にしちゃあだめだ。そんなのは人間として最低で最悪だ。』

どこまで行こうと人であるが故に正義を体現する彼、彼の言い分は常にひどく正しい。

だからこそ彼の周囲には笑いが絶えない…爆音と銃声、巨大口ボも絶えないが

あの土蔵でのイリヤの言葉、彼女は知っていたんだ。正義の味方の
を目指した人間の結末を、だから俺にあのような言葉を投げかけた
のかもしれない。

もしかしたら…あの子から家族を奪った俺の贖罪とはイリヤを幸福
にすることなのかもしれない。

十年前の大火災の折、ただ一人生き残った俺

生き残った事に重責を感じ、この救われた命を誰かの為だけに使わ
なくてはならないと考えてきた。

『まったく…いいか！お前さんは人を助けるってことと命を救うっ
てことをゴツチャにしてやがるんだよ！！』

お前という日常そのものが救いになるってやつも居るだろう、人を
助けるって意味よく考えやがれ、このバカ弟子が』

再び師の言葉が脳裏に浮かぶ

あの時、その言葉の意味は分からなかった。だけど、今なら分かる
気がする。

正義の味方は、心も命も救ってやっと一人前だ。

そして大切な子が自分を求めている。応えることができなくては正
義の味方失格だ。

正義とはひとつじゃない、どれか一つに特定する意味なんてない。

ならば自分が正しいと思うことをやるだけで人は誰でも正義の味方になれる筈なんだ。だからキリツグが「自分は正義の味方になれなかった」と言っていたがキリツグが正しいと思ったことをやった結果ならキリツグだって正義の味方だった。俺はそう信じる。信じれるんだ。

「わあーーーーーっ！！！！ユノが洗面台で溺れながら熟睡しているっっっ!?!」

あ、忘れてた。

用語解説(前書き)

本作に出てくる用語を乗せておきます。

あと、27話・28話を一部修正しました。

用語解説

聖杯戦争：通常50年の周期で起きる願望器、聖杯の所有者を決定するバトルロイヤル。

7人の魔術師が聖杯により選定され、儀式を始めた始まりの御三家、間桐、遠坂、アインツベルンのそれぞれの代表者を一名づつ、その他の4人は聖杯を求める魔術師から選ばれる。

尚、聖杯の魔術師判定は魔術回路の有無のみであり聖杯戦争開始の期限に間に合わない場合全く関係の無い一般人が選ばれることがる。

この戦いを生きぬいた最後の一人にあらゆる願いを叶える聖杯が授けられるといわれるがその正体は

魔術師：この世の不可能を可能とすることを至上の命題とする探究者。魔術師は根源の渦と呼ばれるこの世界のあらゆる概念の起源をめざす。この世のすべての記録たるアカシックレコードも根源の渦の一側面にしか過ぎない。

魔術：世界に隠された神秘を具現化させる法。基本的に魔力と呼ばれる生命力が形を変えたモノを燃料に引き起こすもので、電気が熱や光、動力などと形を変えるのと大まかには同一

また魔力の生成には魔術回路と呼ばれる疑似神経回路が必要でこの器官の有無が魔術師の素養を分ける。魔術回路は器官であるが故に個人個人でその本数が違い、その数が多いほど魔力の生成量が増え行使できる魔術という処理への分担が可能となるため魔術回路の数はそのまま魔術師の才能としても直結する。

基本的に魔術師は交配や魔術的処理によりその数を増やし次世代へと受け継がせることを責務としている。

魔術回路：上記に記したように魔術師の才能の大部分を満たす要素。魔術を作動させることの出来る体の部分を指しているだけ。そのため魔術を使うという事は肉体本来の用途とは別の用途に用いているという事なので魔術師は幻痛や悪寒など様々な苦痛を強いられる。

主人公こと、衛宮士郎は27本だが魔術師の平均が20であることを考えるとかなりの才能を有していることとなる…が本編では4本しか使えていない。（初代では破格）

回路数は蒼崎橙子は20程度、遠坂は計70と単純比較すると凛は士郎の二〜三倍の才能を持っていることとなる。（ちなみに魔力貯蔵量は士郎が20〜30に対して蒼崎橙子は25、遠坂姉妹は500、アーチャーは810、セイバーは1000、シエル先輩は5000）

魔法：科学で再現できない現象のこと、魔術師の目標といっても間違いない秘法で全部で5つ存在していると言われ第6魔法は誰も知らない、辿り着いていないので幻の第6法といわれている。

また魔法を習得した存在は現在4人いると言われているがその半分近くが不明

第一魔法 創生

無から有を生み出す秘法、ケイネス・アーチボルトが目指しているのはこれだとか

第二魔法 並行世界の運営

遠坂家の目指す魔法、キシユア・ゼルレッチ・シユヴァインオーグが魔法使いのの代名詞としてこの魔法を習得しているが800年前くらいに紅い月にかまれめつきり老け込み全盛期ほどの力は出せないとか：現在は呑気にあちこちの並行世界をうるちよろしているらしい。

初代遠坂は武の極致から根源へ挑もうとしていたがひよっこり現れたジジイに拉致られ魔術の世界へと足を踏み入れた：廃人が大成かの択一の修行で廃人に為らなかつた結構頑張ったお人

第三魔法 魂の物質化

もとはアインツベルンが到達したが、現在は失われたとされている（使い手それ自体がどうなったかも含めて不明な点が多い）

物質界において唯一永劫不滅でありながら、肉体という枷に引きずられる魂を、それ単体で存続できるよう固定化する。精神体のまま魂単体で自然界に干渉できるという、高次元の存在を作る業。魂そのものを生き物にして、次の段階に向かう生命体として確立する。端的に言えば、真の不老不死。

ロアのは単なるコピーで別物、短時間なら魔術でも可能らしい。ちなみに不老不死は『老いず、老いによる死が無い』状態を指すので何をしても死なないとは全く別の意味（それは不死身）

第4魔法 時間運営

キシユア・ゼルレツチの第二魔法を横と見るならさしづめ縦の魔法対象の時間操作、好きな時間軸への転移など……第二魔法と被る技術が多いせいも愉快魔術礼装カレイド・ステッキにも一部この魔術理論が使用されている。

第五魔法

蒼崎の三代が掘り当てた魔法（青子・橙子は6代）。青子の性格と他の魔法との関係を考慮すると有を無に還すものと思われる。基本的に有を無に変えることも無から有を作り出すことも不可能。対象の破壊は無への回帰ではないかと思うかもしれないが消えたのはその存在だけであり、その存在を構成している最小単位の存在はあり方を変えただけと推察できる。

ぶっちゃけ、この結果を見ると魔術師の実力は血統に左右されない事の証であるともいえる。

アルティメット・ワン

アリストテレスとも呼ばれる生態系における唯一最強の一体。

星の意思の代弁者であり、その星全ての生命体を殲滅できる能力を有する。

タイプ・アース詳細不明。

かつて地球は月の王・朱い月のブリュンスタッドを参考にして地上の王を作ろうとしたが、ついぞ生み出す事はできなかった。(アニメ真月譚 月姫の特典絵本より)

その失敗作が真祖である。『星の代弁者』たる真祖の特性から、この時生み出そうとした地上の王こそが地球のアルテミット・ワンだったと見て間違いないだろう。

本作では既に誕生しており、陰陽五行の木…つまり生命を司る青竜とする。

ガイアの意味とは別に動いており、ガイアが敵…月のアルティメットワンこと紅い月のブリュンスタッドを基に真祖を生み出した事、地球に飛来したタイプマーキュリー・ORTを警戒し対真祖/アルティメットワン用の攻性免疫抗体生物を生み出す。

これが東雲の先祖にあたる。

真祖が人間ベースに作られた事を習い、青竜に生み出された一族も人間ベースだが青竜の生命属性を強く受け継ぎ魂が少量の生命力から更なる生命力を生み出す様に生きようする意思に呼応し無限に生命力を発振する生体器官、龍玉を体内に持つ、また龍玉は無限に情報を蓄積するという星と同じ機能を有している。 ぶっちゃけ龍玉= Gクリスタルと思っている

タイプ・ムーン：朱い月のブリュンスタッド形態こそ人間と同じような姿をしているが、桁外れの力を持った生命体。月のアルテミット・ワンであったが、死の星となった月を捨て、地球に降り立った。

地球を真世界に戻すために活動している、と見せかけて地球を月の代わりに自分の領土にしようとしていたらしい。

現在では魔導元帥ゼルレッチによって滅ぼされている。

サーヴァント：聖杯の力によって現代によみがえった古今東西の英雄、そういう伝承が存在するだけで十分であり真偽は関係ない。

時間の流れに逆らった存在であり、現代の魔術師の使い魔という容に当てはめる形で現界しており、サーヴァントにとってのマスターとは時と死の修正力に抗うための錨もしくは命綱でサーヴァントを維持する聖杯はその綱か鎖そのもの

また魔術によって現界しているため知名度で能力値が強化されるが現役以下に下がることは無い。（例外としてマスターからの魔力供給が足りなければ身体がうまく動かせず戦闘力が低下する）

また肉体はエーテルの結合密度を高める事で実体化させ、この肉体維持にはその時代の魔力でなければならずいくらサーヴァントが魔力を自身で生成できるとはいえ仮初の肉体の維持できない。

聖杯が用意するクラスに当てはめられ召喚されそのクラスは常に7つ。重複は無い…が毎回一つ二つはイレギュラークラスが召喚されており正規のクラス7つが揃ったのは第五次・第4次聖杯戦争だけらしい

第二九話 二人

ピンポン

唐突にそれは鳴り響いた。

朝食を終えまったりと寛いでいたところに呼び鈴が鳴らされたのだ。

「誰だろうな……？」

新聞の勧誘などにしては些か時間が早い、桜は何故か今日はまだ見ていないが曇りガラスの向こうの人影は男のものであり桜でないことは確定だった。

扉を開くと其処にいた予想外の人物の予想外の格好に自分の目は驚愕に見開かれた。

「お…お前…アーチャー!!何やってんだ!?!そんな格好して!?!」

「む、リンが昨夜言っただろう。今日、この屋敷に来ると」

片眉を上げ唸る赤い弓兵、しかしその姿は黒いシャツにジーパンと私服姿でありその手にはポストンバッグが握られていた。

「全く…彼女はサーヴァントを小間使いか何かと勘違いしているのでは無いのかね？」

貴様に言っても詮無きことでは在るが…それと間違えるな今の私はファントムだ。亡霊に過ぎん」

ため息と共に頭を振るアーチャー

小間使いとしても護衛としても使える亡霊って使い勝手よ過ぎないか……？

第二九話 二人

西洋風の住宅が並ぶ街並みを赤を基調とした衣服を纏った遠坂 凜が歩んでいた。

その手にある筈の荷物は殆どない、既に彼女のサーヴァントに輸送をお願いしたからだ。

前回同様に

ふと通りすがりの角から一際大きな洋館が目に入った。

土着の魔術師の家系である間桐の屋敷だ。

あそこには遠坂 凜の気になる人物がいる、勿論男ではない

故に昨夜不可解な再開を果たした間桐 慎二は除外する。

角から覗き込んだ洋館の前から今まさに外出しようとする女性、自分の後輩にあたる間桐桜が屋敷の外門を閉じようとしている。

彼女こそ、遠坂凜の気になる人物である。

思わず角の堀に身を隠す。

バツタリ、偶然を装い話しかければ上々だ。

第三者から見れば

なんだ？この思春期、真つ只中に気になる異性と話す切っ掛けを作るのに奮闘する哀れな少女…になるだろうが彼女は至って真剣そのもの、事は其れほどにデリケートな問題なのだ。

だが、今まさに出発しようとする桜に漆黒の外套を纏った男、バースーカーのマスター東雲 亮が近寄ったのを凜は見た。

「どちら様ですか…おじい様は屋敷の中…ですが…」
「いや、要件は君にある… 間桐 桜」

突如として現れた青年は言った。自分に要件があると。この青年が近づいてからか腕の一部が疼く、令呪の共鳴反応だ。つまり眼前の人物は聖杯戦争のマスターだ。

「そう、いきり立つな。別に今、君を如何こうし様という気はない。俺は唯、忠告に來ただけだ。黒き聖杯の守り手よ。」

「っ!!」

今回の聖杯戦争は周知の事実であろう、異常事態だ。

本来、五〇年周期で行われる聖杯戦争　しかし前回の第五回は第四回から十年、今回に至っては三年だ。そして異常事態は周期だけではない。

聖杯、その奇蹟を起こす水を受け止める器、これもまたイレギュラーだ。

故に聖杯を手に入れんと望むのなら、聖杯の守り手を手に入れるのが手っ取り早い。

だが、桜の目の前に直立する青年は桜自身に今のところ要は無いらしい

「俺の起源は、理解することにある。あらゆる情報の断片を統合し、真実を見出すことはそう難しい事じゃない。だから解る、俺は君が人間である内は手出ししない。故に」

フツと青年が動いた、そして間桐桜の耳元で囁いた。

「人間として死にたいのなら…死ねる内に死んで置け」

そう言い残すと青年は桜から離れた。

その時、青年の背後から語りかける声があった。

「桜、如何したの？何か困っているようだけど　それと其処のアンタ、昨日ぶりね、こんな処をうるついで如何したのかしら？」

遠くから見ていた凜だ、その言外の拒絶の意思を感じた青年が肩を竦める。

「なに、道を聞いていただけだ。何せ、初めての街なのでね勝手が少々分からず困っていたところを彼女に助けて貰っただけだ。

では、助かったよ御嬢さん。」

青年はそう言い残し、外套の裾をはためかせながらその場を去る。

凜は自分の真横を通り過ぎ、そして去っていくその背中を睨みつけながら見送った。

「……何よあいつ　桜、あいつになんか変な事言われなかった！？」

凜は桜に詰め寄り問いたです。

そんな必至な凜の様子に桜は苦笑しつつも否定した。

「大丈夫ですよ、遠坂先輩…本当に道を聞かれました。」

「そう、よかった…桜、久しぶりね。……………元気だった？」

問い返すついでに尋ねる。

すると桜は小さな野花のような笑みを以て答えてくる。

「はい、遠坂先輩もお元気でしたか？」

「まあ、元気といえば元気だったわ……………」

僅かに遠い目で過ぎ去った過去を見た。

ゲームを知らないというだけで切れる新しい後見人たる教師に、プロレス技をかましてくるご先祖様の同門の子孫、ネチネチと厭味つたらしい教師の数々

その全てに時にヲタクと断言し、キャットファイトを行い、嫌味に對し真正面から傷口にハバネロを塗りこむ様な辛口で蹂躪する口と手そして魔術による殺伐（平和）な時計塔での日常

実に生きがいのある日常ではないか
若干、憂鬱な笑みが漏れ出てしまうが

「遠坂先輩、大丈夫ですか？眼が虚ろですよ。」

「大丈夫よ…大丈夫よ　あんな引きこもりオタクや高飛車なプロレスお嬢様なんか粉碎して見せるわ」

「はあ…イギリスってなんか凄いですね……………」

若干、的外れなことを言っ居るが別に構わないだろう。

其れよりも

「まあ、それはいいわ。桜、今日は休みだしアンタ、土郎の所行くところでしょう。どう？よかったら一緒に行かない？」

「はい、ご一緒させていただきます。」

「そう、良かったわ。じゃあ久しぶりに私の料理食べさせてあげる。」

「ほんとうですか！先輩の中華は美味しいですから楽しみです。」

そう言って微笑む“後輩”は可愛かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7521m/>

Fate/ Black of Blade ~ 終焉を呼ぶ聖杯戦争 ~

2011年12月30日01時51分発行